

濟定檢省部文

4a
220
文12

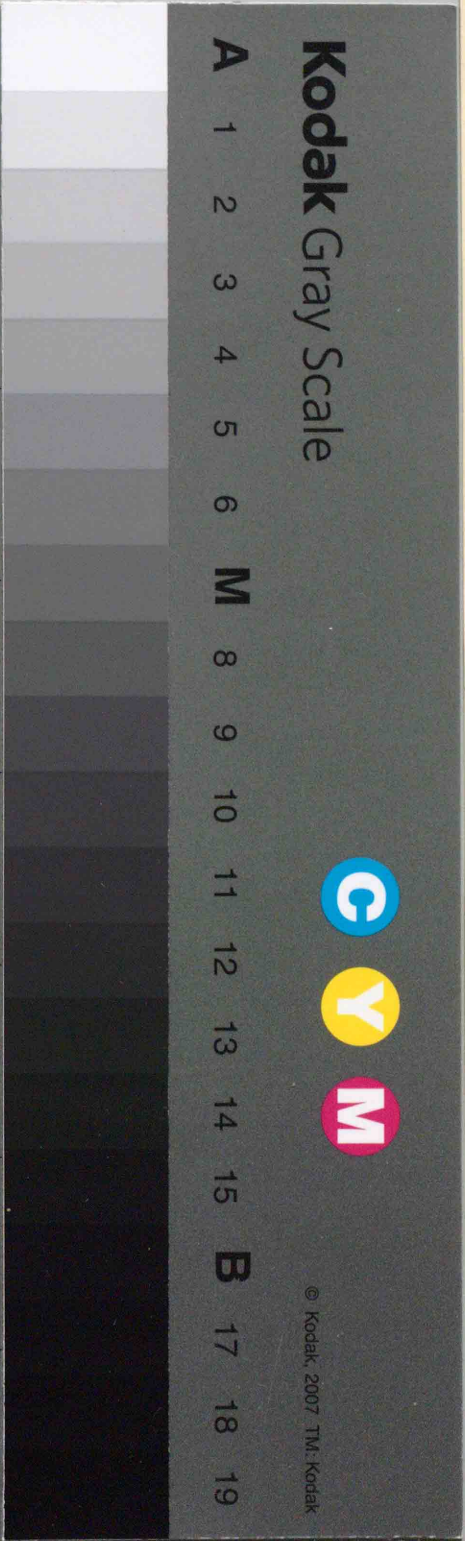
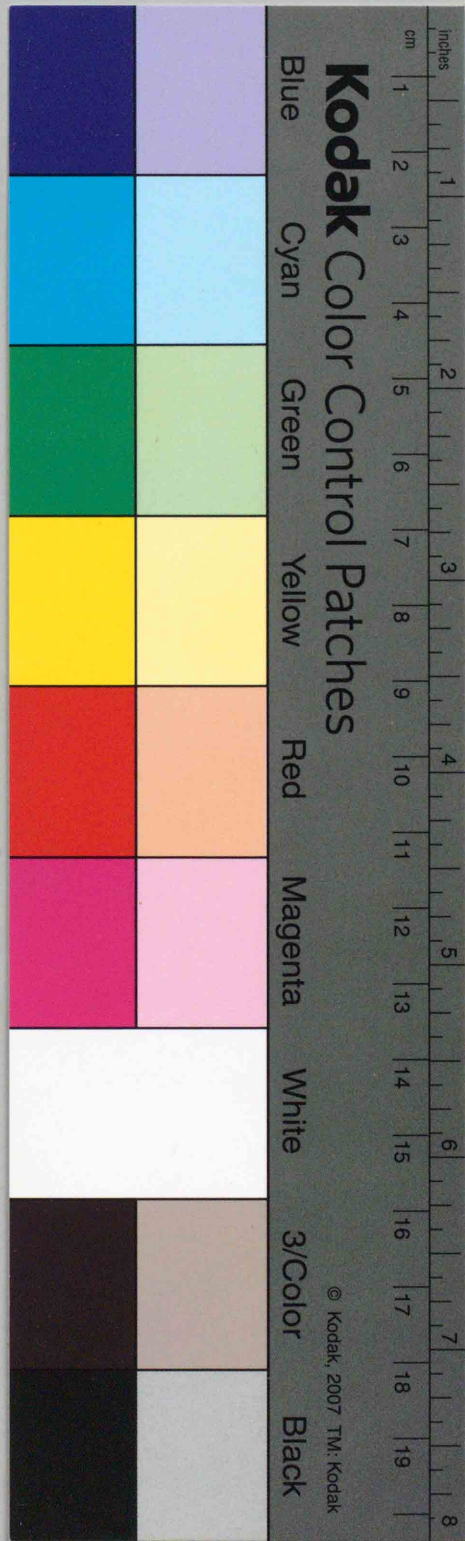
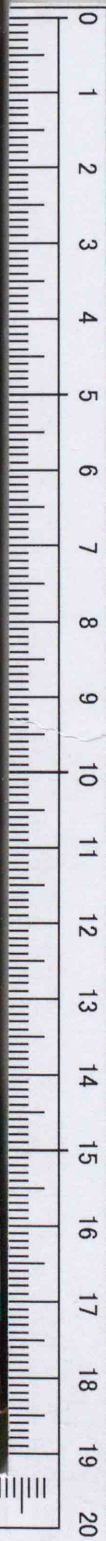
訂三 史歷洋東等中

士學文
著等并松



京東
版藏館文寶

教科
2
41-
20000



43017

教科書文庫

4
210
41-1924
20000
89441

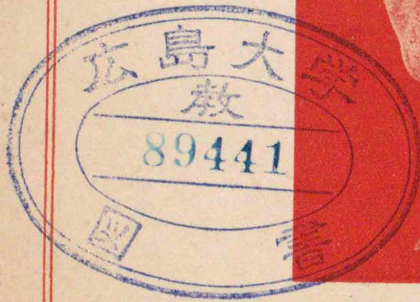


日九月一年三十正大
濟定檢省部文

教科書文庫
4
210
41-1924
2000089441

訂三 史歷洋東等中

士學文
著等井松



京東
版藏館文寶

教育学科
資料室

4a
220
大12

三訂中等東洋歴史序言

大正六年の再訂中等東洋歴史を更に修正して、ここに三訂中等東洋歴史を公にす。今次の修正は、主として最近事件の記事を増したるに在れども、その他前版の本文を補訂したる處あり、又挿圖の改正を試みたるものもあり。再訂中等東洋歴史を採用せらるる諸家にして、懇篤なる助言を寄與せられたるもの少なからず。今その全部を採つて修正の用に供する能はざりしを憾むと雖、諸家の勸告に由つて、逐次修訂を重ねるを得るは、著者の深く感謝して措かざる所なり。

大正十一年十月

著者

多く前版と異なる考案を採り、以て新に本書を撰述するに至りしなり。今や新に本書を公にするに方り、本書撰述の要項につきて、豫め開陳の必要ある諸件を掲ぐるに左の如し。冀くは、諸家更に又高教を垂れ、本書をして益々完璧に近づかしめたまはむことを、是れ著者の切に望む所なり。

章節の區分につきて、各章各節の長さをして甚だしき相違なからしむることに意を用ひたれど、古き時代は自ら短く、新らしき時代は自ら長きを免れず。

地圖に記入せる地名は、成るべく書中に現はるるものを取りたれど、簡明を失はざる限り、本文に現はれざる他の必要なる地名を加へたるものあり。又地圖は、一定の年代に係るものを示したるにあらずして、専ら地名を現はすことを旨としたり。年表も、本文に相應することを勉め、只事件に關する年代のみならず、有名なる人物の生卒年代並に年齢をも記入したり。國史に關する年代を附記したるは、東洋史と國史の年代對照の便を思ひてなり。

年代は、西曆紀元を用ひ、その右側に、これに相當する吾邦の年代を註記したり。但し吾邦の年代は、何天皇何年又は何年號何年と記すのみならず、著名なる人物事蹟を標準としたる所もあり、例へば、七一三年の右側に和銅六年と細註したる外に、一一一五年には源義家死後七年、一一二七年には保元の亂前二十五年と註したるが如し。なほ國史との對照を早からしむる爲め、成るべく年表を利用するを可とす。

歷代帝系表は、本文と對照する便宜を圖り、必要の場所に切れ切れに挿めり。挿畫は、直接に本文に關係するものの外、或る時代、或る事件又は或る人物につきて興味を添へ、又は本文の紀事に連繫せる他の事項を説明するに足るべきものをも含めり。筆蹟も亦同例なり。地名人名の呼び方は、成るべく普通に行はるるものに從ひ、その書き方も、多くは普通

に用ひらるる漢字を採れり。

大正二年十月

著者

六五二六六

書

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the characters '書' (Book) and '目次' (Table of Contents).

三訂 中等東洋歴史

目次

第一編 上古史

- 第一章 上代の支那……………一頁
- 第二章 春秋の世……………三
- 第三章 戦國の世……………五
- 第四章 周代の文化……………八

第二編 中古史

- 第一章 秦の一統……………一二
- 第二章 漢の創業……………一四

年表 (其一)

第三章	前漢の興隆	一六
第四章	前漢の末世 後漢の興起	一九
第五章	古代の印度 佛教の興起と其の東傳	二一
第六章	後漢の盛衰	二五
第七章	三國の分立	二七
第八章	晉及び胡族の侵入	三〇
第九章	南北朝及び隋	三三
年表 (其二)		
第十章	漢魏晉南北朝の文化	三六
第十一章	唐初の強盛	四〇
第十二章	唐の中世	四五
第十三章	唐の衰亡	四八
第十四章	唐代の文化	五一
年表 (其三)		
上古史中古史綱要		

第三編 近古史

第一章	五代 渤海の興亡 契丹の興起	五六
第二章	宋の一統 宋遼西夏の關係	五八
第三章	宋の神宗の改革	六一
第四章	金の興起 宋金の關係	六四
第五章	宋代の文化	六八
年表 (其四)		
第六章	蒙古の勃興(上)	七一
第七章	蒙古の勃興(下)	七四
第八章	元の極盛	七七
第九章	元の衰亡 帖木兒	八一
第十章	明の一統と其の盛世	八四
年表 (其五)		
第十一章	明の中世及衰亂	八七

第十二章 莫臥兒帝國 歐羅巴人の東航……………九一

第十三章 元明の文化……………九五

年表 (其六)

近古史綱要

第四編 近世史

第一章 滿洲人の勃興 清の一統……………一〇〇

第二章 清の盛世(上)……………一〇四

第三章 清の盛世(下)……………一〇八

第四章 英吉利の印度經略……………一一一

年表 (其七)

第五章 清國と英佛の紛紜並に長髮賊の大亂(上)……………一二五

第六章 清國と英佛の紛紜並に長髮賊の大亂(下)……………一二八

第七章 露西亞の滿洲侵略……………一三三

第八章 露西亞の中亞細亞侵略 伊犁事件……………一三五

目次

第九章 佛蘭西の印度支那經略 清佛戰爭……………一二八

第十章 清國に對する諸強國の壓迫……………一三三

第十一章 清朝の滅亡……………一三九

第十二章 支那共和國……………一四三

年表 (其八)

近世史綱要

目次終

第一章 上代の支那 100

第二章 支那の黄河流域と印度の恒河流域と 100

第三章 支那の文化と漢人 100

第四章 支那の歴史の中心 100

第五章 漢人 100

第六章 支那の文化と漢人 100

第七章 支那の歴史の中心 100

第八章 漢人 100

第九章 支那の文化と漢人 100

第十章 支那の歴史の中心 100

第十一章 漢人 100

第十二章 支那の文化と漢人 100

第十三章 支那の歴史の中心 100

第十四章 漢人 100

第十五章 支那の文化と漢人 100

第十六章 支那の歴史の中心 100

第十七章 漢人 100

第十八章 支那の文化と漢人 100

第十九章 支那の歴史の中心 100

第二十章 漢人 100

三訂中等東洋歴史

第一編 上古史

第一章 上代の支那

支那文化と漢人 支那の黄河流域と、印度の恒河流域とは、共に東洋に於ける文化の發現地にして、中にも支那の文化とその勢力とは、東洋諸國に廣大なる影響を及ぼせり。支那の文化を産みたるものは漢人なり。今より少くとも五千年前、漢人は既に黄河の流域に繁殖し、南方の苗といへる民族を壓迫して、次第に揚子江方面に領土をひろめ、又東

支那は東洋歴史の中心

漢人

夏王朝
殷王朝

革命

1 後世の長安
にて今の陝
西省長安縣
武王の封建
周の強盛
宣王の中興

北に向つて開拓を進めたりき。堯舜及び夏殷周。堯と舜とは支那上古の明君と稱せられ、禹は黄河の水害を治めて大功ありしといふ。禹は夏王朝の始祖なり。夏王朝は四百餘年にして殷王朝に滅ぼされ、殷王朝は六百餘年にして周の武王に滅ぼされ、周王朝之れに代れり。漢人は古へより暴虐の天子は天の命にそむく者なりと謂ひ、之れを滅ぼして別に善良の君を立つることを憚らず、之れを革命といへり。

周の強盛 紀元前一二二二年、周の武王位に即きて鎬京に都し、一族功臣に土地を分ちて諸侯となしぬ、所謂封建これなり。武王より成王を経て康王に至るまで、約七八十年の間、周國甚だ強盛なりき。
周の東遷 その後、周の勢衰へ、宣王一たび國力を恢復し

周代の陵
陝西省咸陽
縣北に在り

1 後世の洛陽
にして今の
河南省洛陽
縣

2 この間の歴
史が主とし
て春秋とい
ふ書に記さ
るに由つて
なり

たれど、その子幽王は、遂に西方の蠻族に攻め殺さるるに至れり。幽王の子

周王略系

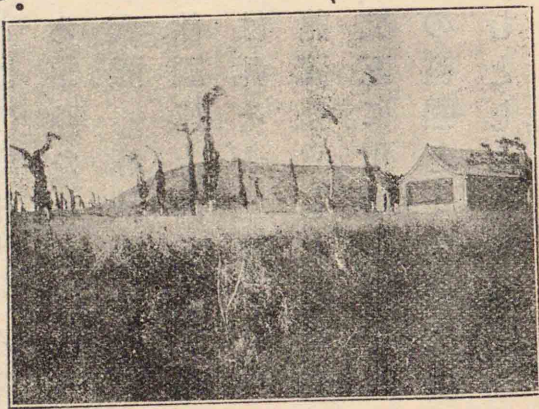
武王¹ 成王² 康王³ ……(この間七王) ……
宣王¹¹ 幽王¹² 平王¹³ ……(この間十二王) ……
敬王²⁶ ……(この間五王) ……威烈王³² ……(この
間四王) ……赧王³⁷

平王は蠻族の害を恐れ、紀元前七七〇年、都を東方の洛邑に

遷しぬ。これを周の東遷といひ、周の建國より三百五十餘年後のことなり。

第二章 春秋の世

霸業 周の東遷以後、凡そ三百十餘年間を春秋の世と稱す。その頃、周王の威力衰へ、諸侯の強大なるもの相代りて

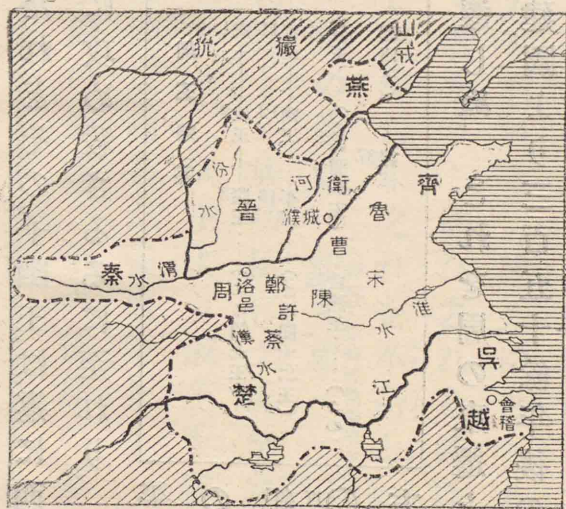


周室の衰微

五霸

無力の王室を輔け、諸侯の長となり、蠻夷の侵入を防がむことを試めり。これを覇業といふ。齊の桓公、晉の文公、楚の莊王、吳王夫差、越王句踐は五霸と稱せらる。晉の文公が楚を城濮に破り、越王句踐が吳のために會稽山に苦しめられたる事などは、五霸相代れる間の著名なる事蹟なり。

列國の交際 春秋諸侯の數は百二十餘國に上れども、其の中の大國は、凡そ十二なりき。それ等の諸國分立して、互に交際を通じ、又互に相争ひける間に、各、自國の富強と治の成績とを誇らむとしたりしかば、こ



春秋要圖
十二大國

文化の競争

人物選用

世間の活氣

秦楚燕齊趙
魏韓の七雄

1 田氏が新に
建てたるも

れが爲めに、一般文化の進歩を促がしたる有様なり。

世相 されば、列國互に勢力と文化とを競はむとして、材能ある人物を招き、有用の事業を奨めたれば、人、立身の途開けて、世間の活氣おのづから加はれり。従つて、人は各自得意の技能を振ふことを得、又自由に言論を公にするを得たり。

第三章 戰國の世

戰國七雄

春秋の後凡そ二百餘年間を、戰國の世といふ。戰國の世となりては、列國の秩序頗る混亂し、秦楚燕の三舊國と齊趙魏韓の四新國とは、各、強大となりて、激しく相争へり、これいはゆる七雄なり。その中、秦は函谷關を門戸として、西方險要の地に據り、戰國の初頃、商鞅の政治改革に由り

秦の強大

函谷關地方の地形

蘇秦

張儀

文那古代の戦士

六國の衰因

秦の攻勢

て、富强他の六國を壓するに至れり。

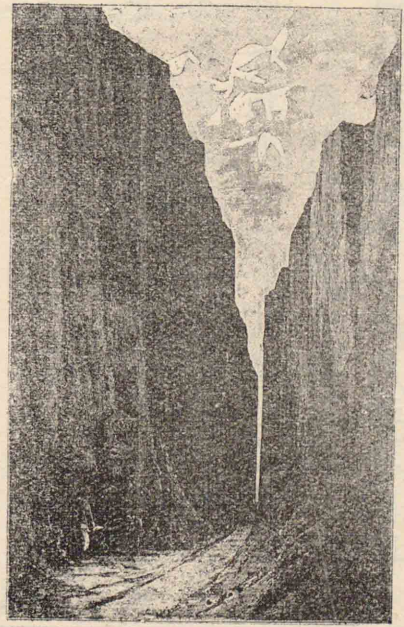
合從連衡 是に於て蘇

秦は合從の策を唱へ、六國の同盟を作りて秦を攻めさせけるに、その友張儀は連衡の計を立て、六國をし



て各、秦に仕へしめき。これより合從連衡の策士多く、現はれ、六國の君主は其の説に惑ひて、一定の方針なく、賢臣名將ありと雖これを用ひること能はざりき。

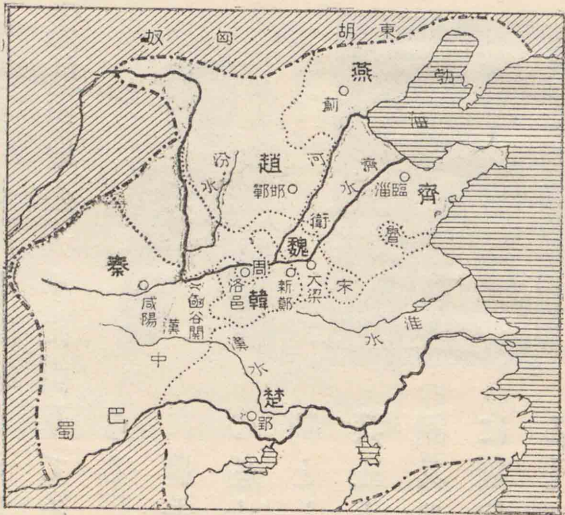
秦の一統 秦は地形の利を占め、東方の紛争を外にして、頻に地を擴め富を作りたりしが、六國の疲れたるに乗じて



周の滅亡 (三十七五八 百六十七年)

戰國要圖

秦の始皇帝の支那一統



大河の流域を包含するに至れり。秦といふ國名は、後に印度に傳はりてチナと呼ばれ、チナを漢字に寫して支那と書するに至れり。

兵を東方に進め、紀元前二五六年、先づ周の王室を滅ぼしたり。秦王政に至りて、李斯の策を用ひ、東方六國の君臣を離間し、ついで之れを攻め、十年の間に六國を滅ぼして、紀元前二二一年、(孝靈天皇七十年) 支那一統の業を成せり。秦王政は即ち名高き始皇帝のことなり。秦一統の頃には、漢人の領土大にひろまり、黄河、揚子江二

(孝靈天皇三十五年)

第四章 周代の文化

官制

田制

兵制

農具に象
れる貨幣
畫像の人物
の手にせし
器具と貨幣
とを對照す
べし

貨幣

制度 周代には、朝廷の官制も大に備はり、冢宰トウサツ政治の
大司徒トウシ民政、大司馬トウシマ軍政、大司寇トウシコウ司法、大司空トウシク土木を設け、諸
侯は領地の大小に由りて、それぞれ公、侯、伯、子、男の爵を授け
らる。田制には井田セイデンとして、田地を平均
に農夫に分配する法を設け、その收穫
の約十分一を納税せしむる事とし、兵
制としては、農夫は事あらば召されて
兵士となり、事終ればまた農に歸り、所
謂兵農一致の姿なりき。貨幣もすて
に周代に行はれ、その形は農具に象れ
るもの、刀に象れるものなどあり、銅の



學校と六藝

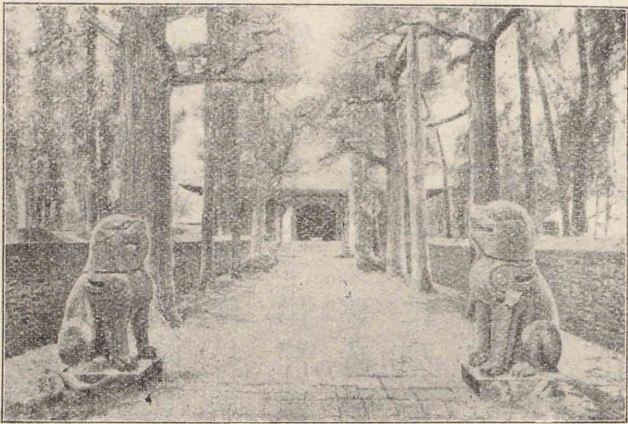
文字の變遷

文字

孔子の墓
地
今山東省曲阜縣に在り

圓錢も亦用ひられたり。

教育 周代には學校の設けありて、其の教科は禮樂射御書數の六藝なりき。



禮は秩序を正し
うし、樂は人情を
和らげ、共に教化
に必要なもの
として重んぜられたり。文字も上
古より次第に發達して、教育に缺く
べからざるものとなりたれど、その
形は、今日のものに同じからず、また
紙と筆墨と無かりし間は、文字は、竹
片、木札に刻まるるを常としたり。

草書	行書	楷書	隸書	篆書	古文
𠄎	上	上	上	上	上
𠄎	日	日	日	日	日
𠄎	山	山	山	山	山
𠄎	魚	魚	魚	魚	魚

孔子の事業

孔子 教育のことにつきて、春秋の末頃魯の國に孔子名丘きといへる偉人現はる。孔子は、修身治國の道を諸侯に説きて、世の亂れを濟すはむと欲せしが、其の説遂に用ひられず、退いて弟子を教育し紀元前四七九年(懿徳天皇三十二年)を以て歿したり。戰國の代に、孟子マウ荀子ツン出でて、孔子の學をひろめ、其の學は後に儒教と呼ばれて支那政教の基礎となりぬ。

孟子・荀子 儒教

老莊の學 楊子 墨子 法家

諸學説 然るに列子リ莊子チュウは、世事に心を惱ますことなく、何事も自然の運行に任せて干涉を加ふべからざるを唱へ、その主旨は老子ラウに本づくといへり、是れ所謂老莊の學にして、後世、儒教と並行して支那思想の一要素を成し、この學説に附會して、後に道教テウといふもの起れり。また楊子ヤウは、利己の説をひろめ、墨子ボクは極端なる博愛の主義を唱へ、各、亂世に處する道を講じぬ。外に法家ホウとて、商鞅カウ韓非カンの徒あり、専ら

縱橫家 兵家

法令を以て國を治むる術を述べ、縱橫家ジュウは、列國を統一する計を論じ、孫子ソン吳子ウの如き兵家ヘイは、軍隊運用の法を究め、いづれも戰國の世に實用せられたり。

第二編 中古史

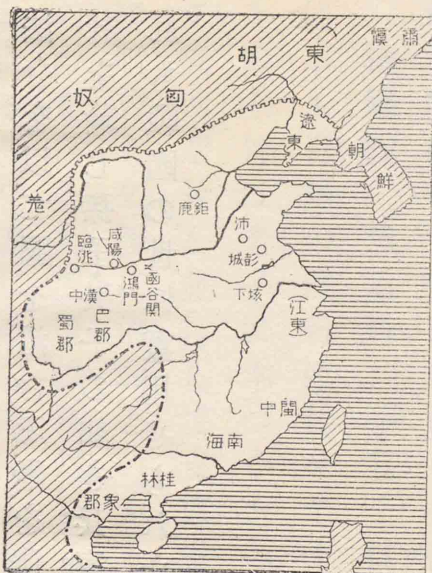
第一章 秦の一統

郡縣の制

1 今の陝西省
咸陽縣

秦代要圖

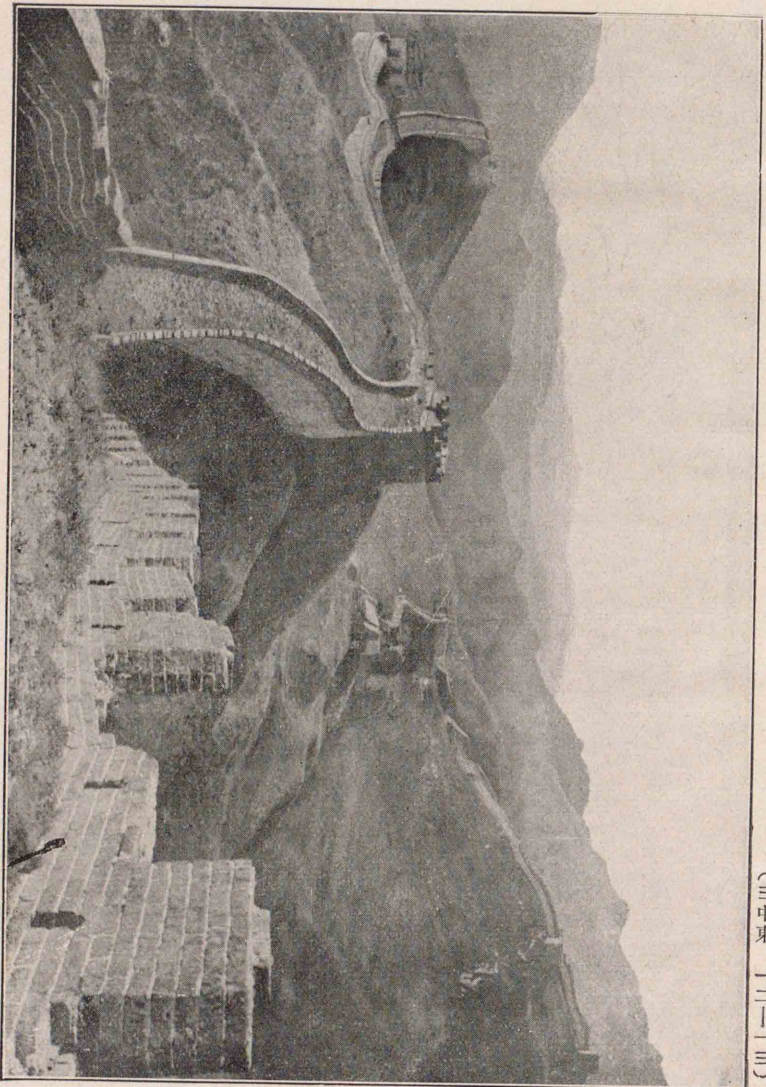
威壓政策



始皇帝の政策 秦の始皇帝は、(一)李斯の言を用ひ、前代の封建を更め、全國を郡縣に分ちて己れの直轄となし、(二)民間の兵器を收め、富豪を國都咸陽に徙して叛亂の源を塞ぎ、(三)國中を巡幸して天子の尊

きを知らせ、(四)政治を評論する輩を殺し、(五)民間の書籍を焼き棄つるなど、専ら人心威壓の政策を執れり。

(三)中東、一二一三



景現の城長里萬

本圖は、萬里長城の中、北京の北に位する八達嶺附近に存するものの現景なり。秦の始皇帝が築かせたる長城は今日の長城の位置よりなほ北方に在りしものにて、其の構造は之れを詳にするを得ず。今日の長城殊に本圖に示すものは、明代に修築せられたるものにして、秦代の舊物に非らずと雖、所謂萬里長城の規模は、實に始皇帝の時に定まれりと謂ふべし。

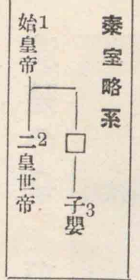
匈奴
長城

項羽と劉邦

秦の滅亡
(二帝一十五年)

長城 その頃、支那の北方に、匈奴といへる民族あり、騎馬に長じて戦を好み、戦國の頃屢内地を犯したることあり。始皇帝匈奴の侵入を患ひ、將軍蒙恬に命じて之れを撃たしめ、その侵入を防ぐが爲に長城を築かせたり。始皇帝は、精勵非凡にして、政治上の英斷に富みたれども、その爲す所急激にして、統一の成功を望む事早きに過ぎ、遂に世人の怨みを招くに至れり。

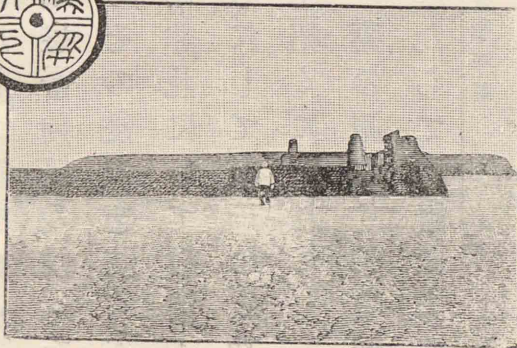
秦の滅亡 始皇帝の威壓政策は、始皇帝の死と共にくづれたちて、動亂四方に起りぬ。中にも、項羽と劉邦との活躍は、人の目を引く程なりしが、劉邦早くも咸陽に攻め入り、紀元前二〇六年、遂に秦を滅びたるなり。



第二章 漢の創業

漢楚の争

項羽後れて西に進み、鴻門に陣しける時、その臣范増は、劉邦を殺さむことを勧めたりしに、項羽之れを果さず、大に咸陽を掠めて後彭城に歸りて西楚の霸王と號し、諸將に土地を分ち、劉邦を漢王となして漢中の僻地を與ふ。漢王暫く怒を忍び、遂に東に出て楚と戦ひ、張良、蕭何、韓信の力によりて、四年の後、項羽を垓下に破り、更に追ひ撃ちて、これを滅ぼしぬ。漢王乃ち皇帝の位に上り、長安に都せり、是れを漢の高祖といふ。高祖は、一平民よ



鴻門の會
1 咸陽の東十里
2 今の江蘇省銅山縣

西楚の霸王

漢の未央宮の遺址

未央宮は漢宮の名その遺址は今の陝西省長安縣北に在り其の宮の瓦に漢并天下の文あり

漢楚の戦

3 今の安徽省靈璧縣南

漢の高祖

1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020
(漢) 高祖	(漢) 惠帝	(漢) 文帝	(漢) 景帝	(漢) 武帝	(漢) 昭帝	(漢) 宣帝	(漢) 元帝	(漢) 成帝	(漢) 哀帝	(漢) 平帝	(漢) 孺帝	(漢) 廢帝	(漢) 獻帝	(漢) 少帝	(漢) 廢帝	(漢) 獻帝	(漢) 少帝	(漢) 廢帝	(漢) 獻帝
1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020
1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020
1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020
1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020
1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020
1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020
1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020
1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020
1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020
1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020
1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020
1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020
1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020
1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020
1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020
1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020
1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020
1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020
1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020
1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020
1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020
1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020
1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020
1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020
1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020
1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020
1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020
1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020
1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020
1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020
1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020
1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020
1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020
1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020
1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020
1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020
1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020
1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020
1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020
1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020
1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020
1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020
1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020
1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020
1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020
1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020
1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020
1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020
1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020
1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020
1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020
1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020
1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020
1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	101										

其の宮の瓦に漢并天下の文あり

漢楚の戦
3 今の安徽省
靈璧縣南

漢の高祖



り、長安に都せり、是れを漢の高祖といふ。高祖は、一平民よ

を滅ぼしぬ。漢王乃ち皇帝の位に上
羽を垓下に破り、更に追ひ撃ちて、これ
良、蕭何、韓信の力によりて、四年の後、項
羽を垓下に破り、更に追ひ撃ちて、これを

年表 (其一)

年代	重	要	記	事	時代	國	史	對	照
(紀元前) 1001	七七〇 七七〇 四五三	夏 (四百餘年) 殷 (六百餘年) 周の武王の建國			夏 殷 周				
(五百年間) 1000 五〇一	七七〇 四五三 四八七 四七九 四六五 四五三 四五三 四三三 三三三 三三三 二五六 二五三 二二二 二〇六 二〇二	春秋の世 齊の桓公始めて覇者となる 城濮の戦、晉、楚を破る 鄆の戦、楚、晉に勝つ 周の東遷 釋迦卒す(歳八十) 孔子卒す(歳七十四) 越王句踐卒す、霸業衰ふ 韓魏趙の三氏、晉國の實權を握る 戦國の世 蘇秦、合従の策を立つ 張儀、連衡の謀を成す 秦、周を滅ぼす(周は八百六十七年) 印度の阿輸迦王卒す 秦、中國を一統す 秦亡ぶ 前漢の建國、高祖の即位			神代 大和朝 秦 前漢				
(三百年間) 500 201							六六〇 神武天皇即位		

國內の統一
と朝廷の豊
富

第三章 前漢の興隆

領國の名はありとも、實は直轄の郡縣に異ならず、加ふるに文帝以來の勤儉に由りて、朝廷の富も亦甚だ豊かなりき。

武帝 武帝は、國家豊富の後を承け、國內統一の完きに乗じて、大にその雄才を振ふことを得たり。帝は董仲舒トウチュンシュの勧めに従ひ、儒學を以て政教の標準となし、五經博士を置きけるが、儒學の普く行はるるに至りしは、實に是の時よりの事にして、孔子の歿後、凡そ三百年を経たるなり。また國外に向つて勢力の發展を試みたること、次に述ぶるが如し。其の文武功業の盛なるは、實に武帝の代をして漢代極盛の時代たらしめたる所以なり。

儒學の獎勵
1 漢代の五經
は詩、書、易、
儀禮、春秋
なり

四方の征服

箕氏の朝鮮
2 今の平壤

古朝鮮 傳へいふ、殷の王族箕子キコ、朝鮮に入りて王險城に

衛氏の朝鮮

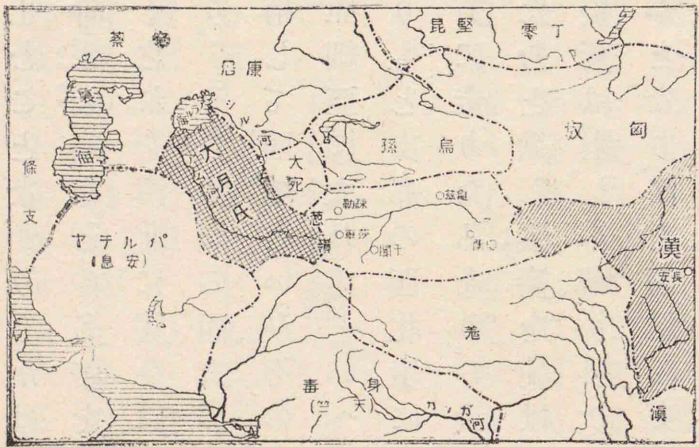
漢の四郡

漢代西域圖

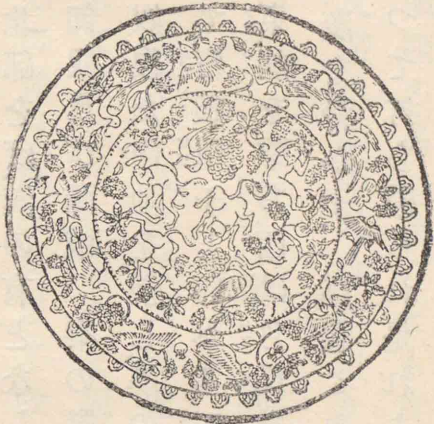
匈奴の強盛

居り、子孫相次いで其の國に君臨したりと。漢の初に至りて、衛滿エイマンといへるもの、箕子の國を奪ひ、自立して朝鮮王となす。武帝乃ち兵を發して、これを伐ち滅ぼし、その地に眞番シンパン、樂浪ラクラウ、臨屯リントン、玄菟エントの四郡を設け、朝鮮半島の北部をば、漢の有となしき。

匈奴及び西域 秦の亂るるや、匈奴復た内地を侵し、漢の初に方りて、冒頓ボクトン單于センウといへる王あり、東は東胡トウコを撃ち、西は月氏ゲツジンを破り、又屢、漢を脅かす。高祖これを征し、反つて打ち破られ、是れより、匈奴



武帝の征伐
支那銅鏡
の葡萄紋
が今の中
細より支
那へ持ち
那の世に
して後之
を銅鏡の
様は用ひ
り是れ漢
西域と稱
紀念と稱
べし



漢と大月氏
西域との交
通

南越
1今の廣東地
方

み居たりしを、匈奴に破られて西方に走りたるなり。武帝は、大月氏と結びて匈奴を挟み撃たむと欲し、張騫チャクワンを使はししに、大月氏應ぜざりき。かくて張騫は、空しく歸り來りしかど、是れより、西域の形勢漸く明かとなり、漢と西域の交通次第に開くるに至れり。
南方經略 武帝また、秦末の亂に獨立せし南越ナンゴクの内亂を

の侵掠止むことなかりしかば、武帝は、衛青エイセイ、霍去病カクヘイなどの名將を遣りて、遠く之れを漠北に逐ひはらはせたり。その頃、漢の西方の諸國を總稱して西域セキキといひ、その中、今の中亞細亞に大月氏ダイゲツジンといへる民族あり、もと支那の西北境に住

武帝の迷信
財政の困難

霍光

匈奴征伐
西域都護

平らげて、その地を併せ、西南夷とて、今の雲南・四川・貴州地方に居りし蠻族を服従させ、漢の勢威を南方にひろめたり。
武帝の晩年 帝は頻に遠征を行へるが上に、長生不死を願ひて、無益の祭祀を行ひ、父祖の蓄積を費消してなほ足らず。因りて、鹽・酒・鐵器の專賣を初とし、手段を盡して國民の財力を絞りたるが、晩年に至りて自ら悔い、専ら國民の休養に心を留めたり。

第四章 前漢の末世 後漢の興起

宣帝 昭帝・宣帝の代に、霍光カクワン政を輔くること十九年、能く治平の功を擧げたるが、宣帝また賢明にして、深く心を民政に注ぐ。帝は武帝の雄志を紹ぎ、西域の大國烏孫ウソンと協力して、匈奴を苦め、西域都護セキキトゴを置きて西域三十餘國を治めさす

前漢の滅亡
(十二帝二百十年)

新

玉門關址の現景

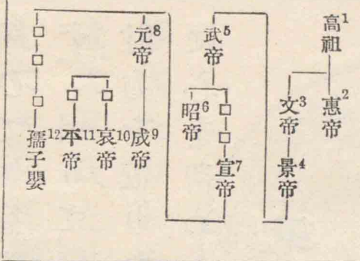
玉門關は西域に通ずる漢の門戸にして今の甘肅省熒煌縣地方に在り其の附近一帶沙漠の地なり

1今の河南省葉縣南

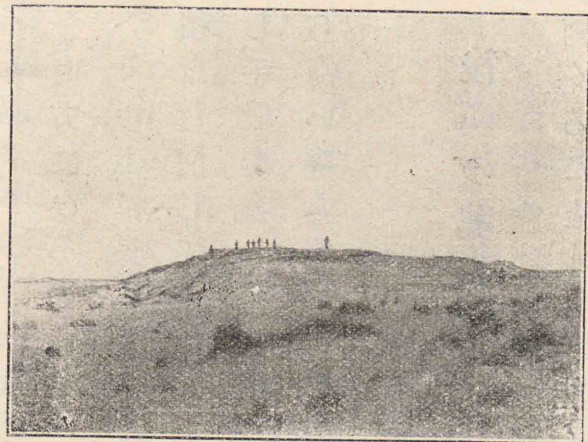
昆陽の戦

るなど、國威を振ふこと甚だ勉めたり。
前漢の衰亡と王莽 (垂仁天皇三十七年) されど爾後の政治漸く弛み、外戚の一族に王莽といへる野心家現はれ、紀元後八年遂に帝位を

前漢諸帝略系



軍を昆陽に打ち破り、王莽は間もなく亂兵に殺され、新は僅に十五年にして亡びたり。



光武帝の政策

アリヤン民族
四階級と僧

後漢の初世 (垂仁天皇五十四年) 紀元後二五年、劉秀帝位に上りて、漢室を再興し、洛陽に都せり、これを後漢の光武帝といふ。帝は先づ國內の平定を圖り、玉門關外なる西域の事に干涉せず、専ら力を内治に注ぎ、教化を盛にすることを勉め、子明帝、孫章帝、能くその業を繼ぎて、治平久しきに互りぬ。印度の佛教が支那に傳はれるも、この間のことなりき。

第五章 古代の印度 佛教の興起とその東傳

古印度の文化 今より少くとも五千年前、アリヤン民族の一派は、中亞細亞より印度に入り、土人を征服して、次第に印度河より恒河の地方に進み、その間に僧族、王族、平民、奴隸の四階級を生じたり。奴隸は即ち土人にて、他の三者はア

僧族の専横

リヤン人なるが、中にも僧族は、吠陀を經典として祭祀を司り、社會の最上に位し、制度學術の發達多く其の手に出でたり。其の後、僧族甚だ専横にして、祭事も形式に流れたるが、その弊害を除きて清新の宗教を開きたる人は、即ち釋迦牟尼なり。

佛敎の興起

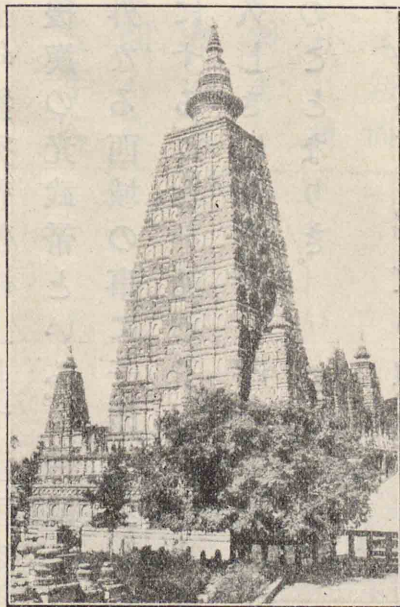
1 釋迦は支那の孔子と同時代の人なり

佛陀伽耶の大塔

釋迦開悟の紀念塔にして西曆第六世紀頃の作といふ塔内に釋迦の石像を安置す

釋迦 釋迦牟尼は、中印度の迦比羅城主の子なり。二十

九歳の時出家し、六年の修行を経て後、佛陀伽耶に於て大悟を開き、所謂佛敎を創めて、説法すること四十五年、八十歳にて歿しぬ。從來僧族が、奴隸には説敎を聽くことを禁じ、極めて

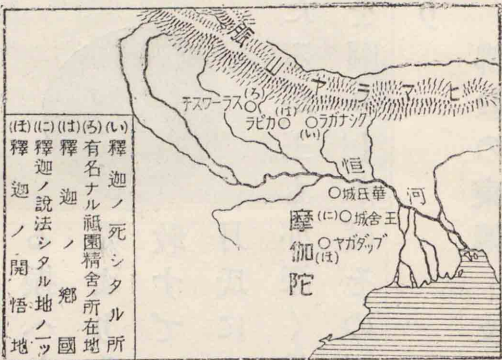


佛敎の傳達主義

釋迦靈蹟地

佛典結集

佛敎の興隆



偏狹の見を持したるに反し、釋迦は何人にも敎を説き、悟を開かするを旨としたるに由り、その敎は大に歡ばれて、次第に勢を得るに至れり。釋迦の死したる年に、弟子等相集りて釋迦の遺敎を議定したり、これを佛典結集といふ。其の後百年を経て、第二の結集行はれたり。

阿輸迦王

釋迦の死後凡そ二百五十餘年、即ち支那にて

は、秦の一統に先だつこと數十年の頃、中印度の摩迦陀國に阿輸迦といへる王あり。王は篤く佛敎に歸依し、國都華氏城に於て、第三の結集を行ひ、普く佛敎を勸むる勅諭を發し、廣く外國に布敎師を送り、大に保護獎勵に努められたれば、これ

佛教の外國
流傳

大月氏の強
盛と崇佛

大月氏の
貨幣及び
佛像
貨幣にはカ
ニシカ王の
像を刻す

佛教の中心
地

より佛教は、印度域内に止まらずして、廣く外國へも流傳するに至れり。

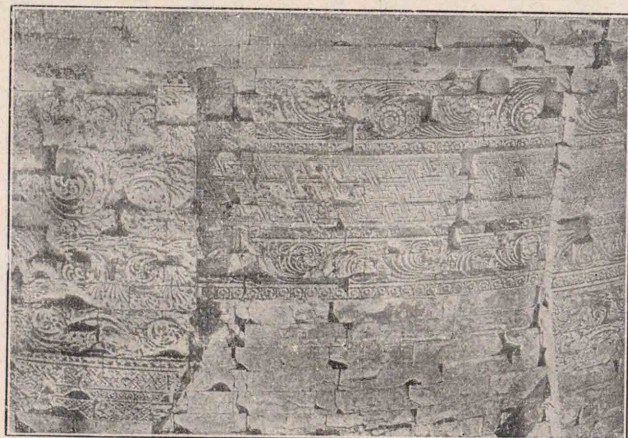
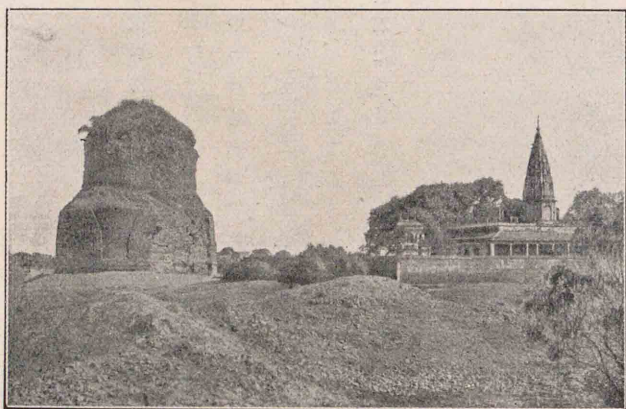
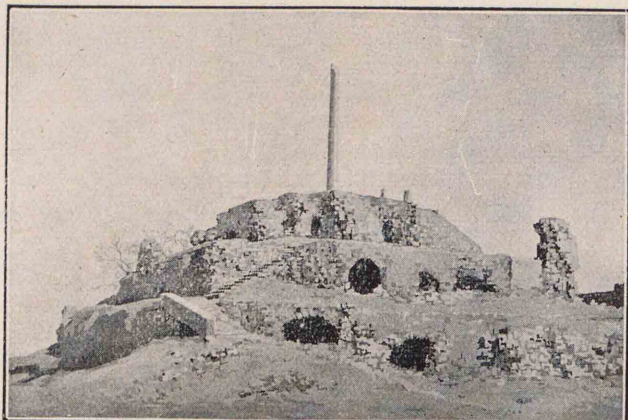
迦膩色迦王 阿輸迦王の死後凡そ三百數十年、即ち後漢の中世に方り、中亞細亞の大月氏國に迦膩色迦王出でて西北印度をも取りて國勢頗る振へり。



是より先、佛教すてに大月氏に入り

たるが、王も亦深く佛教を信じ、第四の結集を行ひ、佛教興隆を圖りしかばその國は其の頃の佛教中心地となるに至れり。

佛教の東傳 支那にても、西域との交通開けてより、西方



阿輸迦王に關する遺物

上圖は、阿輸迦王が佛教獎勵の爲に印度各地に建てさせたる勅碑の一にして、現に印度のデリー Delhi に存し、碑柱の高さ約四丈二尺あり、柱面に勅文を刻せり。中圖は釋迦が初て説法を試みたる地として有名なる鹿野苑印度ベナーレス Benares の東北三マイルに在りに於て阿輸迦王の建てたる大塔の遺蹟にして、高さ約百二十尺周囲三百尺を算す。下圖は、右古塔の周圍岩石に施されたる彫刻の一部なり。

支那傳來

朝鮮並に我國への傳來

匈奴衰弱

班超と西域服屬

に佛教あることを傳へ聞きたるが、後漢の明帝に至り、紀元(垂仁天皇九十六年)後六七年、使を大月氏へ遣はして、佛經佛像を求めさせ、佛教これより支那に行はるるに至れり。但し西域の僧侶支那に往來し、佛經の翻譯先づ興るに至りしは、後漢の末頃よりのことなり。支那傳來の後、凡そ三百年を経て、佛教は朝鮮に傳はり、又凡そ百八十年を経て、朝鮮より我が國に入れり。

第六章 後漢の盛衰

後漢と匈奴・西域 王莽の時、匈奴・西域皆叛きけるが、紀元(景行天皇十九年)後八九年、後漢の和帝の代に、竇憲大に匈奴を破りて、全くその勢を挫き、これに乗じて復び力を西域に伸はすことを得たり。班超といへるもの、西域都護に任ぜられ、前後三十一年の間西域に駐まり、漢の威力を其の地方に輝かしぬ。班

大秦との交通

1 漢史の安息國

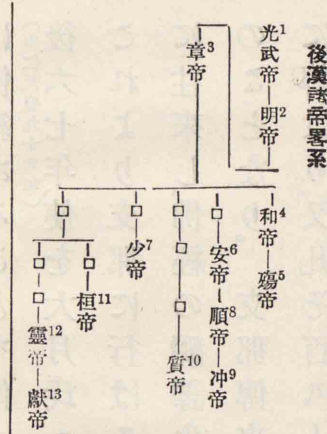
超が甘英^{カンエイ}を遣はして、遠く西に在りと聞ける大秦國^{ダイシン}へ交通を開かしめむと試みたるも、實にこの間のことなり。

後漢と大秦 大秦は、即ち羅馬帝國^{ロマ}なり。其の國人、以前より支那の絹を珍重して、之れと交通せむと欲したれど、中間のバルチヤ^{Parthia}に妨げられて果さざりき。甘英もバルチヤの西界に達したれど、大秦國に赴かずしてかへり來りぬ。

(成務天皇三十六年)

一六六年、桓帝の代に、大秦王安敦^{アンドン}は、南方の海路より使を支那に送り、これより其の國の商人、時々往來するに至れり。

外戚宦官の専横



後漢の末世 かくて光武帝より和帝に至る間、國內平らかに、匈奴西域共に服したれど、和帝以後六代の間、諸帝幼弱にして、外戚宦官交、權勢

黨錮の獄

後漢の騷亂

を争へり。桓帝の時、外戚倒れて、宦官勢を振ひ、一六六年、黨錮の獄を起して、おのれを非難する諸名士を囚へ、益、憚る所なし。靈帝の時、黄巾^{ワウキン}の賊國中を騷がし、宦官は袁紹^{エンセウ}に滅ぼされたれど、董卓^{トウタク}が獻帝を立てて暴威を振ふに及び、國中大に亂れて群雄並び起りぬ。

曹操の威勢

三國要圖



第七章 三國の分立

群雄割據 群雄の中にて、曹操最も智略に富み、董卓の殺されたる後、まづ獻帝を迎へ取り、黄河南北の地を平定して頗る勢を振ふ。時に、漢の景帝の後裔劉備^{リウビ}字は玄徳^{エンテク}は、諸葛亮^{シヨウカク}字は孔明^{カウメイ}とい

赤壁の戦
 1 今の湖北省嘉魚縣の西北に揚子江に臨める山なり
 三分割據

後漢の滅亡
 (十三帝百九十六年)

劉備の像

三國の成立
 2 今の四川省成都縣
 3 今の江蘇省江寧縣(南京)

ふ賢人を得、その勧めに従ひ、江東の孫權と結び、二〇八年共に力を協せて、曹操の大軍を赤壁に打ち破れり。これより劉備は、巴蜀漢中を定め、曹操は江北を領し、孫權は江東に據り、いはゆる三分割據の勢を成しぬ。

三國の鼎立 曹

操の子曹丕は、二二〇年、獻帝の位を奪ひ、洛陽に都して、魏帝といひ、翌年、劉備も蜀漢帝と稱して、成都に都し、後八年、孫權も吳帝と稱して、建業に都せり。蜀漢は最も小さく、僅に魏、吳と相争ふこ



蜀主劉備

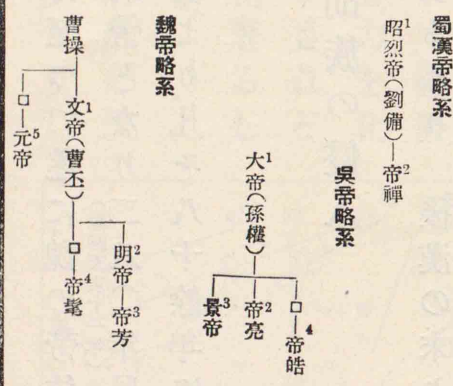
諸葛亮の忠節

1 今の陝西省郿縣西南

蜀漢の滅亡

とを得たりしが、劉備が孫權と戦つて敗れ、白帝城に歿して後、諸葛亮は幼主を輔け、吳と和し、南夷を定め、數魏を伐ちたれども、遂に志を得ずして、五丈原の陣中に歿したり。三國の滅亡 諸葛亮の死後、蜀漢は國勢衰へて、劍閣の險も支ふるに由なく、遂に魏に滅ぼさる。魏の將司馬懿は、屢諸葛亮を防ぎ、又遼東を平らげて、大功を立てたれば、其の子

劍閣
 今の四川省の北境に在り、蜀の北に極め、險阻の地なり



魏の滅亡
吳の滅亡
晉の一統

弟權力を振ひ、司馬炎シマエンの孫孫懿イに至つて遂に魏の帝位を奪ひぬ。司馬炎位に即いて晉の武帝となり、二八〇年(廢神天哀十一年)吳をも伐ち滅ぼし、かくて後漢末の分裂より、凡そ八十餘年にして、晉はまた支那を一統せり。

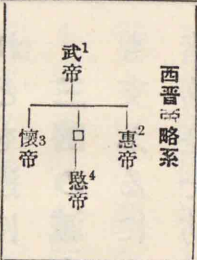
第八章 晉及び胡族の侵入

西晉

晉の一統は、早くもゆるめり。後漢の末より三國の動亂を経て、人心なほ未だ平らかならず、晉の代となりても、世間何となく騒がしかりき。されば人々世事を厭ひ、清談とて老莊の説を曲解し、放縱享樂を風流なりとするの風行はれ、政務おのづから廢れたりしかば、晉の勢益衰へぬ。されば匈奴人の一部これに乗じて内地に自立し、其の王劉聰は、

晉の動搖
清談

西晉の滅亡
(四帝五十二年)

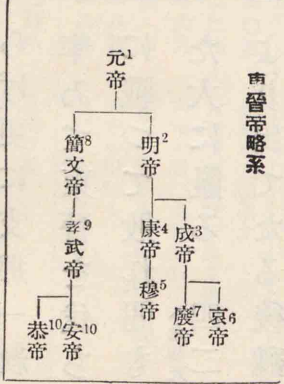


胡族の侵入

胡族侵入概
圖

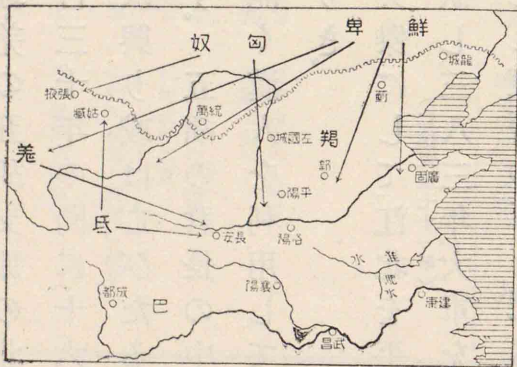
東晉の萎縮

(仁德天皇四年)
三一六年攻めて晉を滅ぼしぬ。



東晉 是に於て、晉の宗族司馬睿シマズイ建康建業業に即位し、江南の地を保てり、これを元帝といひ、これより後を東晉前を西晉といふ。東晉は、英明の君主少く、また内亂に苦しめられて國勢振はず、概ね江南の地に退縮し、力を北方に伸ばすこと能はざりき。されど、晉の南遷につれて、江南の文化著るしく開發せらるるに至りしなり。

五胡時代 漢魏以來、北方胡族の支那北邊に雜居するもの漸く多かりし



年表 (其二)

年代	重要記事	時代	國史對照
(紀元前) 二〇〇— 一〇〇	一七四 匈奴冒頓單于卒す (一七四— 一六一の間) 匈奴、月氏を西方に走らす 一五四 吳楚七國の亂 (一四〇— 八七) 漢の武帝 一四〇頃 月氏、中亞細亞に國を建つ (一三八頃— 一三五頃) 張騫西域に使す 一一九 漢大に匈奴を破る 一一一 漢南越を平げ、又西南夷を降す 一〇八 漢朝鮮を取りて四郡を置く	前漢	九七 崇神天皇即位 八八七 四道將軍を派遣す 三三 任那にて來朝す
(紀元後) 一〇〇— 二〇〇	七二 宣帝大に匈奴を破る 六〇 宣帝西域都護を置く 四九 元帝立ち、宦官の專横起る 三三 成帝立ち、外戚王氏の專横始まる 前漢亡ぶ、王莽國を新と號す 二五 昆陽の戰、王莽亡ぶ 二五 後漢の建國、光武帝即位 六七 明帝の時、佛教始て支那に入る 八九 和帝の時、竇憲大に匈奴を破る 九一 班超、西域都護となる	後漢	六一 田道間守を常世國に遣す 九七 日本武尊熊襲を討つ
(百年間) 一〇一— 二〇〇	一〇五 蔡倫紙を發明す 一三三? 大月氏王迦膩色迦王没す 一六六 大秦の船、支那南部に至る 同上 黨錮の獄起る(宦官頗る横暴なり) 一八四 黄巾の賊起る 一八九 袁紹、悉く宦官を殺す	漢朝	一三三 始て大臣を置く 一九二 始て大連を置く 二〇〇 神功皇后の征韓
(百年間) 二〇一— 三〇〇	二〇八 赤壁の戰 二一〇 後漢亡ぶ、曹操の子曹丕魏帝と稱す 二二一 劉備、蜀漢帝と稱す 二二三 吳王孫權の元年、三國鼎立 二二六 大月氏漸く衰ふ 二二九 孫權、吳帝と稱す 二三四 諸葛亮(孔明)卒す(歳五十四) 二六三 魏、蜀漢を滅ぼす	三國	二四七 百濟新羅の入貢 二四九 新羅を討つ

年 表 (其二)

年 代	重 要 記 事	時 代	國 史 對 照
(紀元前) 三〇〇— 一〇〇— (百年間)	<p>一七四 匈奴冒頓單于卒す</p> <p>(一七四— 一六一の間) 匈奴、月氏を西方に走らす</p> <p>一五四 吳楚七國の亂</p> <p>(一四〇— 八七) 漢の武帝</p> <p>一四〇頃 月氏、中亞細亞に國を建つ</p> <p>(一三八頃— 一三五頃) 張騫西域に使す</p> <p>一一九 漢大に匈奴を破る</p> <p>一一一 漢南越を平げ、又西南夷を降す</p> <p>一〇八 漢朝鮮を取りて四郡を置く</p>	前 漢	九七 八八 三三
(紀元後) 一〇〇— 一〇〇— (百年間)	<p>八 前漢亡ぶ、王莽國を新と號す</p> <p>二五 昆陽の戰、王莽亡ぶ</p> <p>二五 後漢の建國、光武帝即位</p> <p>六七 明帝の時、佛教始めて支那に入る</p> <p>八九 和帝の時、竇憲大に匈奴を破る</p> <p>九一 班超、西域都護となる</p>	後 漢	六 九七
(百年間) 一〇一— 三〇〇— 三〇〇— (百年間)	<p>一〇五 蔡倫紙を發明す</p> <p>一一三 大月氏王迦膩色迦王歿す</p> <p>一六六 大秦の船、支那南部に至る</p> <p>同上 黨錮の獄起る(宦官頗る横暴なり)</p> <p>一八四 黃巾の賊起る</p> <p>一八九 袁紹、悉く宦官を殺す</p>	三 國	一一三 一九二 二〇〇
(百年間) 三〇〇— 四〇〇— 四〇〇— (百年間)	<p>二〇八 赤壁の戰</p> <p>二一〇 後漢亡ぶ、曹操の子曹丕魏帝と稱す</p> <p>二一一 劉備、蜀漢帝と稱す</p> <p>二二二 吳王孫權の元年、三國鼎立</p> <p>二二六 大月氏漸く衰ふ</p> <p>二二九 孫權、吳帝と稱す</p> <p>二三三 諸葛亮(孔明)卒す(歳五十四)</p> <p>二六三 魏、蜀漢を滅ぼす</p> <p>二六五 司馬炎、魏を滅ぼす、西晉の建國</p> <p>二八〇 晉、吳を滅ぼす、西晉の一統</p> <p>三〇〇 八王の亂起る</p>	西 晉	二四七 二四九 二八五 二九七
(百年間) 三〇〇— 四〇〇— 四〇〇— (百年間)	<p>三二六 西晉亡ぶ、</p> <p>三二七 東晉の立國</p> <p>三七二 前秦王苻堅、佛教を高句麗に傳ふ</p> <p>三七六 苻堅江北を一統す</p> <p>三八三 淝水の戰、江北復た大に亂る</p> <p>三九九 僧法顯印度に赴く、十五年を経て返る</p>	東 晉	三三三 三六七 三八四

後魏太武帝

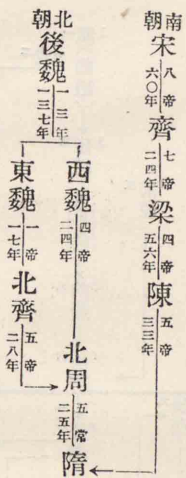
南朝の宮廷風俗

後魏の孝文帝

重んじ、氣風柔弱に傾きて、常に北朝の壓迫を被れり。

北朝 北朝は、後魏より、北齊北周を経て、隋の支那一統以前に至るまでをいふ。この中、後魏の太武帝は、江北の紛亂を一統して、大に領土をひろめ、孝文帝は、漢人の文化を慕ひ、制度・風俗を改めて、一

後魏の分裂



至れり。

間もなく後魏は、東魏・西魏に分れ、後に、東魏は北齊

に漢人に倣はしめたるが、之れが爲に却つて北方勇健の氣象を失ふに



北朝の特色

隋の一統

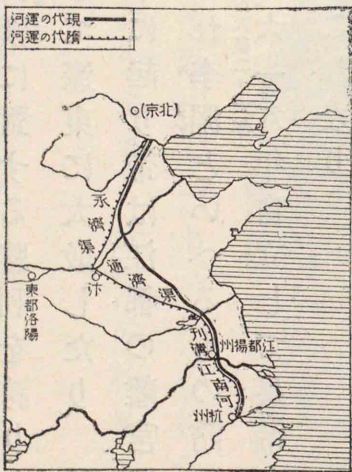
煬帝の豪奢外征

隋代運河圖
1 我國が支那と公けに交通を開きたるは煬帝の代のことなり

に、西魏は北周に覆へされて、又互に相争ひぬ。北朝の諸國は、概して風俗粗野なりしも、着實の趣ありて、儒學を尊びたること南朝に優れり。

隋の一統 北周は北齊を滅ぼして後魏の舊領を統べたれども、外戚楊堅に國を奪はれぬ。楊堅は漢人なり、帝位に即きて九年の後、南朝の陳を滅ぼし、五八九年、支那を一統せり、これを隋の文帝といひ、漢人は又おしなべて漢人の君を戴くこととなれり。

煬帝 文帝が勤儉にして平和を樂しめるに反し、その子煬帝は、盛に宮殿を造り、多く運河を開き、遊樂に耽れる旁ら、外征の功を貪りて、頻に人心を騒が



隋の滅亡
(四帝三十七年)
1今の江蘇省
江都縣(揚州)

唐の高祖



せり。かくて帝は、北方の大敵突厥に對する勝利を誇りたれど、次いで、東方の高句麗を攻めて、遼東に大敗したり。動亂これより國中に起り、帝は江都の離宮に於て叛臣に殺され、李淵といへるもの、隋の國都長安を奪ひ、六一八年自立して皇帝と稱しぬ、唐の高祖これなり

第十章 漢魏晉南北朝の文化

訓詁の學

石經

儒學 前漢の武帝が大に儒學を奨勵してより、學者は先づ其の古書の字句解釋に力を用ひたり、是れを訓詁の學といひ、後漢の代に、馬融、鄭玄の二人、是の學に精しきを以て名あり。古書の本文を正確に傳ふるため、之れを石に刻して所謂石經を作りたるも、後漢の代の事なり。三國より晉

訓詁學の傳流

後漢石經の斷片(論語の二部)

詩文

南朝文學

を経て南朝に及ぶ間、老莊の學むしる廣く行はれたれども、北朝の諸國は、儒學を尊びて、訓詁の學風を傳へたりき。

文學 詩が一般に盛となりたるは、魏晉以後のことにして、魏の曹植、晉の陶潛字は淵明など、詩名甚だ高し。文章に於ては、前漢の司馬遷、後漢の班固、夙に名を顯はせり。南朝に至りては、詩文共に大に興り、謝靈運以下才子輩出したり。その特色は、詩も文も共に對句を用ひて口調をよくし、字句の極めて麗はしきに在り。

技藝 文字を書するに、古は、竹片・木札若くは絹などを用



紙の發明

王羲之の手蹟

九月十七日 善之報

ひたりしが、後漢の世に、蔡倫初て紙を發明し、大に世人の益をなせり。

書畫

佛教美術

文字も、漢代以後、楷・行・草の三體起り、書法次第に發達して、晉に王羲之といへる名人現はれ、畫に於ても東晉の顧愷之は妙手の聞え高し。又後漢の末より佛教漸く行はるるに従ひ、佛像の彫刻又は佛畫なども大に發達し、後魏時代に於ける佛像彫刻の遺物、なほ今日に存するもの少からず。

佛教 後漢の末頃より、支那の佛教次第に興りたるが、五

胡の世に、前秦王苻堅は佛教を保護して、これを朝鮮の高句麗國へ傳へさせ、後秦王姚興は、西域の名僧鳩摩羅什を信奉して、佛教の流通を助け、又その頃法顯といへる僧あり、往復十五年を費して印度に赴き、數多の經文を求めて還り、佛國

法顯

鳩摩羅什

南朝佛教

後魏時代の石佛

岩壁に刻したる巨大の佛像にして、今山西省大同縣附近に在る。右に立たる人との比大なるを推察するべし。

佛教と道教の衝突



僧を養ふの風大に行はれたりしが、後魏の代に道教の勢興りて佛教と衝突するに至れり。

道教 道教とは、命を延ばし災を避くることを教ふる通俗の信仰にして、老莊の學を借りてその教を飾り、老子を立てて教祖となす。後漢の末に、張陵といへるもの、この教の基を開き、古來支那に行はれたる卑俗なる信仰をば、多く其

道教の要旨

寇謙之

元始天尊
道教にて崇
拜する本尊
なり

支那の三教

唐の太宗の
英主たる所
以



の中に混入したりしが、後魏の代に寇謙之といへるもの、道教を大成し、佛教に向つて厳しき迫害を加へたることあり。道教は、儒教・佛教と相並んで、支那の三教と稱せらる。

第十一章 唐初の強盛

唐の太宗高宗 隋末の騷亂を定め、唐の創業を完うしたるは、高祖の子太宗の力なり。太宗が能く人物を識り、宰相には房玄齡、杜如晦あり、諫臣には王珪、魏徵あり、將軍には李靖、李勣あり、皆適材を適所におき、以て各、その伎倆を振はし

貞觀の治

1太宗の年號なり

唐都長安圖
(右方は長安の規模を示す)

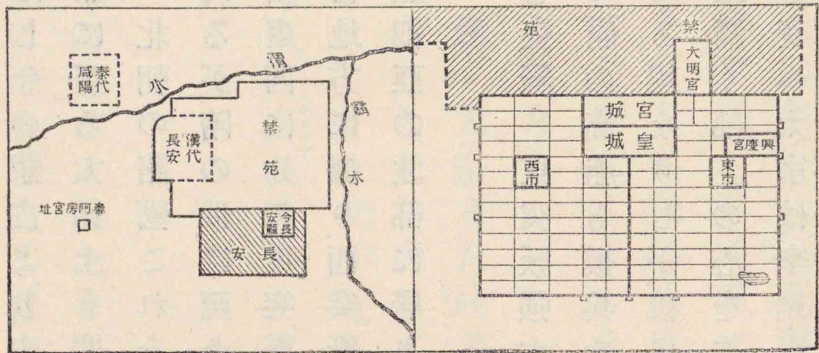
唐の極盛時代

鮮卑及び柔然

突厥の興隆

めたるは、帝が希世の英主たる所以なり。されば、その治績大に顯はれ、制度整ひ、學問興り、後世より貞觀の治と稱せられ、外國に對しても、大に威武を輝かし、實に漢人最強の時代を開けり。その子高宗も、亦名臣を用ひて、よく太宗の遺業を成し、この二代凡そ六十年間は、唐の最も強盛なる時なりき。

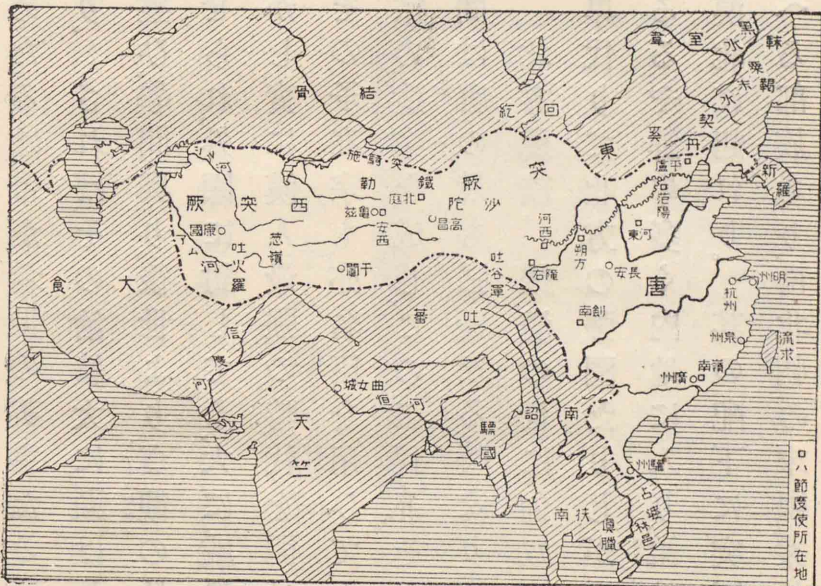
北方民族 後漢の世に匈奴衰へ、鮮卑代りて北方の強國たりしが、晉の亂るるや、鮮卑多く内地に入り、柔然新に漠北に起れり。其の配下に突厥といへる部族あり、南北朝の末頃、柔然を打



北朝と突厥

唐代要圖

東西突厥



ち滅ぼし、今の蒙古より中
 亞細亞に至る大領土を開
 きぬ。北朝の諸國これを
 恐れたるが、隋の世に至り
 て、突厥東西に分れ、東突厥
 は蒙古地方に據り、西突厥
 は中亞細亞の北部に居り
 き。

唐と突厥 東突厥強大
 にして、唐の高祖も援兵を
 借りたる程なりしが、後に
 其の王漸く部下の心を失
 ひて勢衰へ、太宗は李靖、李

東突厥の征
服
西突厥征服

唐太宗の
像



勳を遣りて、(舒明天皇二年)六三〇年、これを征服
 せしめたり。西突厥も、東突厥に
 劣らざる大國なりしが、後に内亂
 起り、(齊明天皇三年)六五七年、高宗の遣はせる蘇
 定方に征服せられたり。

唐と吐蕃印度 太宗また吐蕃
 と戦ひ、次いで之れと和し、唐の文
 物を傳へ、又遠く印度の戒日王と

も好しみを結びたり。戒日王は、中印度の曲女城(カシヤ)に居り、佛
 教を保護し、文學を奨励し、當時印度に於て英明の聞え高か
 りし人なり。

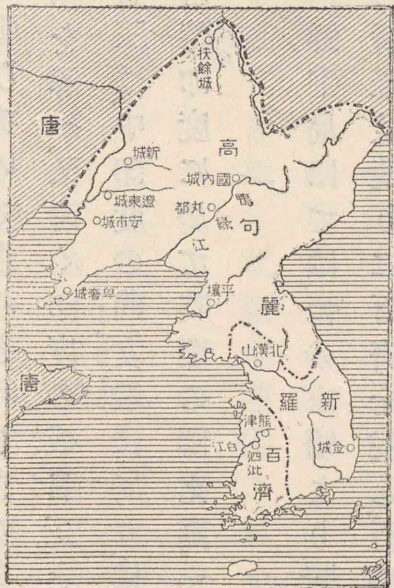
唐と朝鮮 これより先、朝鮮半島にては、晉の末頃より、新
 羅・百濟・高句麗の三國鼎立し、新羅は連りに百濟を侵し、百濟

1今カノージ
 といふ
 印度の戒日
 王との交通
 朝鮮半島の
 形勢

唐初朝鮮形勢圖

1 今の滿洲の蓋平縣の東北
2 吾が天智天皇は百濟を救ひ給はむとて遂げざりき
唐と新羅百濟高句麗の滅亡

が我が國と高句麗とに結ぶに及び、新羅は専ら唐に頼りぬ。太宗高句麗を討ち、安市城を攻めて失敗したり。高宗蘇定方を遣はし、新羅と協力して六六〇年、百濟を滅ぼさしめ、次いで高句麗の内亂に乗じ、李勣等を遣りて、六六八年、高句麗を



六都護府

都護府名稱	設置年代	管轄地域
安西	六四〇年(太宗)	今の天山南方
單于	六五〇年(高宗)	今の内蒙古
安東	六六八年(高宗)	今の南滿洲・北朝鮮
安北	六六九年(高宗)	今の外蒙古
安南	六七九年(高宗)	今の印度支那の北部
北庭	七〇二年(武后)	今の天山北方

(天智天皇七年)も伐ち滅ぼさしめ、悉くその地を取りぬ。新羅は、是れより半島の大部を領して、唐に臣事せり。

六都護府 かくて唐の勢

大食の勃興
1 ターシヤ人はペルシヤ人がアラビヤ人を呼べる名にて唐人が大食の二字を以てその名を音譯したるなり
2 今のカントンの港
3 今の税關の如きもの
南海の貿易と海上交通

威大に國外に伸び、太宗より高宗を経て、次の則天武后の代に至るまでに、唐は、安西、單于、安東、安北、安南、北庭の六都護府を設けて、四方の屬地を鎮めしめたり。

唐と大食 唐の強盛なるに方りて、西亞細亞のアラビヤに大食國興り、その國人、唐の中世以後、支那の南海に航し、廣州に於て貿易を營むに至りしかば、唐は廣州に市舶司を置き、その貿易を監督せしめたり。是れより先、南朝の頃より、南海の海上交通漸く盛なりしが、大食人の東航するに及びて、この海運益々發達するに至れり。

第十二章 唐の中世

武韋の禍 高宗の後武氏は才畧ありて、常に政務に與かりしが、高宗の死後、恣に中宗、睿宗を廢立し、遂に自ら帝位に

回紇人の入援

史思明の叛
1 突厥に代りて今の蒙古族に興れる民

回紇人の風俗

左は高僧、右は酋長

亂後の形勢



ならず、財政の紊亂容易に恢復せざりき。

第十三章 唐の衰亡

節度使の増加と其の弊害

藩鎮の驕横 安史の大亂に方りて、賊を討つがため、内地にも節

唐帝略系の一

玄宗⁶—肅宗⁷—代宗⁸—德宗⁹

—順宗¹⁰—憲宗¹¹—

河北三鎮
河南二鎮

藩鎮討伐

宦官跋扈の由來と其の事實

度使を置きたりしが、大亂の後、その數増して四十餘に上り、各土地を横領し、強兵を養へるが中に、幽州、成德、魏博の河北三鎮、淄青、淮西の河南二鎮、最も頑強にして朝命を奉ぜず。德宗これを討ちて失敗し、却つて不徳の罪を國人に謝するの窮況に陥りしが、憲宗に至り、八一七年、裴度(私法大師高野山を開ける聖年)の力によりて、先づ淮西を平らげ、次で他の諸鎮を降したれど、帝の死後、藩鎮の驕横また故の如し。

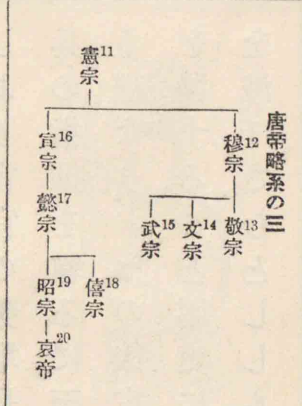
宦官の跋扈 玄宗遊樂に耽りて、宮中の事を宦官に委ねしより、宦官の勢増長して、後には國都の學校を監督し、近衛兵の指揮を執るに至り、憲宗の如きも宦官の毒手に斃れたる程なり。その後、宦官は天子を視ること木偶の如く、大臣を遇すること屬吏に同じく、文宗深く其の害を患ひて、これを滅ぼさむとししも、其の苦心遂に効なく、宦官は、只心のま

朝政の紊亂

唐衰亡の原因

1 唐の中世より起り今の雲南地方に當る

唐の滅亡 (二十帝二百九十年) 漢人の勢力の衰微



まに振舞ひて、朝政の紊亂殆どその極に達せり。

唐の滅亡 (一) 地方に於ては藩鎮の驕横益募り、(二) 朝廷に於ては宦官の跋扈制し難く、(三) 回紇・南詔・吐蕃の諸國、これに乗じて唐の患を爲し、(四) 財政の困難濟ふべからざるに至り、唐の國運いよいよ傾けり。かくて僖宗の世には、黄巢の亂起り、四年の後平らぎたれど、これより國內の動搖止むことなし。黄巢の部下に朱全忠といへるもの、唐に降りて節度使となり、朝廷より招かれて宦官を打ち滅ぼし、梁王に封ぜられしが、密に野心を蓄へ、九〇七年、遂に唐の帝位を奪ひたり。唐亡びて、漢人強盛の勢挫け、是れより、漢人が北方民族の強壓を被るべき時代を現出するに至れり。

第十四章 唐代の文化

制度

唐に至つて、法制大に備はり、その要旨は、北朝及び隋のものに本づける所多し。政府として三省中書省 尚書省 門下省六部吏部 戸部 禮部 兵部 刑部 工部を設け、税法に租庸調を定め、地方に折衝府を置き、兵役の事を掌らせ、國子監を置き、國都の學校を統べしめ、試験に由りて官吏を採用することなど、即ち其の例なり。玄宗の代に、兵農一致の古制を止めて、兵士を募集することに改めたるは、支那兵制の一大沿革なり。又安史の亂後、農夫は各人平等に一定の租税を出すと、いふ古法を改め、その人の貧富の程度に由りて税額を異にせしめたるは、是れ亦支那税法の一變遷と謂ふべきものなり。この税法を兩税法といへり。

唐法制の要領
募兵の制
兩税法
1 租税を夏と秋との二期に納むる故に兩税といへるなり

五經正義
唐代の五經は詩・書・易・春秋・禮記なり

詩の隆盛

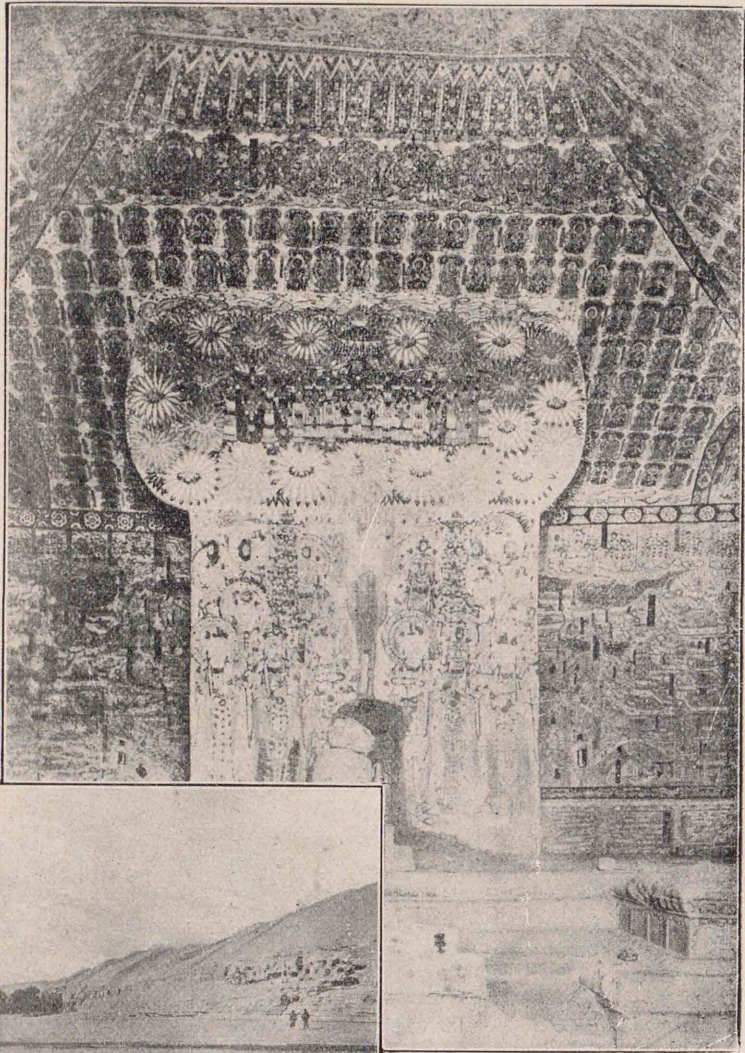
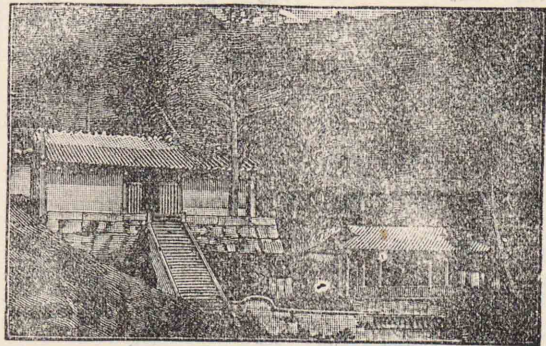
韓愈の祠
廣東省海陽縣(潮州)に在りこの地は韓愈が罪を得て流されたる所

古文の復興

書畫

儒學文學 儒學は、從來の訓詁の學風を脱せず、太宗の代に孔穎達等に命じ、五經正義を作らせて、五經の文義を一定せしめたり。官吏採用試験には、五經の解釋の外に、詩賦を作らする科目あり、これに及第せるものは、進士と稱せられ、立身の便宜多かりしかば、詩は頗る盛となり、詩人としては、李白・杜甫・白居易字は、など、その名高し。文章も、唐の中世以後、韓愈退之、柳宗元子厚出でて、南朝時代の柔弱なる文體を改め、雄健なる古文を復興したり。

技藝 唐に至りて、書道大に整ひ、顔眞卿・柳公權・張旭などの名手現はれ、繪畫に於ては佛畫殊にその壁畫流行せ



唐の代佛敎壁畫に並燉煌千佛洞の景

(三)中東、五二一五三

甘肅省熾煌縣の東南約四里に鳴沙山あり、山腹を穿ちて岩窟百餘を作
 る。刻する所の佛像甚だ多きに因りて俗に之れを千佛洞と稱す其の中
 に存する佛教美術の遺蹟は大抵唐代の物にして、佛教壁畫の壯觀驚くに
 堪へたり、本圖に示すものは其の一例なり。明治四十年スタイン Stein 氏
 是の地を訪ひ其の佛教美術を探究すると共に、石室の秘奥を發きて貴重
 なる經卷圖書を獲得し、次でペリオー Pellet 氏來りて石室を探り更に珍
 奇なる古書數千卷を發掘したり。

佛教美術

工藝
 1 吾が奈良の
 正倉院の御
 物は唐代の
 工藝を推察
 するべき貴重
 なる資料なり

玄奘義淨

玄奘と新譯

唐代印刷
 の經文
 明治四十二
 年今の甘肅
 省熾煌縣の
 「佛洞」にて
 發見せらる

る外に、山水人物の描寫も亦巧妙となりぬ。唐の中世に、李
 思訓^シ・王維^キの二人出で、共に山水に於て各獨特の妙所を示せ
 り。佛教美術も亦著るしく發達して、吾が王朝時代のもの
 に深き影響を與へ、染物・織物・細工物などの工藝も亦大に觀
 るべきものありき。

佛教 佛教の盛なるに伴ひて、支那僧の印度に赴くもの
 漸く多かりしが、唐の太宗の代に、玄奘^{ソウ}は往復十七年を以て、
 印度より經文を求めて還り、義淨^ギも亦二十五年を費して、印
 度に往來したり。玄奘の經文翻譯は頗る精密にして、世に
 新譯と稱せられ、それ以前のもの舊譯といふ。支那佛教



に宗派の差別起れるは南
 北朝頃なりしが、唐代には、
 三論^{サン}・法相^{ホウ}・律^{リツ}・華嚴^ケ・天台^{タイ}・眞言^{シン}。

八宗

禪・淨土の八宗備はり、唐末に至りて、禪宗大に蔓りぬ。經文を印刷することも唐代に行はれたり。

道教

道教は老子を教祖となし、老子は本名を李耳といひ、唐帝の姓も李なりしかば、唐帝は大に老子を敬ひ、従つて道教を尊べり。唐初に道教の信徒と佛教徒の間に勢力の争起りしが、元來道教は、延命息災を主とする通俗の信仰にして、廣く民間に勢力を得たるのみならず、唐の諸帝にも篤く信奉せられたりき。

道教の勢力

景教碑の題額

この碑は長安縣(西安)に現存し、景教傳來の次第を記したるものなり。ここに示したるは碑の題額なり。

景教 祆教 摩尼教



諸外教 是より先、北朝の世に、祆教支那に傳はり、唐代にも行はれ、唐代には又、摩尼教、景教など新に傳來したり。祆教は、西亞細亞のゾロアストル教の

Zoraster

平	升	斗	石	大	石	斗	升	平
六六八	六七一	六七二	六七三	六七四	六七五	六七六	六七七	六七八
六八〇	六八一	六八二	六八三	六八四	六八五	六八六	六八七	六八八
六九〇	六九一	六九二	六九三	六九四	六九五	六九六	六九七	六九八
七〇〇	七〇一	七〇二	七〇三	七〇四	七〇五	七〇六	七〇七	七〇八
七一〇	七一一	七一二	七一三	七一四	七一五	七一六	七一七	七一八
七二〇	七二一	七二二	七二三	七二四	七二五	七二六	七二七	七二八
七三〇	七三一	七三二	七三三	七三四	七三五	七三六	七三七	七三八
七四〇	七四一	七四二	七四三	七四四	七四五	七四六	七四七	七四八
七五〇	七五一	七五二	七五三	七五四	七五五	七五六	七五七	七五八
七六〇	七六一	七六二	七六三	七六四	七六五	七六六	七六七	七六八
七七〇	七七一	七七二	七七三	七七四	七七五	七七六	七七七	七七八
七八〇	七八一	七八二	七八三	七八四	七八五	七八六	七八七	七八八
七八九	七九〇	七九一	七九二	七九三	七九四	七九五	七九六	七九七
八〇〇	八〇一	八〇二	八〇三	八〇四	八〇五	八〇六	八〇七	八〇八
八一〇	八一一	八一二	八一三	八一四	八一五	八一六	八一七	八一八
八二〇	八二一	八二二	八二三	八二四	八二五	八二六	八二七	八二八
八三〇	八三一	八三二	八三三	八三四	八三五	八三六	八三七	八三八
八四〇	八四一	八四二	八四三	八四四	八四五	八四六	八四七	八四八
八五〇	八五一	八五二	八五三	八五四	八五五	八五六	八五七	八五八
八六〇	八六一	八六二	八六三	八六四	八六五	八六六	八六七	八六八
八七〇	八七一	八七二	八七三	八七四	八七五	八七六	八七七	八七八
八八〇	八八一	八八二	八八三	八八四	八八五	八八六	八八七	八八八
八九〇	八九一	八九二	八九三	八九四	八九五	八九六	八九七	八九八
九〇〇	九〇一	九〇二	九〇三	九〇四	九〇五	九〇六	九〇七	九〇八
九一〇	九一一	九一二	九一三	九一四	九一五	九一六	九一七	九一八
九二〇	九二一	九二二	九二三	九二四	九二五	九二六	九二七	九二八
九三〇	九三一	九三二	九三三	九三四	九三五	九三六	九三七	九三八
九四〇	九四一	九四二	九四三	九四四	九四五	九四六	九四七	九四八
九五〇	九五二	九五三	九五四	九五五	九五六	九五七	九五八	九五九
九六〇	九六一	九六二	九六三	九六四	九六五	九六六	九六七	九六八
九七〇	九七一	九七二	九七三	九七四	九七五	九七六	九七七	九七八
九八〇	九八一	九八二	九八三	九八四	九八五	九八六	九八七	九八八
九九〇	九九一	九九二	九九三	九九四	九九五	九九六	九九七	九九八
一〇〇〇	一〇〇一	一〇〇二	一〇〇三	一〇〇四	一〇〇五	一〇〇六	一〇〇七	一〇〇八

の支那に傳はれるも、亦この期間に在り。

中國碑

行に... 祇教は、
西亞細亞のゾロアストル教の
Zoroaster

年表 (其三)

(五四—五五)

年代	重	要	記	事	時代	國	史	對	照
四〇一— 四二七 (百年間)	四三〇 四二七 四三九 四四六 四七一 四七九	宋、東晉を滅ぼす 陶潛卒す(歳六十三) 後魏江北を統一す(宋魏の對立) 後魏の太武帝、道教を奉じて佛教を迫害す 後魏の孝文帝立つ 齊、宋を滅ぼす			南	四〇三 四六三 四八七	史官を諸國に置く 吉備田狹、任那にて叛す 紀大磐、任那にて叛す		
五〇一— 六〇〇 (百年間)	五〇二 五二七 五三三 五五〇 五五七 五七七 五八一 五八九	梁、齊を滅ぼす 達磨印度より梁に来る 後魏東西に分る 北齊、東魏を滅ぼす 後周、西魏を滅ぼす。陳、梁を滅ぼす 突厥柔然を滅ぼして強盛となる 後周北齊を滅ぼす 隋、後周を滅ぼす 隋、陳を滅ぼし、支那を一統す			北	五二二 五二七 五五二 五五四 五六二	任那の四縣を百濟に與ふ 近江毛野任那を討つ 百濟の聖明王、佛像經論を獻す 聖明王、新羅と戰て死す 新羅、任那を滅ぼし日本府にぶ		
六〇一— 七〇〇 (百年間)	六〇四 六〇六 六二二 六一八 六二七 六四九 六二九 六三〇 六三五 六四一 同上 六四五 六八三 六五一 六五七 六六八 六七一 六七九 六九〇	隋の煬帝即位(在位十二年) 印度に戒日王興る(在位四十二年) 煬帝高句麗を征して克たす 隋亡び、唐興る 唐の太宗 僧玄奘、印度に赴く、十六年を経て歸る 唐東突厥を征服す 景教、唐に入る 唐、吐蕃と婚を結ぶ 印度の戒日王、使を唐に遣す 太宗高句麗を討ち安市城を攻めて克たす 唐の高宗 大食始て唐に通ず 唐、西突厥を破る 唐、高句麗を滅ぼす 僧義淨印度に赴く、二十四年を経て歸る 安南都護府を置く、安南の名是に始る 則天武后國號を周と改む			隋	六〇四 六〇七 同上	厩戸皇子憲法十七條を定む 小野妹子を隋に遣はす 法隆寺創建		
七〇一— 八〇〇	七一〇 七三一	韋后の亂 唐の玄宗			唐	七〇一 七二〇	大寶律令成る 平城遷都		

上古史・中古史綱要

上古史

支那の上古より、春秋戦國を経て、秦の一統まで。
吾が神代より、神武天皇を経て、孝靈天皇の御代に至る。

漢人黄河の流域に國をつくりてより、周に至り、封建制度に由りて國を固めたり。周の盛世には、文物盛なりしも、國衰へて、春秋戦國の世となり、秦遂に支那を一統し、新に郡縣制度を布けり。春秋戦國の世に、諸侯各、近隣の蠻族を征服したれば、秦一統の頃には、漢人の領土大にひろまり、大抵黄河揚子江の流域を包含するに至りぬ。上代よりここに至るまでは、實に漢人發展の時代といふべし。この間に、孔子出でて儒教を開き、孔子と同じき頃、印度に釋迦現はれて佛敎を興せり。

中古史

秦より漢・晉・南北朝・隋を経て、唐の滅亡まで。
吾が孝靈天皇の御代より、奈良朝を経て、平安朝の中頃に至る。

この間、凡そ一千三十年、要するに漢人が、北方民族即ち匈奴・鮮卑・突厥などと争ひて、遂に極盛の運に達したる時代にして、更に左の三期に分つことを得べし。

1 秦漢帝國時代 秦より前漢後漢を経て、三國の末に至る約五百年間吾が孝靈天皇功皇后の御時に至るにして、漢人の強固なる帝國興り、頻に勢力の發展を試み、初て西域地方と交通を開き、佛敎支那に傳はれる時代なり。

2 胡族侵入の世 晉の一統より、五胡十六國の世を経て、南北朝の末に至る約三百年間吾が應神天皇の御代より崇峻天皇の御代に至るにして、漢人が北方蠻族(胡族)と相對峙しつゝありし時なり。而して漢人は、常に胡族に壓迫せらるる姿なりしも、胡族は次第に漢人の文化を容れ、文化に於ては、却て漢人に征服せらるる形を示したり。この期間には、佛敎次第に支那に流行し、佛敎美術も亦大に發達したり。

3 漢人極盛時代 隋唐二朝の世約三百二十二年間吾が推古天皇の御代より平安朝の中頃に至るにして、漢人の勢力極盛の域に達し、制度文學藝術宗教等諸般の文化も亦大に整ひて、その影響諸方に及びぬ。前期より、佛敎の流行に伴ひて、印度との交通頻なりしが、この期となりても、この交通益々繁さのみならず、アラビヤ人の來航に由りて、南海地方の海

上古史・中古史綱要

上古史

支那の上古より、春秋戦國を経て、秦の一統まで。
吾が神代より、神武天皇を経て、孝靈天皇の御代に至る。

漢人黄河の流域に國をつくりてより、周に至り、封建制度に由りて國を固めたり。周の盛世には、文物盛なりしも、國衰へて、春秋戦國の世となり、秦遂に支那を一統し、新に郡縣制度を布けり。春秋戦國の世に、諸侯各、近隣の蠻族を征服したれば、秦一統の頃には、漢人の領土大にひろまり、大抵黄河揚子江の流域を包含するに至りぬ。上代よりここに至るまでは、實に漢人發展の時代といふべし。この間に、孔子出でて儒教を開き、孔子と同じき頃、印度に釋迦現はれて佛教を興せり。

中古史

秦より漢・晉・南北朝・隋を経て、唐の滅亡まで。
吾が孝靈天皇の御代より、奈良朝を経て、平安朝の中頃に至る。

この間、凡そ一千百三十年、要するに漢人が、北方民族即ち匈奴・鮮卑・突厥などと争ひて、遂に極盛の運に達したる時代にして、更に左の三期に分つことを得べし。

1 秦漢帝國時代 秦より前漢・後漢を経て、三國の末に至る約五百年間吾が孝靈天皇功皇后の御時に至るにして、漢人の強固なる帝國興り、頻に勢力の發展を試み、初て西域地方と交通を開き、佛教支那に傳はれる時代なり。

2 胡族侵入の世 晉の一統より、五胡十六國の世を経て、南北朝の末に至る約三百年間吾が應神天皇の御代より崇峻天皇の御代に至るにして、漢人が北方蠻族(胡族)と相對峙しつつありし時なり。而して漢人は、常に胡族に壓迫せらるる姿なりしも、胡族は次第に漢人の文化を容れ、文化に於ては、却て漢人に征服せらるる形を示したり。この期間には、佛教次第に支那に流行し、佛教美術も亦大に發達したり。

3 漢人極盛時代 隋唐二朝の世約三百二十年間吾が推古天皇の御代より平安朝の中頃に至るにして、漢人の勢力極盛の域に達し、制度・文學・藝術・宗教等諸般の文化も亦大に整ひて、その影響諸方に及びぬ。前期より、佛教の流行に伴ひて、印度との交通頻なりしが、この期となりても、この交通益々繁きのみならず、アラビヤ人の來航に由りて、南海地方の海路大に開け、又支那と我が國との交通も著るしく發達するに至れり。クリスト教の支那に傳はれるも、亦この期間に在り。

上古史中古史綱要

上古史

支那の上古より春秋戦國を経て秦の一統まで。

漢人黄河の流域に國をつくりてより周に及り封建制度に由りて國を固めたり。周の盛世には文物盛なりしも周衰へて春秋戦國の世と云ふも周の支那を一統し新に諸國を併けり。春秋戦國の世は諸侯各近隣の國を征服しを厭しなれば諸國一統の國には漢人の劉士大はひるなり大武黃河揚子江の流域を包含するに至りぬ。上代より周に至るまで支那に漢人蠻族の時代といふべし。この間に孔子出でて國教を創る。孔子と同じき國教を創るはれて諸國を併せり。

中古史

漢が李唐天孫の朝より唐の盛衰を経て平安朝の中興に至る。

1 摩尼はこの
教の開祖の
名
三夷寺
2 景は輝くの
意

回教

こと、摩尼教は、クリスト教と祆教と佛教とを混じて、ペルシヤに起れるもの、景教は、クリスト教の一派なるネストリウス宗を謂ふなり。唐代この三教の寺を三夷寺といひ、唐末に至りて、共に衰へぬ。マホメツト教即ち回教も、唐の西北境に住める回紇人の間に行はれりたり。

第三編 近古史

第一章 五代 渤海の興亡 契丹の興起

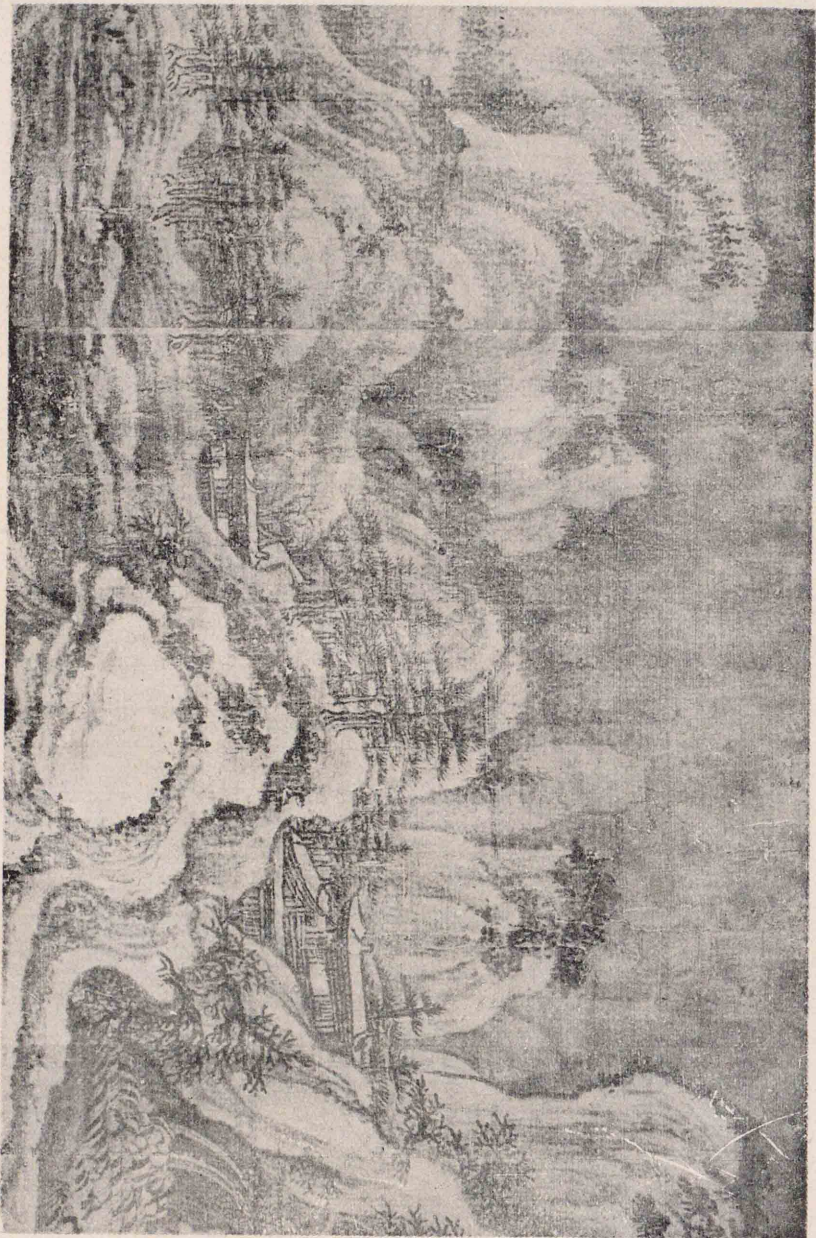
五代 朱全忠は唐を覆へし、即位して汴京（今河南省開封縣）に都せり、その國を後梁といふ。これより、後唐・後晉・後漢・後周の諸朝相次いで興り、これを五代（九〇七—九五九）といふ。各朝の年數皆短く、その領地も江北の一部にして、他方には自立して王と稱するもの十國（前蜀・後蜀・楚・荆・南吳・南唐・吳越・閩・南漢）の多きに及べり。五代は、蓋し節度使爭亂の世にして、節度使自身も部下の兵士に

五代と十國

1今の河南省開封縣

國名	首府	始祖	代數と年數
後梁	汴京	朱全忠	二代、十七年
後唐	洛陽	李存勗	四代、十四年
後晉	汴京	石敬瑭	二代、十一年
後漢	同	劉知遠	二代、四年
後周	同	郭威	三代、九年

五代の世相



(三中東、五六—五七)

畫の苑北畫

董北苑は五代の人なり、山水畫を善くせり。支那の山水畫に北宗と南宗との二派を分づ。北宗は筆づかひ堅くして法式を重んじ南宗は筆づかひ柔かにして氣韻を貴ぶ。董北苑は實に南宗山水畫の基礎を定めたる人なり。唐の王維は、南宗の始祖と稱せらるれど、北苑に至つて、その畫風初めて定まれるなり。五代の世は又、花鳥畫の開けたる時にして、一般の藝術に於て前の唐代のものを承けて、次の宋代のものを開きたる過渡の時代を示せり。

左右せられ、武人の跋扈を極めたる時世といふべし。

渤海の興亡 是より先、隋唐の頃、今の滿洲東北部に粟末靺鞨、黑水靺鞨の二部族あり、大祚榮といへるもの、粟末靺鞨の中に國を建て、七一年(平城遷都の三年後)唐の玄宗より渤海郡王に封ぜられ、是より國を渤海と號せり。子孫よく業を繼ぎて、國勢益々振ひ、都を龍泉府に定め、我が國へも交通し、唐の中世以後、東方の一強國たりしが、五代の世に、契丹人に打ち滅ぼされたり。

契丹の興起 契丹は、渤海の西隣、今の内蒙古東部に居りしが、唐の末に耶律阿保機

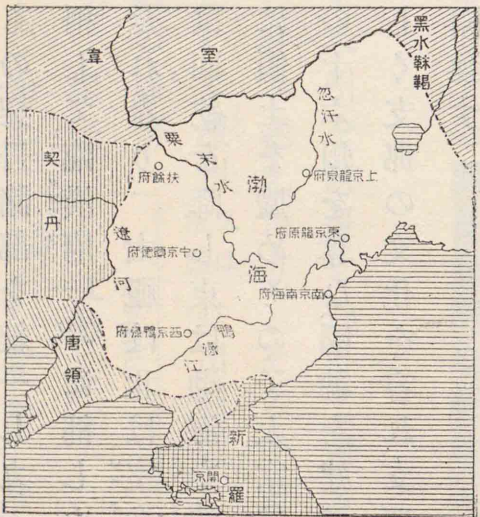
靺鞨
1 粟末は河の名にて今の松花江に流
2 黑水は今の黑龍江の下流

渤海の國號

渤海の最大版圖

渤海の滅亡
(十四王二百十五年)

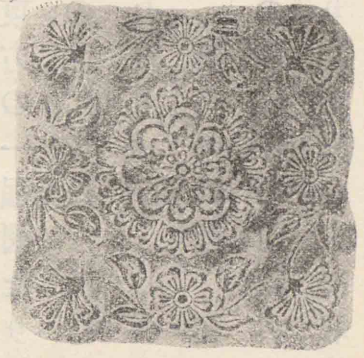
耶律阿保機



1六〇頁の地圖を見よ

渤海の瓦の紋様

渤海國都の遺址にて發見せられたるもの、其の紋様の巧麗なるを、文化の由りて、低からざることを察すべし



て遼といへり。契丹は既に久しく支那の文化を容れ、支那の人物を用ひて、自國の文化を開發することゝを勉めたりき。當時契丹の地に寄寓せる支那人頗る多かりしなり。

宋太祖の像



第二章 宋の一統 宋・遼・西夏の關係

趙匡胤

宋初の政策

宋の支那一統

宋遼交戦

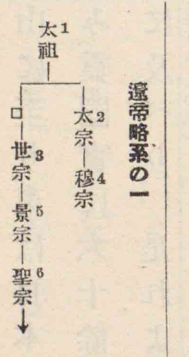
1今の直隸省 漢陽縣(開州)

澶州の役

2毎年贈物にして銀と絹となり

宋の一統 遼の太宗去つて後、支那にては、後漢、後周相次いで起り、後周の將軍趙匡胤は、九六〇年(平將門の死後二十年)兵士に推されて、後周に代り、汴京に即位せり、之を宋の太祖といふ。太祖は、唐末以來武人跋扈の害に鑑み、宰相趙普と謀り、節度使を罷めて兵權を朝廷に握る計を爲し、以て前代藩鎮の弊害を除かむと欲したり。次の太宗に至りて、全國みな宋の統治に歸しぬ。

宋遼の交戦 太宗は、北邊十六州を恢復せむとて、遼を伐ち、却て大敗し、これより宋・遼の好み絶えたり。その子眞宗は、遼の聖宗の南侵を防がむとして澶州(又は澶淵)に出陣せしが、講和の議起り、一〇〇四年、巨額の歳幣を與ふるを約して兵を解けり。聖宗の代は、遼の最盛時代にして、その領土、



新法の反對者

王安石の像



均輸・市易・保甲・保馬などの新法を斷行したり。
新法の結果 是の新法は、舊制・習俗に反するのみならず、その實行の方法宜しきを得ざりしかば、國民は一般にこれを喜ばず、司馬光・歐陽修・蘇軾等の名臣も、その弊害の多きを論じてこれに反對し、相次いで朝廷を去り、王安石の一黨獨り榮へ、國民皆怨みて、國情騒然たりき。加ふるに神宗は、富強の實效舉がらざるに、頻に外征の軍を發し、交趾・西夏を討ちて損害多く、遼を侵して却つて北邊の地を奪はれ、其の雄圖全く失敗に終りたり。

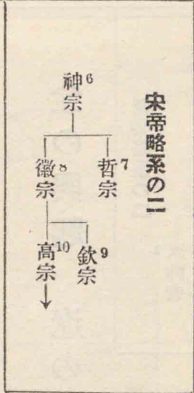
哲宗及び徽宗 神宗死して、哲宗嗣ぎ、宣仁太后攝政の間

神宗の失策

1 宋人呼びて女中の堯舜といひこの時の年號を元祐といへり

元祐の治

は、司馬光を宰相とし、新法を停止して、所謂元祐の治を成したれど、一〇九三年、帝の親政となりて、王安石の餘黨また用ひられ、次の徽宗の代には、元祐の名臣たり



政治の紊亂

宋代風俗 天子游幸の狀を寫す

し司馬光等數十人を姦黨と名づけ、専ら王安石を追尊するに至れり。徽宗また、道教に溺れて、冗費夥しく、花石を弄び書畫を好み、美術の發達を奨めたれ



遼の衰微

ども、亂政愈、甚しく蔡京等の姦人用ひられて、國人大に苦めり。遼に在ても、聖宗の孫道宗の代より、國政亂れ、道宗の孫天祚帝闇弱にして、國勢大に衰へ、正に宋の徽宗と時を同じうせり。

第四章 金の興起 宋金の關係

阿骨打

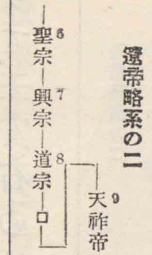
金の興起

遼の東北方に黒水靺鞨の後なる女眞といへる民族あり。其の酋長阿骨打、遼に叛き、

金の國號

1今のハルビンの東南

女眞風俗
明初の書に見ゆるもの



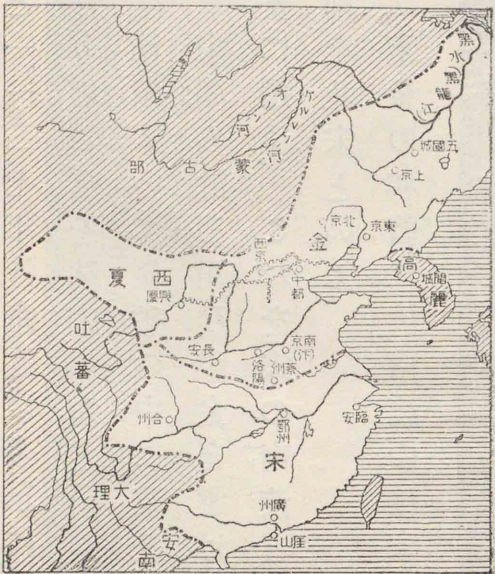
(源義家死後七年) 一一一五年帝と稱して、國を金と號し、會寧府に都せり、金の太祖これなり。次いで太



宋金の同盟
遼の滅亡
(九帝二百十年)
西遼

祖は、遼の天祚帝の大軍を撃ち破りて、南下ししが、宋の徽宗これを聞き、金と同盟を約して、遼を夾撃す。然るに、宋軍は利を失ひしが、金軍は連りに捷ち、一一二五年、遂に遼を滅ぼしぬ。遼の皇族耶律大石、遠く西に走りて別に一國を立つ、之れを西遼といふ。

1今の北京
宋の南渡
宋金要圖
金の太宗の南侵



宋の南渡 遼亡びて、その故地は金に入り、宋は僅に燕京附近の數州を得たるのみ。これより金は宋を侮り、金の太宗連りに南侵を企つ。徽宗の子欽宗は、將軍李綱の策を容れず、地を割きて和を請ひしか

1 欽宗の年號
靖康の變
2 今のハルビ
ンの東北約
七十里なる
三姓城附近

岳飛

岳飛の筆蹟

秦檜の和議

ど、(保元の亂前二十九年)一一二七年、汴京遂に金軍に陥れられ、徽宗・欽宗共に擒となりぬ、これを靖康の變といふ。二帝後に、金の五國城に囚はれ、相次いで憂愁の中に歿せり。欽宗の弟高宗即位し、將軍宋澤の計を用ひず、金を避けて、(保元の亂前十八年)一一三八年、都を江南の臨安に遷す。これを宋の南渡といひ、高宗即位より後を南宋、前を北宋といふ。

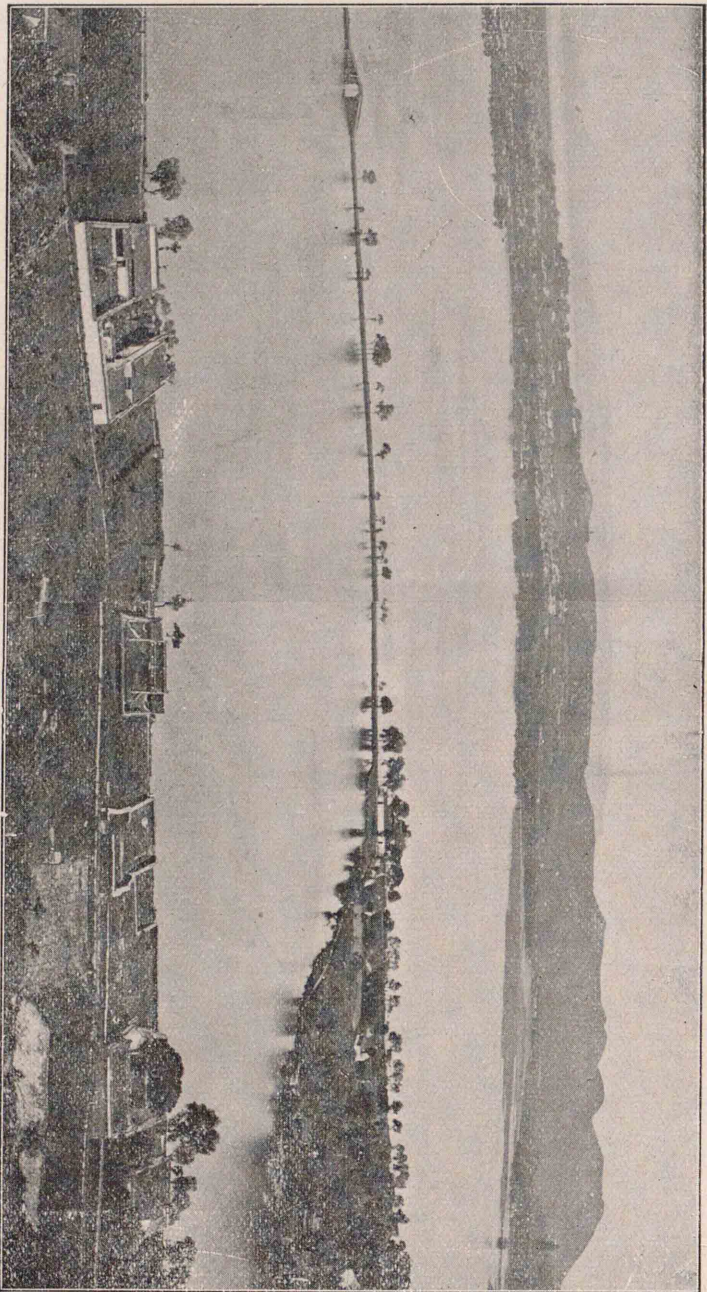
宋金の和戦(上)

南渡の後、宋軍は金の南下を拒ぎ、將軍岳

送宋將張先生北伐
辨令風定送玄聲
劫北隊長龍
渡河以直擣向燕
幽三跡
關氏
血梅魚
元千頭
早末
隸
明主
恢復
神州
紹興五年
秋
日
岳飛
拜

飛の如きは、北に進んで汴京附近に達し、殆ど黄河の平原を恢復せむとしたり。然るに、宰相秦檜は、高宗の意を迎へて、これを喜

(三中東、六六一六七)



景現の方地安臨都國の宋南

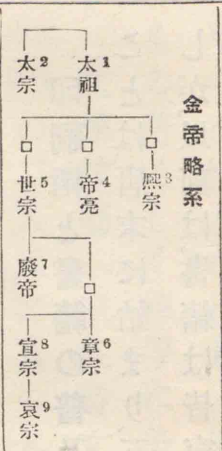
臨安(杭州)は南宋の國都にして、有名なる西湖の東岸にあり。西湖は、その風光の佳麗なるを以て世に名高く、南宋の高宗が都を臨安に選みたるも實は西湖の風光を愛したればなりとの説あり。本圖は西湖と杭州市街(左上)との遠景にして、南宋故宮は、本圖の右上に當る山の麓に在りしなり。

1今の陝西省寶雞縣東南
金帝亮の南侵

金の世宗

宋の孝宗

宋金の平和



ばず、(保元の亂前十五年)一四一年、忠勇無雙の岳飛を罪して金と和し、宋は歳貢を納め、淮水大散關を以て兩國の境界となし、金に臣事して、その封冊を受くることとなりぬ。既にして金帝亮は、都會寧府より燕京に遷し、大軍を起して宋を滅ぼさむとししが、軍中にて弑せられ、世宗に至りて兵を罷めたり。

宋金の和戦(下)

金の世宗は、國人の漢俗に倣ふを禁じて、質朴の國風を保守することを勉め、また善政を布きて平和を重んじたが、宋の孝宗も亦賢主にして、世宗と時を同じうし、爲めに、南北三十餘

年の平和を得たり。宋の寧宗の時に至り、韓侂胄權を弄し、妄りに金を伐ち、却つて大敗せしかば、寧宗は韓侂胄を殺し、歳幣を増し

宋帝略系の三

高宗¹⁰…孝宗(太祖十七世孫)光宗¹²—寧宗¹³↓

宋金の衰微

て金の章宗に謝しぬ。當時宋金共に衰へ、蒙古新に北方に興りて、金の背後を襲はむとしつつありき。

第五章 宋代の文化

書籍の板行

印刷術と書籍の普及 一般の書籍を木版にて印刷することは、唐末に始まり、五代を経て宋に至り、大に流行したりしが、以前は、書籍は皆寫本なりしを、今や版本行はれて、大に書籍の普及を助くるに至れり。活版の法も、宋の仁宗の代に畢升ヒシヤウといへるもの之れを創案し、膠カウを固めて活字を作れり。後世に至りて、木銅鉛などを用ひることとなれり。宋學と朱子 唐代には、訓詁の學風なほ行はれたりしを、宋に至りて、學風一變し、深奥なる哲理を研究することとなりぬ。この學風は、訓詁學に對する反動に外ならざれど、又

活版の發明

宋代學風の一變

宋學と禪學

朱熹の像

朱熹と宋學



陸九淵

詩文

畫院と院畫

一つには、宋代に流行したる禪學の影響を受けたること少からず、周敦頤シュンニク、程顥テイカウ、明道メイダウ、程頤テイイ、伊川イケン、先生シヤンシヤウ、など、先づこの學風をひろめ、南宋の朱熹シュイこれを大成したり。これを宋學といひ、これより儒學の正統となれり。朱熹と同じき頃、陸九淵リククワン、象山シヤンシヤウといへるもの、著るしく禪學に染みて、別に一派を立てたり。文學技藝 宋代詩文の盛なること唐に次ぎ、歐陽修ウヤウシウ、蘇軾ソキツ、號はの二人殊に其の名高し。書には蔡襄サイシヤウ、米芾マイヒの如き名手あり、畫は殊に盛に行はれ、朝廷に畫院クワエンの設けありて、畫の名手を養ひ、徽宗の如きは、殊に之れを奨勵したり。南宋の畫院も亦盛にして、其の畫家の作を院畫ケンクワといひ、李唐リタウ最も名高

りき。道敎も亦、眞宗以後、諸帝に信奉せられ、徽宗の如きは自ら敎主道君皇帝と稱して、大にこれを崇め、一時頗る流行

年表 (其四)

年代	重	要	記	事	時代	國	史	對	照
九〇七 一〇〇〇 (百年間)	九〇七	唐亡び後梁これに代る			五代	九〇一	菅原道眞流さる		
	九一六	契丹の太祖、帝と稱す				九一四	三善清行、封事を上る		
	九二二	後唐、後梁に代る				九一八	高麗興る		
	九二七	渤海契丹に滅ぼさる				九三五	高麗、新羅を滅ぼす		
	九三六	後晉、後唐に代る				九四〇	平將門誅せらる		
	九三七	契丹、國號を建てて遼といふ							
	九四六	契丹後晉を滅ぼす							
	九四七	後漢興る							
	九五〇	後周、後漢に代る							
	九六〇	後周亡び、宋興る							
	九七二	大藏經出版せらる							
一〇〇一 一〇〇〇 (百年間)	一〇〇四	遼の聖宗、宋を伐つ(瀋州の役)			北	一〇一九	刀伊の賊鎮紫に寇す		
	一〇一〇	遼の聖宗、高麗を破る				一〇二七	藤原道長卒す		
	一〇一八	遼軍大に高麗に破らる				一〇六二	前九年の役終る		
	一〇二二	宋の仁宗即位(在位四十一年)				一〇八六	院政始る		
	一〇三二	西夏興る				一〇八七	後三年の役終る		
	一〇四四	仁宗、西夏と和す							
	一〇五四	交趾の李氏、國を大越と號す							
	一〇六七	宋の神宗即位(在位十八年)							
	一〇七〇	王安石、相となる(六年を経て罷めらる)							
	一〇七二	歐陽修卒す(歳六十六)							
	一〇八六	司馬光王安石卒す(司馬光歳六十八、王安石歳六十六)							
	一〇八五	宣仁太后攝政(元祐の治)							
	一〇九三	宋の哲宗親政、王安石の餘黨用ひらる							
一一〇一 一一〇〇 (百年間)	一一〇一	蘇軾卒す(歳六十六)			宋	一一一三	延暦興福二寺相戦ふ		
	一一一五	金興る				一一二一	延暦寺の僧園城寺を焼く		
	一一一九	宋の徽宗道敎を奉じ佛敎を虐待す							
	一二二五	遼、金に滅ぼさる			宋				
	同	西遼の建國			朝				
	一一二六	金軍汴京に迫り宋和を乞ふ				一一四五	興福東大二寺相戦ふ		
	一一二七	金軍汴京を陥れ宋の二帝を囚ふ(靖康の變)				一一五六	保元の亂		
	一一三一	秦檜宋の相となる				一一五九	平治の亂		
	一一三八	宋の高宗の南渡、				一一八〇	源氏興る		
	一一四一	宋の秦檜岳飛を殺す、				一一八五	壇浦の戦、平氏亡ぶ		
	一一五三	金、都を上京より燕京に遷す				一一九二	頼朝征夷大將軍に拜せらる		
	一一六一	金の世宗即位(在位二十九年)							
	一一六二	宋の孝宗即位(在位二十七年)							
	一一九四	韓侂胄、宋の寧宗に用ひらる							

年 表 (其四)

年 代	重 要 記 事	時 代	國 史 對 照
九〇一 一〇〇〇 (百年間)	<p>九〇七 唐亡び後梁これに代る</p> <p>九一六 契丹の太祖、帝と稱す</p> <p>九二二 後唐、後梁に代る</p> <p>九二七 渤海契丹に滅ぼさる</p> <p>九三六 後晉、後唐に代る</p> <p>九三七 契丹、國號を建てて遼といふ</p> <p>九四六 契丹後晉を滅ぼす</p> <p>九四七 後漢興る</p> <p>九五〇 後周、後漢に代る</p> <p>九六〇 後周亡び、宋興る</p> <p>九七二 大藏經出版せらる</p>	五 代	<p>九〇一 菅原道真流さる</p> <p>九一四 三善清行、封事を上る</p> <p>九一八 高麗興る</p> <p>九三五 高麗、新羅を滅ぼす</p> <p>九四〇 平將門誅せらる</p>
一〇〇一 一〇〇〇 (百年間)	<p>一〇〇四 遼の聖宗、宋を伐つ(瀘州の役)</p> <p>一〇〇〇 遼の聖宗、高麗を破る</p> <p>一〇一八 遼軍大に高麗に破らる</p> <p>一〇二二 宋の仁宗即位(在位四十一年)</p> <p>一〇三八 西夏興る</p> <p>一〇四四 仁宗、西夏と和す</p> <p>一〇五四 交趾の李氏、國を大越と號す</p> <p>一〇六七 宋の神宗即位(在位十八年)</p> <p>一〇七〇 王安石、相となる(六年を経て罷めらる)</p> <p>一〇七二 歐陽修卒す(歳六十六)</p> <p>一〇八六 司馬光王安石卒す(司馬光歳六十八、王安石歳六十六)</p> <p>一〇八五 宣仁太后攝政(元祐の治)</p> <p>一〇九三 宋の哲宗親政、王安石の餘黨用ひらる</p>	北 朝	<p>一〇二七 藤原道長卒す</p> <p>一〇一九 刀伊の賊筑紫に寇す</p> <p>一〇六二 前九年の役終る</p> <p>一〇八六 院政始る</p> <p>一〇八七 後三年の役終る</p>
一一〇一 一一〇〇 (百年間)	<p>一一〇一 蘇軾卒す(歳六十六)</p> <p>一一一五 金興る</p> <p>一一一九 宋の徽宗道教を奉じ佛教を虐待す</p> <p>一二二五 遼、金に滅ぼさる</p> <p>同 上 西遼の建國</p> <p>一二二六 金軍汴京に迫り宋和を乞ふ</p> <p>一二二七 金軍汴京を陥れ宋の二帝を囚ふ(靖康の變)</p> <p>一二三一 秦檜宋の相となる</p> <p>一二三八 宋の高宗の南渡、</p> <p>一二四一 宋の秦檜岳飛を殺す、</p> <p>一二五三 金、都を上京より燕京に遷す</p> <p>一二六一 金の世宗即位(在位二十九年)</p> <p>一二六二 宋の孝宗即位(在位二十七年)</p> <p>一二九四 韓侂胄、宋の寧宗に用ひらる</p> <p>一二〇〇 朱熹卒す(歳七十二)</p>	南 朝	<p>一一一三 延暦興福二寺相戦ふ</p> <p>一一二一 延暦寺の僧闍城寺を焼く</p> <p>一一四五 興福東大ニ寺相戦ふ</p> <p>一一五六 保元の亂</p> <p>一一五九 平治の亂</p> <p>一一八〇 源氏興る</p> <p>一一八五 壇浦の戦、平氏亡ぶ</p> <p>一一九二 頼朝征夷大將軍に拜せらる</p> <p>一一九九 頼朝卒す</p>

佛教文學

金代交鈔
の一例
四朝鈔幣圖
説に據る

交鈔

したれど、宋の南渡以後は、二教ともに、漸く衰へたり。

遼金の文化 遼の文化は漢人に負ふ所多く、金の文化は

又遼に負ふ所あり。

遼金共に文字を作り、

遼は又大藏經を出版

し、金代には元好問グンカクモシは號

遺といへる詩人あり。

南宋の代に、初て紙幣

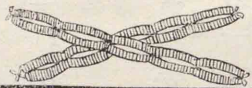
を作りたるが、金は之

れに倣ひて、又紙幣を行へり、所謂交鈔カウシャウこれなり。

第六章 蒙古の勃興(上)

成吉思汗

蒙古人モリコは、今の外蒙古のオノン・ケルレン二河



興定寶泉	
貳貫	
字號	字新
路	京南

奉准印造興定寶泉並同見錢行用不限年月流轉通行
寶泉庫子 五 貫 五
印造庫子 五 貫 五
偽造者斬賞陸伯貫仍給犯人家產
興定六年二月日
寶泉庫使 戶部尚書 公 立

蒙古の勃興
地鉄木眞

成吉思汗

1 成吉思汗は廣
大汗は君の
意
西夏及び金
征伐

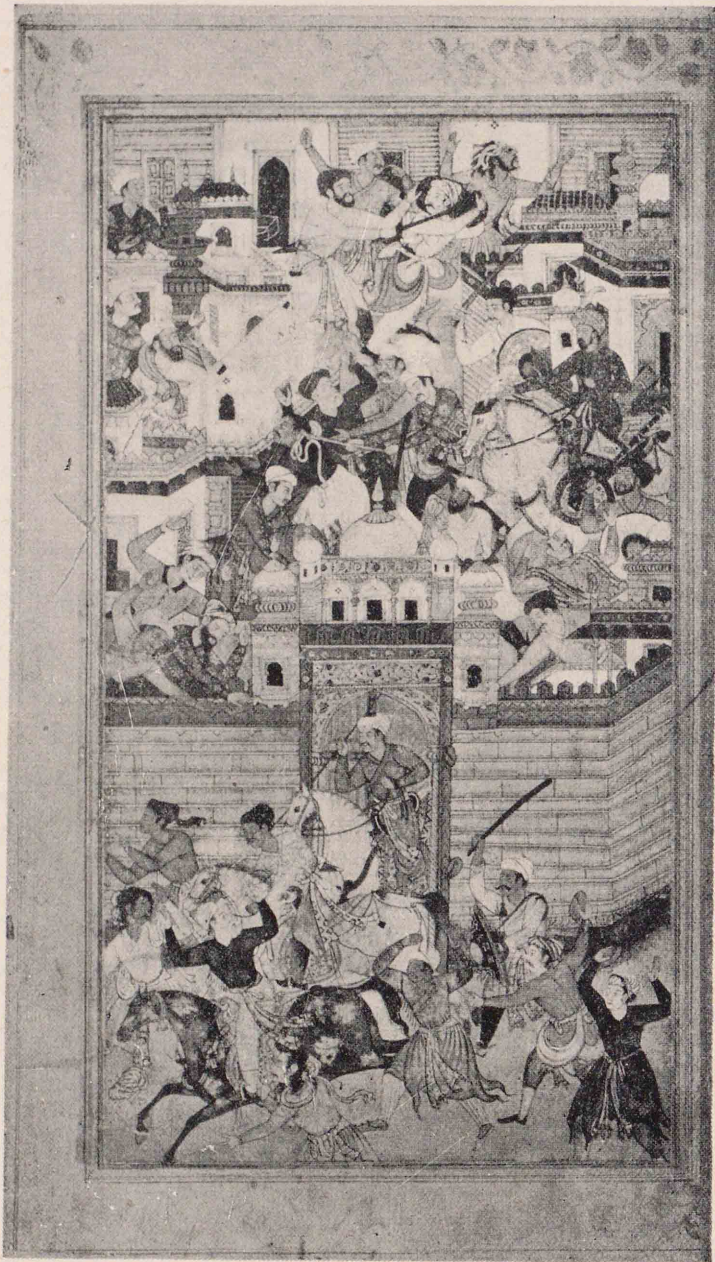
2 前の六五頁
を見よ

西遼の滅亡
(三三七七
年)

蒙古の西遼
の故地併呑

の土源地方に興り、夙に遼金に隸屬せり。その酋長鐵木眞奮ひ起つて、近隣諸部を打ち従へ、西隣の乃蠻部を滅ぼし、今の外蒙古の地、殆ど皆その領土となりぬ。(源實朝將軍の三年)一二〇六年、鐵木眞は推されて諸部の大君主となり、成吉思汗と號す、所謂元の太祖これなり。成吉思汗、西夏を討つてこれを降し、金を攻めて一度これと和したりしが、金の宣宗都を南方の汴京に遷せりと聞き、その己れを疑へるを怒り、再び南下して、黄河以北の地を奪へり。

西遼の盛衰 是れより先、西遼は今の中亞細亞の北部に於て大國となり、その勢一時強大なりき。然るに第三代の君に至り、成吉思汗に滅ぼされたる乃蠻部の王子を保護したるに、(源頼家將軍の二年)一二〇一年、この王子反つて西遼の國を奪ひ、その地に據りて、蒙古に復讎せむとす。成吉思汗乃ち將軍哲別を



帖木兒時代風の俗

(三中東、七二一七三)

この圖は帖木兒時代の中央亞細亞の風俗を畫けるものにして、原畫は、英國博物館の所藏なり。サマルカンド城の戦を畫けるものなれども、何の事件を指せるかは不明なり。サマルカンドは帖木兒の都したる城にして、中央亞細亞に於ける文化の中心たりし著名の地なり。この圖に由りて、當時の服装、建築、裝飾その他の風俗を窺ふ可きなり。その風俗は、主としてマホメット教の影響を被れるものなり。

西征の原因

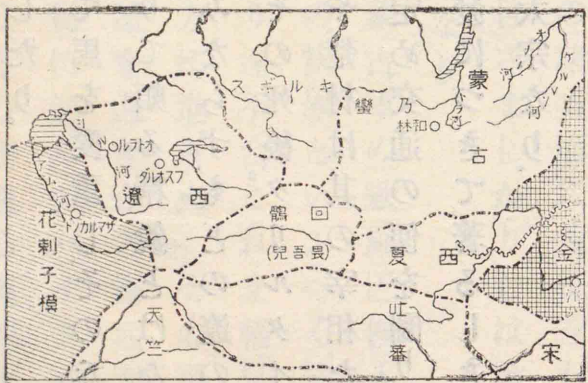
花刺子模の滅亡

蒙古勃興時代略圖

- 1 今の露西亞の東南部
- 2 今の露西亞

西夏の滅亡
(十帝百九十一年)

遣り、これを伐ち滅ぼさしめて西遼の故地を取りぬ。
成吉思汗の西征 西遼の西に、花刺子模といへる大國あり、乃蠻の王子に與して、西遼を滅ぼし、地をひろめて勢を恃み、蒙古の隊商を殺せり。成吉思汗大に怒り、一二一九年、親ら大軍を率ゐて、花刺子模を侵し、四年ならざるに悉く其の國を平らげぬ。その間に、哲別速不台の二將は、なほ遠く西に向ひ、裏海の西岸を繞り、欽察部族及び斡羅思の諸侯を破りて、蒙古の威武を輝かせり。かくて成吉思汗は征戰七年にして蒙古に還り、領土を子弟に分ち、間もなく南征して西夏を滅ぼし、更に金を侵さ



成吉思汗の死去

1 今の甘肅省の東邊にあ

蒙古騎兵の精強

クリルタイ

2 大會議の意

を以て皇帝

を選ばしめ

て征伐する

ことを決す

るもの

議するもの

耶律楚材と

蒙古國初の

文化

むとして、(北條泰時執權の三年)一二二七年、六盤山の南に歿したり。

國初の文化 蒙古は游牧の民にして、馬を愛重し、その兵は皆騎兵となり、成吉思汗の訓練に由りて頗る精銳とはなりぬ。成吉思汗は軍事に長けたるのみならず、もとの遼の人耶律楚材を用ひて施政に心を留め、その死後、クリルタイの決議に由り、第三子窩濶台即位するや、楚材は其の宰相たること凡そ二十年、その間、租税の法を定め、交通の便を圖り、財政を整へ、禮法を立て、蒙古文化の開発につきて、著るしき成績を挙げたり。窩濶台は、即ち元の太宗なり。

第七章 蒙古の勃興(下)

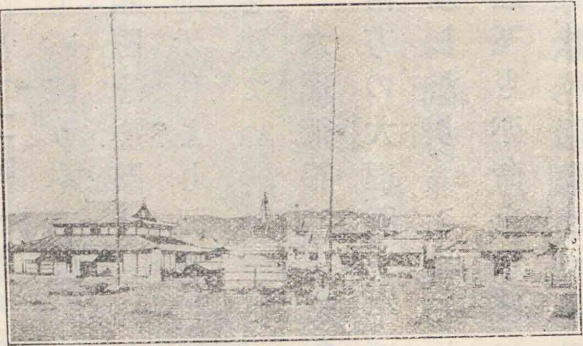
金の滅亡 太宗即位の頃、金は蒙古と宋とに挟まれて、勢益衰へたりしが、太宗は父の志を紹ぎ、金を伐つて汴京を陷

金の滅亡
(九帝百二十年)
和林建都

和林の現景

外蒙古の中
部、オルコ
ン河の東に
在り今はエ
ルデニダ
といひ喇嘛
と大寺あり
教の圖に見
ゆるもの即
ち是れなり

蒙古の歐羅
巴侵略



れ、更に宋と同盟して、金帝哀宗を蔡州(北條泰時執權の十年)に夾撃し、一二三四年全く金を打ち滅ぼしぬ。太祖の頃は、未だ定まれる都なかりしが、金の亡べる翌年、太宗は、都を和林(カラコルム)に建て、更に宋・高麗・印度の諸方面に遠征を行はせたるが、就中目ざましかりしは、歐羅巴侵入の壯舉なり。

拔都の西征 蒙古軍の歐羅巴侵入は、實に東洋史上の快舉といふべく、拔都(太宗の甥)總督となり、速不台(ゴイ)これを輔け、大軍潮の如く西方に進みぬ。その軍は、中亞細亞の北邊を過ぎ、今の露西亞の南部を蹂躪し、更に進んで、バイダルの率ゐたる別軍は、今の獨逸の東邊を

ワールスタ
ットの戦
1 ベルリンの
東南約七十
里

欽察汗國の
建設

大理征服

2 唐代の南詔
にして今の
雲南

宋征伐

旭烈兀の西
征

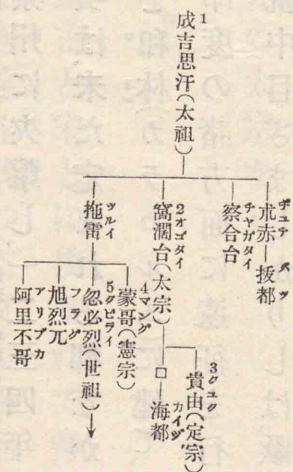
木刺斡族
3 襄海南岸の
山中に住み
暗殺を得意
としたり

侵し、一二四一年、大に北歐羅巴諸侯の聯合軍をワールスタ
トに破り、本軍は、匈牙利を衝き、到る所猛威を示して、歐羅巴
諸國を震撼せしめたり。會、太宗の死せるを聞き、蒙古軍は
匈牙利より凱旋し、拔都は欽察に止まりて、ここに欽察汗國
を建てぬ。

大理征服並に旭烈兀の西征

憲宗の時、弟忽必烈をして
南方の大理國を平げしめ、親ら宋を伐ち、不幸にして陣中に
歿したり。これよりさき、弟旭
烈兀も亦命を承けて、西亞細亞
征伐に向ひ、まづ強暴なる木刺
斡族を滅ぼし、次で、一二五八年、
Bagdadi Saracen
バグダッドを陥れて、東サラセン
國を滅ぼし、更に、シリヤを取り、

蒙古帝略案



伊兒汗國の
建設

1 伊兒汗とは
大君の義

燕京遷都
元の國號

漢人文化の
採用

元の世祖
の像

宋都陷落

アム河以西、今の波斯の地方に伊兒汗國を建てたり。

第八章 元の極盛

元の世祖と宋の滅亡 憲宗の歿するや、弟忽必烈は、正式
のクリルタイに由らずして位に即く、之れを世祖といふ。次
で世祖は、都を燕京に遷し、一二七一年、國號を建てて元と稱



し、支那の文化を採用して、諸般
の制度を定めたり。その頃宋
にては、賈似道政を恣にし、元と
の約束を守らざりしかば、世祖
怒りて、伯顔をして大舉南征せ
しむ。宋の文天祥、張世傑等防
戦甚だ力めたれども、皆敗れ、忠

文天祥正氣歌碑
明代に建てられたるものにして現存す

厓山の戦

1 今のカントンに近し

宋の滅亡 (十八帝三百二十年)

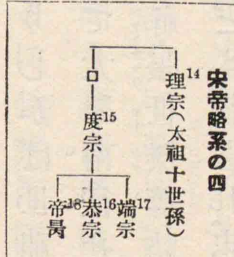
元と我國の關係
元の東征の失敗
2 今の英領緬甸
3 今の安南の南邊



七九年、厓山嶋の海戦に、陸秀夫九歳の帝昺を負うて海に沈み、宋の運命全く窮まりぬ。

元の東侵及び南海遠征 是れより先、世祖は全く高麗を臣服せしめ、進んで我國をも歸服せしめむとしたりしに、鎌倉の執權北條時宗が斷乎としてこれを斥くるに及び、前後二回東征を企てて大敗を招きたり。されど世祖は南海地方の遠征には、概ね成功し、緬國占城を恐れしめ、又ジャヴァスマ

烈の士、なほ恢復を圖りたるものあれど、次第に元軍に撃ち破られ、(弘安二年) 一二



南海遠征の成功

蒙古人の風俗

未曾有の大元朝の直轄地
1 察合台は成吉思汗の第二子にてその父より與へられたるものなり
2 即位して太宗となす前に其の領地を子孫に保つ



印度支那の地方を服屬せしめ、その他の領土は、察合台汗國、窩濶台汗國、欽察汗國、伊兒汗國の四ツに分たれ、各、元朝の藩

トラ等の南海諸島へも、蒙古の武力を示したり。

蒙古の最大版圖 成吉思汗

汗より世祖に至るまで、凡そ八十年の間に、蒙古の領土は、東は滿洲より西は黒海に至り、北はバイカル湖より南は安南北部に及び、前古未曾有の大帝國となりぬ。而して元朝は、支那本部、蒙古、滿洲の領主となりて、旁ら朝鮮、西藏

東西交通の
開けし原因

元朝極盛時
代略圖

貿易港
マルコ・ポーロ



屬となりたり。

東西の交通 蒙古の領土が、歐亞兩大陸に跨りたると、蒙古が政治軍事の目的を以て交通の便を圖りたるとは、東西交通の發達を促し、歐羅巴人の遠く蒙古に往來せるもの多く、海上の交通も亦大に開け、杭州・泉州等は名高き貿易港となり、外國人の來往するもの少からざりき。中にも、伊太利人マルコ・ポーロ

Marco Polo

マルコ・ポーロの東方見聞の事物語の歸國の後、軍中にて捕虜となり、獄中に在りて、物語を左に立てり、左にマコナリ

マルコ・ポーロの事蹟

元衰亡の速かなりし理由 13章の第十三章を見よ



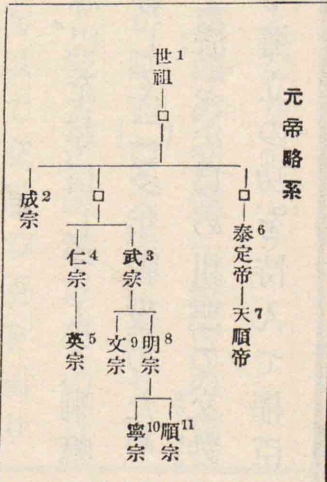
は、久しく世祖に仕へ、普く東方の事情に精通し、歸國の後、東方の見聞録を公にし、その中に、わが國をも、ジバング國Zipangu日本として、歐羅巴人に紹介したり。

第九章 元の衰亡

帖木兒

元の衰亡 (一)世祖が喇嘛僧八思巴を尊信してより、喇嘛僧徒驕横にして、佛事供養の費用夥しく、(二)多年戦役のため、財力の窮乏を告げ、(三)財政の困難を濟ふが爲め、粗惡の交鈔カウチョウを發して物價の騰貴を招き、(四)新帝擁立の功を恃んで、權臣

專横の行多く(五)漢人をば重く用ひざりし爲め、漢人の不平絶えざりしことなどは、元朝衰微の原因にして、成宗以後、國內穩かならず、かくて順帝の時には、漢人諸方に叛亂を企てしが中にも、朱元璋は、微賤より身を起し、金陵に據りて國を明と號し、その將徐達を遣はして燕京を奪はしめ、一三六八年、順帝を北方に驅逐したり。



朱元璋
1今の江蘇省江寧縣(南京)

元の滅亡
(世祖より十一年) 一三〇九年

窩濶台汗國
察合台汗國
伊兒汗國

諸汗國の盛衰 元朝衰へたる頃、西方諸汗國も、亦漸く振はず。窩濶台汗國はその君海都の孫、世祖に叛きて四十餘年の間、元と争ひ、海都の子の代に至り、察合台汗國に併吞せられ、察合台汗國は、數、伊兒汗國と争ひて敗れたるのみならず、暴君相つぎて領土分裂し、英傑帖木兒の興起を促しぬ。

欽察汗國

帖木兒の興起

サマルカンド建都

帖木兒の像

三汗國の平定
印度侵入



伊兒汗國はその君合贊の時に、歐羅巴の文物を輸入して、國政大に整ひたりしが、その後、内憂外患に苦しめられ、欽察汗國は、その君月即別の代に、強盛を誇りたれど、間もなく、拔都の正統絶えて、相續の争ひを生じ、國內分裂したり。

帖木兒 蒙古の諸汗國が同じく衰へたる頃、中亞細亞に帖木兒所謂タメルランといふ英傑起れり。帖木兒は夙に成吉思汗の雄圖を慕ひ、まづ中亞細亞當時察合台汗國領を略して、一三六九年都

をサマルカンドSamar-kandに設け、次で、察合台汗國領の大部分を奪ひ、轉じて伊兒汗國を併せ、更に欽察汗國の内亂に干涉して、之れを降す。次で帖木兒は、印度を侵して、掠奪を行ひ、更にオスマン・トルコを撃た

年表 (其五)

年代	重要記事	時代	國史對照
1101-1300 (百年間)	<p>1101 西遊七ヶ</p> <p>1106 蒙古の成吉思汗興る</p> <p>1118 蒙古、西遊の故地を取る</p> <p>1159 成吉思汗西征</p> <p>1177 西夏亡ぶ</p> <p>同上 成吉思汗卒す(歳六十六)</p> <p>1184 金亡ぶ</p> <p>1185 蒙古の太宗和林に都す</p> <p>1136 拔都の西征</p> <p>1141 ワールスタットの戦</p> <p>1143 耶律楚材卒す(歳五十四)</p> <p>1146 羅馬法王の使者和林に到る</p> <p>1153 佛蘭西王の使者和林に到る</p> <p>同上 大理國蒙古に降る</p> <p>1157 元好問卒す(歳六十八)</p> <p>1158 旭烈兀、バグダッドのカリフを滅ぼす</p> <p>同上 安南王陳氏蒙古に降る</p> <p>1159 賈似道宋の相となる</p> <p>1160 元の世祖</p> <p>1160 世祖喇嘛僧八思巴を國師となす</p> <p>1164 世祖燕京に都す</p> <p>1166 海都世祖に叛きて自立す</p> <p>1171 世祖國號を元と改む</p> <p>1179 崖山の戦宋亡ぶ</p> <p>1183 文天祥卒す(歳四十七)</p> <p>1192 元、ジャヴァを征す</p> <p>1194 モンテ・コルヴァノ、燕京に到る(羅馬舊教支那に入る)</p> <p>1195 マルコ・ポーロ支那を去る</p>	南	1119 實朝殺さる
		宋	1121 承久の役
		蒙	1131 貞永式目を配つ
		倉	1142 北條泰時卒す
		古	1153 日蓮法華宗を唱ふ
		時	1162 親鸞卒す
		代	1163 北條時頼卒す
		元	1167 蒙古國書を吾邦に致す
			1174 文永の役
			1181 弘安の役
			1184 北條時宗卒す
			1193 鎮西探題を置く
1301-1400 (百年間)	<p>1304 伊兒汗合贊卒す</p> <p>1310 海都の國(窩闊台汗國)亡ぶ</p> <p>1318 虞集卒す(歳七十七)</p> <p>1368 元亡び明興る</p> <p>1369 帖木兒興る</p> <p>1374 高啓卒す(歳三十九)</p> <p>1376 帖木兒察合台汗國の西部を併す</p> <p>1381 宋濂卒す(歳七十二)</p> <p>1392 帖木兒伊兒汗國を併す</p>	明	1314 正中の變
		野	1331 後醍醐天皇笠置に幸す
		朝	1333 北條高時亡ぶ
		廷	1336 湊川の戦
			1348 四條殿の戦
			1368 足利義満將軍となる
			1388 懷良親王薨す
			1392 吉野朝廷終る

年表 (其五)

年代	重要記事	時代	國史對照
(百年間) 1301-1300	<p>1301 西遊七ふ</p> <p>1300 蒙古の成吉思汗興る</p> <p>1298 蒙古、西遊の故地を取る</p> <p>1299 成吉思汗西征</p> <p>1297 西夏亡ぶ</p> <p>同 上 成吉思汗卒す(歳六十六)</p> <p>1294 金亡ぶ</p> <p>1295 蒙古の太宗和利に都す</p> <p>1296 拔都の西征</p> <p>1291 ワールスタットの戦</p> <p>1293 耶律楚材卒す(歳五十四)</p> <p>1296 羅馬法王の使者和利に到る</p> <p>1293 佛蘭西王の使者和利に到る</p> <p>同 上 大理國蒙古に降る</p> <p>1297 元好問卒す(歳六十八)</p> <p>1298 旭烈兀、バグダッドのカリフを滅ぼす</p> <p>同 上 安南王陳氏蒙古に降る</p> <p>1299 賈似道宋の相となる</p> <p>1300 元の世祖</p> <p>1260 世祖喇嘛僧ハ思巴を國師となす</p> <p>1264 世祖燕京に都す</p> <p>1266 海都世祖に叛きて自立す</p> <p>1271 世祖國號を元と改む</p> <p>1279 崖山の戦宋亡ぶ</p> <p>1283 文天祥卒す(歳四十七)</p> <p>1292 元、ジャヴァを征す</p> <p>1294 モンテ・コルヴァイノ燕京に到る(羅馬舊教支那に入る)</p> <p>1295 マルコ・ポーロ支那を去る</p>	南 宋 古 元 明	<p>1299 實朝殺さる</p> <p>1299 承久の役</p> <p>1292 貞永式目を配つ</p> <p>1292 北條泰時卒す</p> <p>1293 日蓮法華宗を唱ふ</p> <p>1262 親鸞卒す</p> <p>1263 北條時頼卒す</p> <p>1267 蒙古國書を吾邦に致す</p> <p>1274 文永の役</p> <p>1281 弘安の役</p> <p>1284 北條時宗卒す</p> <p>1293 鎮西探題を置く</p>
(百年間) 1301-1300	<p>1301 伊兒汗合贊卒す</p> <p>1300 海都の國(窩闊台汗國)亡ぶ</p> <p>1300 虞集卒す(歳七十七)</p> <p>1300 元亡び明興る</p> <p>1300 帖木兒興る</p> <p>1300 高啓卒す(歳三十九)</p> <p>1300 帖木兒察合台汗國の西部を併す</p> <p>1300 宋濂卒す(歳七十二)</p> <p>1300 帖木兒伊兒汗國を併す</p> <p>1300 帖木兒大に欽察汗國を蹂躪す</p> <p>1300 帖木兒印度に侵入す</p> <p>1300 燕王棧(成祖)靖難の兵を擧ぐ</p>	明 吉野 朝野 廷 室 町	<p>1304 正中の變</p> <p>1301 後醍醐天皇笠置に幸す</p> <p>1303 北條高時亡ぶ</p> <p>1306 湊川の戦</p> <p>1308 四條畷の戦</p> <p>1308 足利義満將軍となる</p> <p>1308 懷良親王薨す</p> <p>1308 吉野朝廷終る</p> <p>1309 高麗亡び朝鮮興る</p> <p>1309 同 上</p> <p>1309 應永の亂</p>

年	紀	事	時	代	朝	史	書	傳	記
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十
...

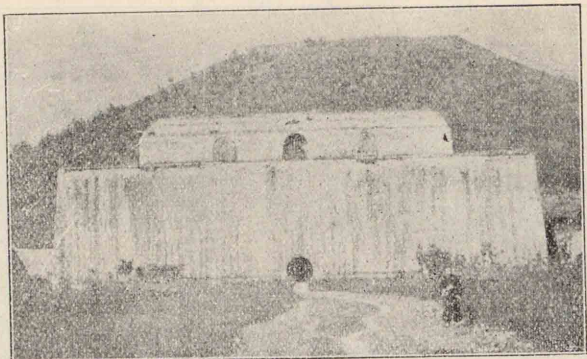
太祖の政策

功臣の殺戮
と一族の分封

明の太祖
の墓
今の江蘇省
江寧縣の郊
外に在り

靖難の名義

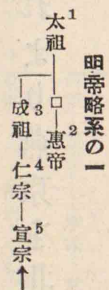
燕京遷都



高祖に同じかりしが、その政策も亦高祖に似たる所あり。即ち帝室の後患を除かむとて、多く創業の功臣を殺し、皇族を各地に封じて、兵力を握らせたるが、後に諸王の勢強大となり、反つて帝室の禍を招くに至れり。

靖難の役 太祖死して、孫惠帝建文帝立ち、諸王の勢力を削りたりしに、かねてより野心を懐き、あたる燕王朱棣ゼンは、君側の姦人を除き、帝室の難を靖やすんずるなりと稱し、兵を燕京に擧げて南下す。宦官等、燕王に内

通し、金陵陥りて、惠帝の行くゑ知れず、燕王代りて帝位に即き、やがて都を燕



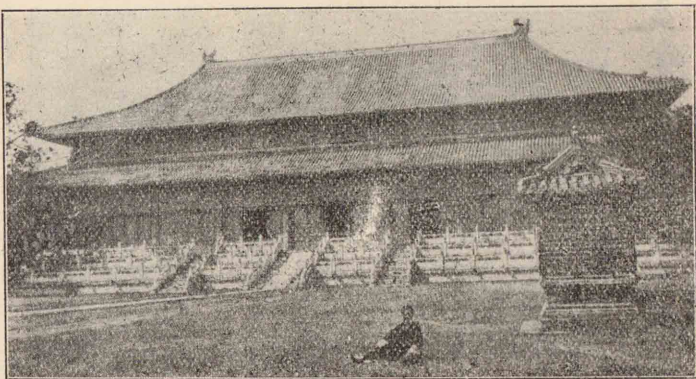
安南併呑

南海諸國の威服

明の成祖の廟
北京の北方昌平縣に在り

韃靼征服
瓦剌征服

明の極盛時代



京に遷しぬ、これを成祖永樂帝といふ。これより燕京を北京といひ、金陵を南京ナシキンといへり。

成祖の遠略 成祖は、安南を伐つて、これを併呑し、宦官鄭和テイワに命じ、艦隊を率ゐて、南海諸國より遠く印度洋沿岸を威服せしめ、蒙古が漠北に逃れ、國を(足利義満)韃靼タタールと號して明に抗するを怒り、一四〇(持將軍の十七年)年、親征して、これをオノン河畔に破り、また韃靼の西方に興れる瓦剌ウラを撃ちて、これに捷ち、明の國威を輝かしぬ。西部亞細亞に大國を建てたる帖木兒が支那を攻めむとししは、實に成祖の代に當れり。

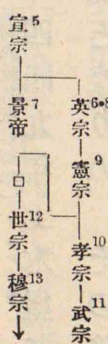
瓦剌の強盛

明の盛世 太祖洪武が全く元朝を漠北に驅逐してよ
り、成祖永樂を経て宣宗宣德の代に及ぶ約五十年間は、
明が強盛を誇りたる時代なり。殊に明が、國初以來、能く官
吏の貪殘を戒めて民政の改善を圖り、その成績唐宋を凌ぐ
と稱せらるるに至りし事は、明朝が永く人心を繋ぎ得たる
所以にして、後に憲宗成化、孝宗弘治の二代約四十年間
も、亦隆盛の名を墮さざるを得たり。

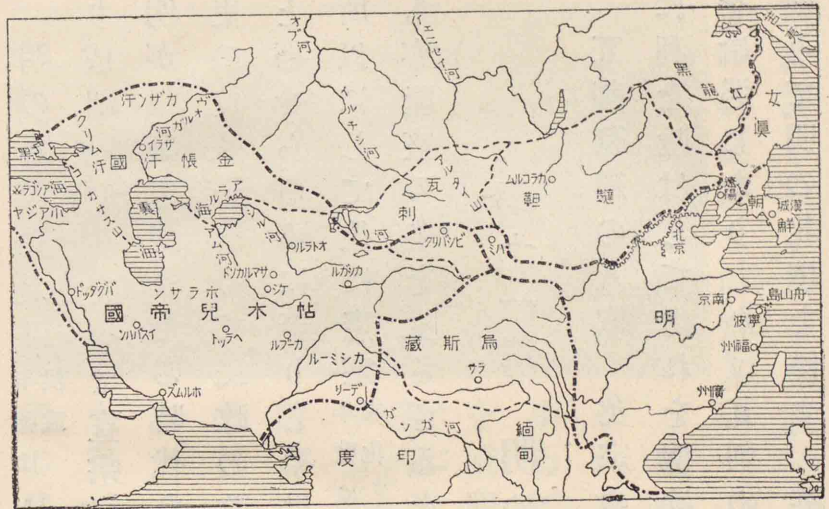
第十一章 明の中世及び衰亂

瓦剌韃靼の入寇 英宗の頃より、瓦剌復た強く、明朝は、初
に利を喰はして之れを懐け、後に之れ
を冷遇したりしかば、瓦剌の酋長也先エシヤン
恨みて、明の北境を侵す。英宗親らこ

明帝略案の二



土木堡の變
 韃靼再興と南侵
 明代要圖
 喇嘛教と内外蒙古
 倭寇の由來



れを討ち、一四四九年土木堡に大敗して擒となりぬ。その後瓦剌衰へ、韃靼の酋長達延順元の七世は、内外蒙古を統一して、勢頗る強く、その孫俺答阿爾は、明の世宗の嘉靖年間、前後三十餘年に互りて、明の北邊を掠めたり。俺答は、晩年喇嘛教に歸依し、其の頃より喇嘛教普く内外蒙古に行はるるに至れり。倭寇の侵害 韃靼類に北邊を掠めたる頃、明は南方に於ていたく倭寇に惱まされたり。

嘉靖の大倭寇

明人の書に見ゆる倭寇の圖



北虜南倭
 倭寇の分子
 朝鮮の役と其の損害

倭寇とは、我が吉野朝廷の頃より、吾が西南諸國の武士邊民など、半商半寇の姿にて支那の沿海を掠めたるものを謂ふ。明は國初より、其の防禦に苦心したれども、倭寇の患止む事なく、世宗の嘉靖年間には、揚子江下流地方に對して最も烈しき害を加へ、明の將軍胡宗憲、戚繼光など、必死に防戦し、一五六年、福建の平海衛にて、戚繼光大に倭寇を破り、一旦その勢を挫きたり。明人は、北虜南倭といひ、深く之れを畏れたりしが、倭寇といひても、その十分の七は明の海賊にして、我が國人は、その十分の三に過ぎざりき。

朝鮮の役 明の太祖の時、(吉野朝廷終れる年)一三九二年、高麗亡びて朝鮮祖始

礦山採掘
増税

東林書院と
東林黨

魏忠賢

東林黨と官
官の衝突

李成之れに代りしが、その第十四代の君宣祖の代に至り、我が豊臣秀吉の軍に攻めらる。明の神宗朝鮮を援けて、戦役七年に亙り、大に財政の困難を感じるに至れり、由つて、普く礦山を採掘し、頻に増税を行ひたるが、姦悪の徒これに乗じて私利を逞しうし、良民大に苦しみて、國情騒然たりき。

東林事件 時に顧憲成といへるもの、神宗を諫むることありて官を免ぜられ、郷里に歸りて東林書院を興し、同志を集めて、講學の傍、頻に政治を評論す。朝野その風を慕ひて、聲援を與ふるもの多く、おしなべて東林黨と呼ばれたり。

熹宗の代となりて、宦官魏忠賢悪事を恣にし、宮中の腐敗甚しく、東林黨の大敵楊漣は、盛に其の非行を難じたるに、豫てより東林黨と相善からざる人々は、魏忠賢を助けて東林黨を迫害し、魏忠賢の一

明帝略案の三

熹宗¹⁵
穆宗¹²—神宗¹³—光宗¹⁴—
毅宗¹⁶

宦官の跋扈

黨朝野に蔓り、政治亂れて、國運日に傾きぬ。

第十二章 莫臥兒帝國 歐羅巴人の東航

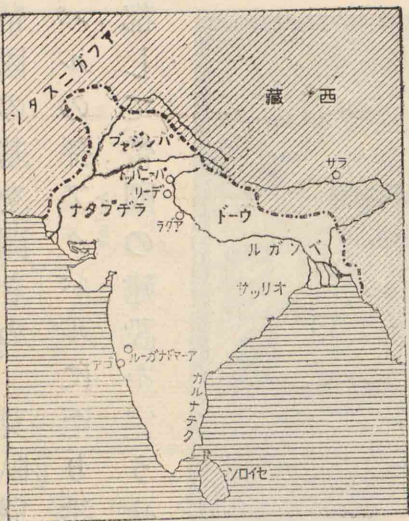
バルの
建國

の像
バル

莫臥兒帝國
の最大版圖

バル
の戦

莫臥兒帝國の建設 帖木兒死して後、九十餘年を経て其の國亡びたり。其の頃、帖木兒の遠孫バルは、印度に入つて別



に國を興さむと欲し、一五二六年、北印度のデーリに都せるロヂ王家を、バルに破りて之を滅ぼし、莫臥兒

阿克バルの北印度平定

莫臥兒朝皇女受教の圖
阿克バル時代の風俗

阿克バルの政策



帝國の基を開きぬ。莫臥兒は即ちモンゴル古蒙なり。阿克バルの孫阿克バルに至り、悉く印度北部を平らげ、アグラに都して、帝國の建設を完うせり。

帝國の盛衰 當

時印度には、印度教徒とマホメト教徒と、各割據して争ひ居たるが、阿克バルは、おのれマホメト教徒たるに係らず、能く印度教徒を好遇して、これを悦服せしめられたれば、威令能く國內に行はれたり。子ジハンジル、孫シャージャハンに代るまで、前後約百

Jehangir

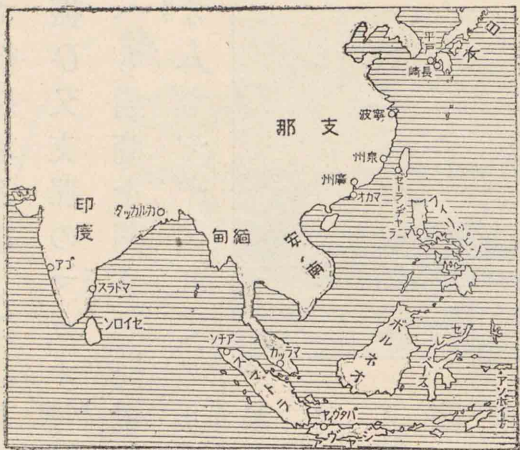
Shah Jehan

帝國の隆盛
アウランゼブの失策

帝國の衰微

歐人東航關係圖

印度航路の發見
ゴア



年の間は、帝國隆盛にして、その頃の壯大なる建築の遺蹟なほ今日に存す。然るにアウランゼブは、英明の君なるに似ず、阿克バルの方針を棄て、印度教徒に迫害を加へたれば、印度人は、南印度にマラータ同盟を起して、激しき反抗を始め、

Maratha

帝は之れを討つて成功せず。一七〇七年帝歿して後は、暗君相次ぎて國中分裂の姿に陥れり。

葡萄牙人の東航 莫臥兒帝國

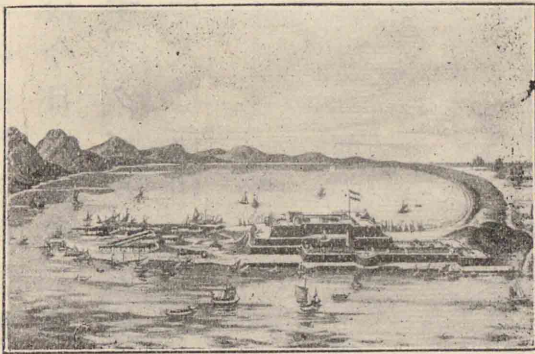
の印度に興れる少く以前、一四九八年に、葡萄牙人は亞弗利加南端を廻りて印度に達する航路を發見したり。次で、一五〇一年葡萄牙人は、印度西岸のゴアを取り

マカオ
葡萄牙人の
東洋貿易獨
占

臺灣に於
ける和蘭
の城市
の遺址は
ヤといひ
の臺址は
の臺南の
存なる安
す

バタヴィヤ

蘭人の臺灣
占領



て根據地となし、これより、印度洋沿岸並に南洋諸島に勢を振ひ又支那のマカオ門澳にも根據地を設けて、支那並に我國へも通商を開き、一時東洋貿易を獨占するに至れり。西班牙人も、やや後れて、フィリピン島を占領し、葡萄牙人と東洋貿易を競ひたれど、勢及ぶこと能はざりき。

和蘭人英吉利人の東航 然るに和蘭人も東洋貿易を始め、一六一九年、南洋のジャバ島にバタヴィヤ市を建て、次第に葡萄牙の勢力を奪ひ、一六二四年、臺灣を取り、支那と通商を開かむとして、葡萄牙人に妨げられたるが、一六四一年以後は、我國との貿易を獨占し、大

英人印度經營の由來

元代の宋學

科學と宋學

王守仁の像

陽明學

に東洋に威を振へり。英吉利人も、一六〇〇年以來、東洋貿易に従事したりしが、南洋並に我國との貿易に於ては、和蘭人に敵するを得ず、支那との貿易に於ては、葡萄牙人に妨げられ、遂に専ら印度の經營に力を注ぐに至れり。

第十三章 元明の文化

宋學及び陽明學 元代にも宋學行はれて、許衡、吳澄など

の學者出でたり。明代にも、官吏採用試験即ち科學には宋學を用ひ、學者多くこれに傾けるが中に王守仁陽明は、明の中世に出でて、宋學の形式に流れたるを排斥し、所謂陽明學を創め、



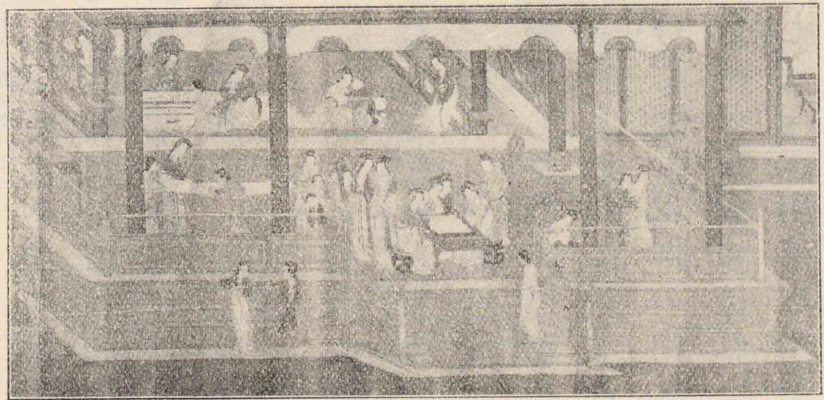
詩文

仇英の宮女風俗圖

戯曲 小説

繪畫 磁器

その學次第に行はるるに至れり。
文學技藝 元代の文章家に虞集ユイシ、
 號あり、明代には宋濂ソウレンの文、高啓カウキは號
 道園、青邱の詩、共に名高く、李夢陽リムウヤウは詩文の
 復古を唱へて、只形式に流れたり。
 而して元代文學の特色とすべきも
 のは、戯曲と小説とにして、戯曲は、其
 の歌詞の巧麗なるを以て聞え、小説
 は、元以前にも存したれど、元に至つ
 て、水滸傳スイコデンの如き頗る長篇にして趣
 向の複雑なるもの現はれたるなり。
 繪畫に於ては、明代に風俗畫流行し、
 仇英キウエイ實父はその名手たり。磁器は、宋

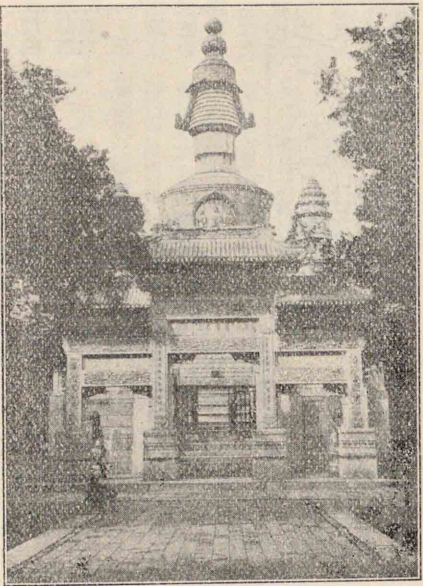


1 今の江西省
南浮梁縣の西

喇嘛教即ち
西藏佛教

支那の喇
嘛寺の
もの
北京に在る

喇嘛黄教と
喇嘛紅教



代既に進歩したれど、明代に入りて殊に精巧を極め、その産
 地として景德鎮テイテイジン最も名高し。

喇嘛教

元明を通じて佛教・道教共に衰へ、元代より喇嘛

教支那に行はる。喇嘛教
 は唐の中世に西藏チベットに興り、
 佛教の一種にして、呪文祈
 禱を旨とし、中に卑俗なる
 信仰を交へたるものなり。
 明の初世に、西藏の名僧宗
 喀巴カバこの教の弊害を改革
 して、所謂喇嘛黄教を創め、これに對して、従前のものを喇嘛
 紅教と稱す。その後、黄教の法主を達賴喇嘛ダライラマといひ、國都拉
 薩ラサに居り、西藏の宗教と政治とを管理することとなりぬ。

モンテ・コ
ルヴァイノと
羅馬舊教

マテオ・リッ
チと
徐光啓
左なるはリ
ッチ、右な
るは徐なり

マテオ・リッ
チと天主教
の布教

西洋學術の
輸入

明の中世以後、黃教は普く内外蒙古にも行はるるに至れり。
クリスト教 元の世祖の代に、モンテ・コルヴァイノ支那に來り、初めて羅馬舊教を傳へ、布教十餘年に及べり。元亡びて



支那のクリスト教大に衰へたるが、明末歐羅巴人の東航始まるに至りて、エスイト會の宣教師マテオリ、
Matteo Ricci
千利瑪支那に來り、支那の思想風習に調和さする如く巧に羅馬舊教(天主教)をひろめ、明の翰林學士徐光啓は、その熱心なる信者となりぬ。
Adam Schall
望 湯若 仁南懷
Fulvio Strozzi
業を繼げり。是等の宣教師は、布教の外に西洋の天文學、曆

<p>一五〇一 一六〇〇 (百年間)</p> <p>一四八八 孝宗(弘治の世)</p> <p>一四九八 葡萄牙人、印度航路を開く</p> <p>一五二二 世宗(嘉靖の世)</p> <p>一五六六 莫臥兒帝國の興起</p> <p>一五二六 王陽明卒す(歳五十七)</p> <p>一五二八 鞏親北京を脅す</p> <p>一五五〇 鞏親大に山西に寇す</p> <p>一五五三 倭寇大に浙江を侵す</p> <p>同 上</p> <p>一五五五 アクバル大帝</p> <p>一五六三 葡萄牙人マカオに據る</p> <p>同 上 倭寇明軍に破られ勢是れより衰ふ</p> <p>一五六五 西班牙人フィリッピン島を取る</p> <p>一五七三 神宗(萬歴の世)</p> <p>一六一九 コサック人始てシベリアを侵す</p> <p>一五七九 マテオ・リッチ支那に來る</p> <p>一五八〇 奴爾哈齊、清の太祖、滿洲に興る</p>	<p>明 時</p> <p>代</p> <p>一四七七 應仁の亂起る</p> <p>一四七九 應仁の亂平る</p> <p>一四九一 北條長氏伊豆を略す</p> <p>一五四三 葡萄牙人鐵砲を傳ふ</p> <p>一五四九 クリスト教吾邦に入る</p> <p>一五五五 嚴島の戰</p> <p>一五六〇 桶狭間の戰</p> <p>一五七〇 姉川の戰</p> <p>一五七二 三方原の戰</p> <p>一五七五 長篠の戰</p> <p>一五八二 本能寺の變、山崎の戰</p> <p>一五八五 豊臣秀吉關白となる</p> <p>一五九二 文祿の役</p> <p>一五九七 慶長の役</p> <p>一六〇〇 關原の戰</p>
--	---

年表 (其六)

年代	重要記事	時代	國史對照
一四〇一 一四〇二 一四〇三 一四〇四 一四〇五 (百年間)	一四〇二 アンゴラの戦 (一四〇三) 明の成祖 (一四〇四) 鄭和の南洋航海(第一回) 一四〇五 帖木兒卒(歳六十三) 同上 鄭和の南洋航海(第二回) 一四〇七 成祖安南を併す 一四一〇 成祖親ら韃靼を征服す 一四一四 成祖親ら互刺を破る 一四一九 明、倭寇を遼東に破る 一四二一 成祖、都を金陵より北京に遷す 一四二八 安南獨立す 一四三〇 鄭和の南洋航海(第六回最終) 一四三九 土木堡の變 (一四二六) 宣宗(宣徳の治) (一四三三) 憲宗(成化の世) (一四四七) 孝宗(弘治の世) (一四八八) 孝宗(弘治の世) (一五〇五) 孝宗(弘治の世) 一四九八 葡萄牙人、印度航路を開く	一四〇一 義満使を明に遣す 一四〇六 義満、明より日本國王に封ぜらる 一四〇八 義満卒す 一四一九 朝鮮の兵對馬を犯す 一四三九 永享の亂 一四六七 應仁の亂起る 一四七七 應仁の亂平ぐ 一四九一 北條長氏伊豆を略す	
一五〇一 一六〇〇 (百年間)	(一五二二) 世宗(嘉靖の世) (一五六六) 莫臥兒帝國の興起 一五二六 王陽明卒す(歳五十七) 一五二八 王陽明卒す(歳五十七) 一五五〇 韃靼北京を脅す 一五五三 韃靼大に山西に寇す 同上 倭寇大に浙江を侵す (一五五六) アクバル大帝 一五六三 葡萄牙人マカオに據る 同上 倭寇明軍に破られ勢是れより衰ふ 一五六五 西班牙人フィリッピン島を取る (一五七三) 神宗(萬歴の世) (一六一九) 神宗(萬歴の世) 一五七九 コサック人始てシベリアを侵す 一五八〇 マテオ・リッチ支那に来る 一五八三 奴爾哈齊(清の太祖)滿洲に興る	一五四三 葡萄牙人鐵砲を傳ふ 一五四九 クリスト教吾邦に入る 一五五五 嚴島の戦 一五六〇 桶狭間の戦 一五七〇 姉川の戦 一五七二 三方原の戦 一五七五 長篠の戦 一五八二 本能寺の變、山崎の戦 一五八五 豊臣秀吉關白となる 一五九二 文祿の役 一五九七 慶長の役 一六〇〇 關原の戦	
	明	時代	
代時山桃土安	代	町	室

近古史綱要

近古史

契丹の興起より、宋・元・明を経て清朝の勃興まで。

吾が平安朝の中頃より、鎌倉時代・足利時代を経て、徳川時代の初に至る。

この間約七百年は、漢人が北方の契丹・女真・蒙古の三民族に壓倒せられて、絶えず屈辱を被りぬたる時代なり。これを分ちて左の三期とすべし。

1 宋遼金交渉時代

五代より北宋を経て南宋に至る約三百年間

吾が平安朝の中頃より源實朝將軍の

代に至るにして、東蒙古に興れる契丹人・滿洲に興れる女真人の勢強く、宋は武力弱くし

て、常に契丹・女真の壓迫に苦しむるたる時代なり。大儒朱熹出でて、宋學を大成したるも、この期間のことにして、佛敎に於ては、禪宗ひとり榮えたりき。

2 蒙古(元)帝國時代

蒙古人の勃興より、元朝の末に至る約百六十年間

吾が源實朝將軍の代より、足

利義滿の時にして、蒙古人が、東は滿洲より西は露西亞に至り、北はバイカル湖より

南は安南に及ぶ空前の大領土を開き、支那全く其の中に併吞せられたる時代なり。當時東西の交通大に開け、西方殊にアラビヤの文化支那に傳はり、歐羅巴人の東方に往來するもの少なからざりき。

3 漢人支那恢復時代

明朝の興起より、滿洲人(清朝)の勃興に至る約二百五十年間

吾が足利義滿の時より、徳川秀忠將軍の代に至るまで

にして、明朝が蒙古人を驅逐して、一旦支那を恢復したる時代なり。帖木兒が中亞細亞に大國を建て、その遠孫が印度に莫臥兒帝國を建てたるも、亦この期間の事なり。

近古史綱要

近古史

漢唐の興起より宋元明を経て清朝の勃興まで。
我が平安朝の中頃より鎌倉時代足利時代を経て徳川時代の初に至る。
この間約七百年は漢人が北方の契丹女真等との交戦に際し、
を討つるなる時代なり。これを分ちてたの三期とすべし。

一 契丹を交渉時代 五代より北宋を経て南宋に至る約三百年間
二 女真を交渉時代 南宋より元を経て明に至る約三百年間
三 蒙古を交渉時代 元を経て明を経て清に至る約三百年間

回教の名の由来

回教の支那傳播

學・數學・測量術・砲術などを傳へて、朝廷に重んぜられたり。
回教 回教即ちマホメト教は、唐代に於て回紇人の間に
行はれ、次で支那内地に入りたるが故に、回教と稱せらる。
その支那内地に入りたる年代詳ならざれども、稍、正確に知
らるるは、元代よりの事なり。回教を一に清真教と呼ぶこ
とも、元末に起れりといふ。

第四編 近世史

第一章 滿洲人の勃興 清の一統

奴爾哈赤

大金の國號

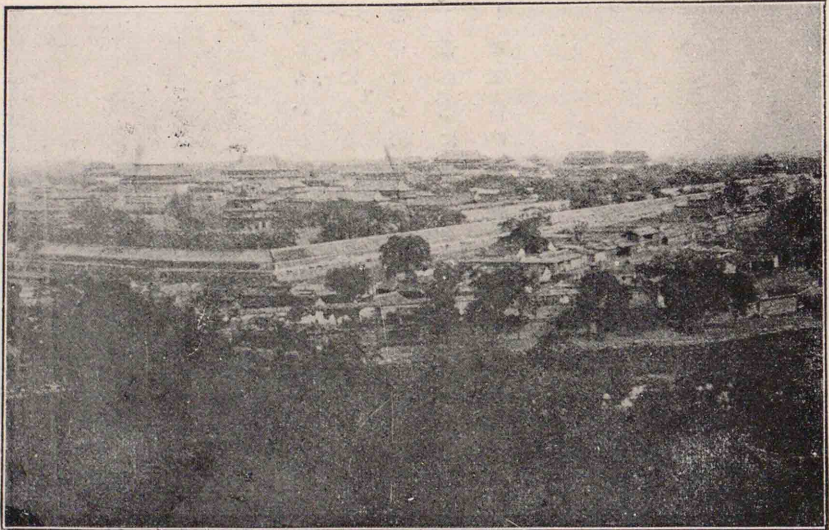
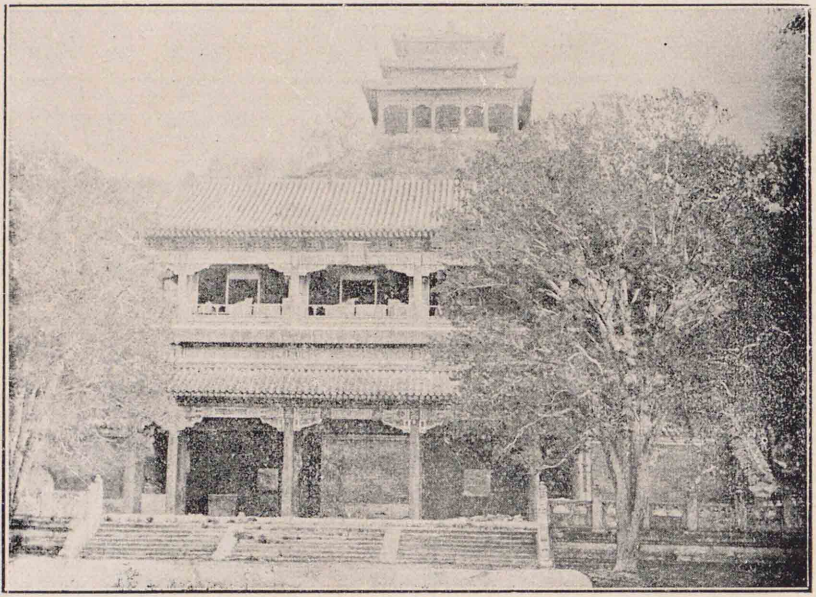
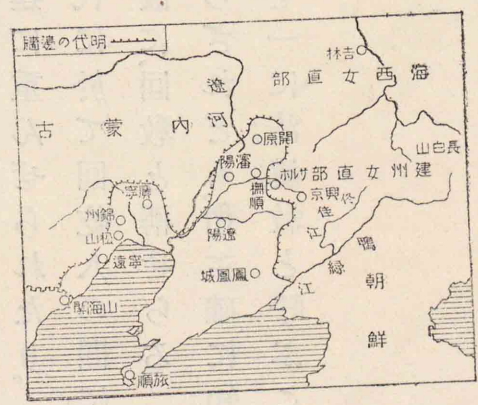
清朝勃興地
方圖

八旗兵

大金の興起 明の神宗の頃、奴爾哈赤といへるもの、滿洲の興京に起り、近隣の諸部族を征服して、一六一六年、國を大金と號す、後に所謂清の太祖これなり。太祖八種の旗を設け、部下の兵を各旗に分屬せしめたり、これを滿洲八旗兵といひ、建國に與かつて大功を建てき。

神宗大兵を送りて大金を伐

1 太祖太宗
2 清帝略案の一
3 世祖
4 聖祖
5 世宗
6 高宗



景の山煤

(三中東、100-101)

煤山は北京宮城の背後に在り、萬歲山ともいひ、又景山ともいふ。明の崇禎帝、闖賊李自成に攻められ、山上の一亭に走りて自ら縊れ死しぬ。上圖の上方に見ゆる三重屋根の建物は、帝の自ら縊れたる小亭にして、下圖は、山上より南望せる北京の遠景なり。帝が、南に皇城を望んで、遙に叫喚の聲を聞き、悲憤の涙を吞んで死を決したる當時を想へば人をして紙上なほ鬼哭を聽くの思ひあらしむ。

1 今の滿洲奉天省撫順の東
薩爾滸山の戦
朝鮮征服
清の國號

闖賊李自成

薩爾滸の古戰場
山麓に見ゆる小亭の中に戦跡あり今存す

清の北京占領

たせられたれど、薩爾滸山の戦に大敗し、太祖は進んで瀋陽奉天に都せり。その子太宗は、西は内蒙古を降し、南は二たび朝鮮を討つて之れを従へ、又烈しく明を攻めけるが、其の間、(寛永十三年徳川家光の時)六三六年、國號を改めて清と稱せり。

明の滅亡 その頃、明の亂政甚しく、

盜賊群がり起れるが中に、李自成闖賊とも

ふは勢最も強く、(正保元年徳川家光の時)一六四四年、遂に北京

に亂入し、明の毅宗崇禎帝は、城中なる煤

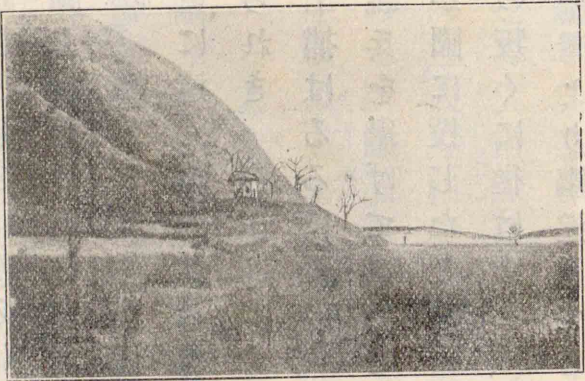
山のほとりにて哀れなる最期を遂げ

たり。時に清の太宗既に死し、その子

世祖順治帝立ち、伯父睿親王之れを輔け

て明を攻め居たるが、明將吳三桂の降

を容れ、兵を合せて李自成一を破り、同年



明末の三王

明の滅亡
(二十帝二百九十四年)

鄭成功と臺灣

鄭氏と我國

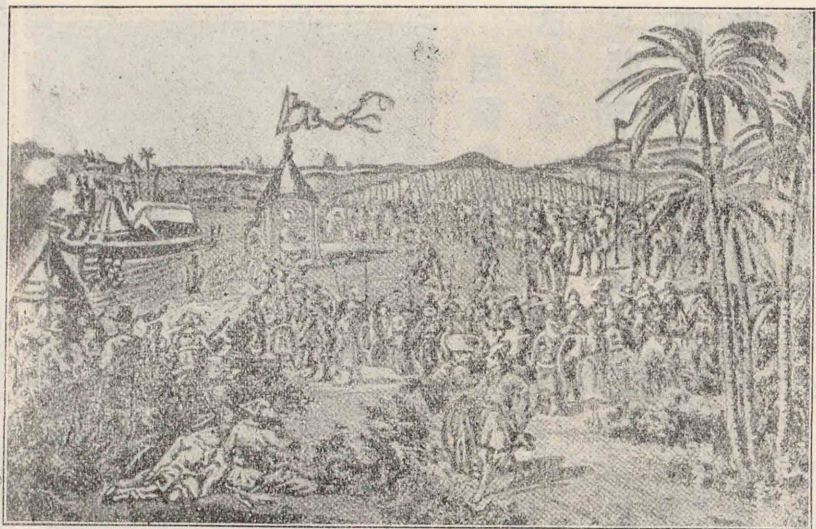
都を北京に遷して、支那平定の業を進めむとしき。然るに明の皇族福王帝弘光南京に於て恢復を圖り、史可法カフこれを輔けて清軍を防ぎたれど、事成らず、唐王帝隆武福州に立ちて又敗れ、鄭芝龍テイシヨウ叛きて清に降り、桂王帝永曆更に遠く南方に起りたれど、追はれて緬甸ミヤンマーに入り、遂に捕へられき。三王相次で清に抗すること十八年、(寛文元年徳川家綱の時)一六六一年、桂王捕はるるに至りて、明朝全く亡びぬ。この間、魯王も別に義兵を擧げて成功せず、朱之瑜シュノユ字ハの如きは、恨を吞んで我が國に投じたり。

臺灣平定 鄭芝龍の子鄭成功テイセイコウは、父の叛くに從はずして、明の恢復を圖り、(寛文元年徳川家綱の時)一六六一年、和蘭人を臺灣より驅逐してここに據れり。成功の母は吾が平戸の人なりしかば、鄭氏の一族は我が國を懐かしみて、數々救援を求めたり。鄭成功の子鄭經テイケイは、次に述ぶる三藩の大亂に乗じ、清朝を苦めむと

清の臺灣征服

和蘭人鄭成功に降服する圖

三藩



して志を得ず、その子に至り、(天和三年徳川綱吉の時)一六八三年、清軍に攻められて降服し、臺灣は清の有となれり。
清の一統 吳三桂清に降りて大功を建て、雲南王に封ぜられ、他の降將二人も、福建と廣東とに封ぜらる、所謂三藩是れなり。清の世祖の子聖祖帝康熙は、三藩の強大なるを患ひ、これを除かむと圖りしかば、吳三桂愕き、他の二藩と結びて大亂を起しぬ。(天和元年徳川綱吉の時)清軍苦戦して漸く叛徒を破り、一六八一年、平定の功を

大亂の結果

清の聖祖の像



奏するを得たり。この大亂は、一時は清朝を危うするかと恠まれたれど、亂平らぎて後、清朝は南方の大患を除き、却つて支那の統一を完うするに至れり。

第二章 清の盛世(上)

噶爾丹

1 回教信者多
故に住めるが
方を回部と
いふ
2 外蒙古の中
部にあり

蒙古天山地方の征服 聖祖の代に、準噶爾天山の酋長噶爾丹は、蒙古を侵し、回部の天山を併せ、西藏を脅し、進んで清の北邊に迫らむとするに至りしかば、聖祖親征して、一六九六年、大にこれを昭莫多に破り、後に高宗乾隆の代に至り、準噶

準噶爾平定
回部平定

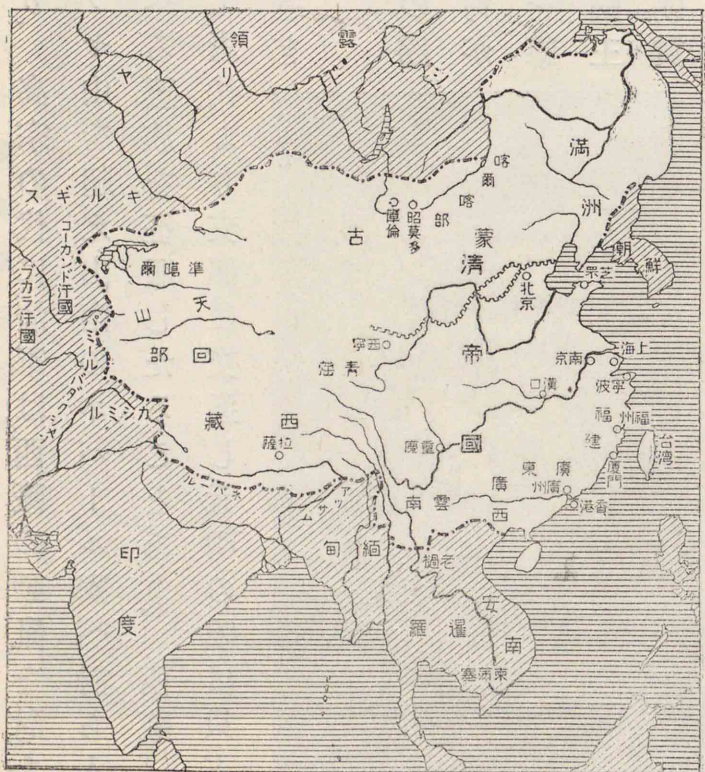
清の最大版

駐藏大臣

爾の地、皆清の有となれり。回部も一旦聖祖に救はれ、後に高宗に叛きて平らげられき。かくて一七五九年の頃、外蒙古並に天山地方、悉く清の領土となりぬ。

西藏の服屬

西藏も、準噶爾人に侵されたるを、聖祖に救はれ、聖祖の次の世宗雍正の時に、駐藏大臣を西藏の都拉薩に置き、その



廓爾喀征伐

國を治めしめたり。高宗の代に、清軍は、西藏の動亂を討ちたる際、遠くヒマラヤ山を超え、山南のネパール國へ討ち入りて廓爾喀といへる蠻族を征服したることあり。西藏は、唐代の吐蕃にして、唐代より支那に交通し、元明の頃は、只支那の屬地たるに過ぎざりしなり。

緬甸・暹羅・安南の歸

服 高宗の時、緬甸が雲南を侵したるを撃ち退け、後にその國王に封冊を授けて、朝貢せしめたり。高宗の時、又、暹羅の王家は

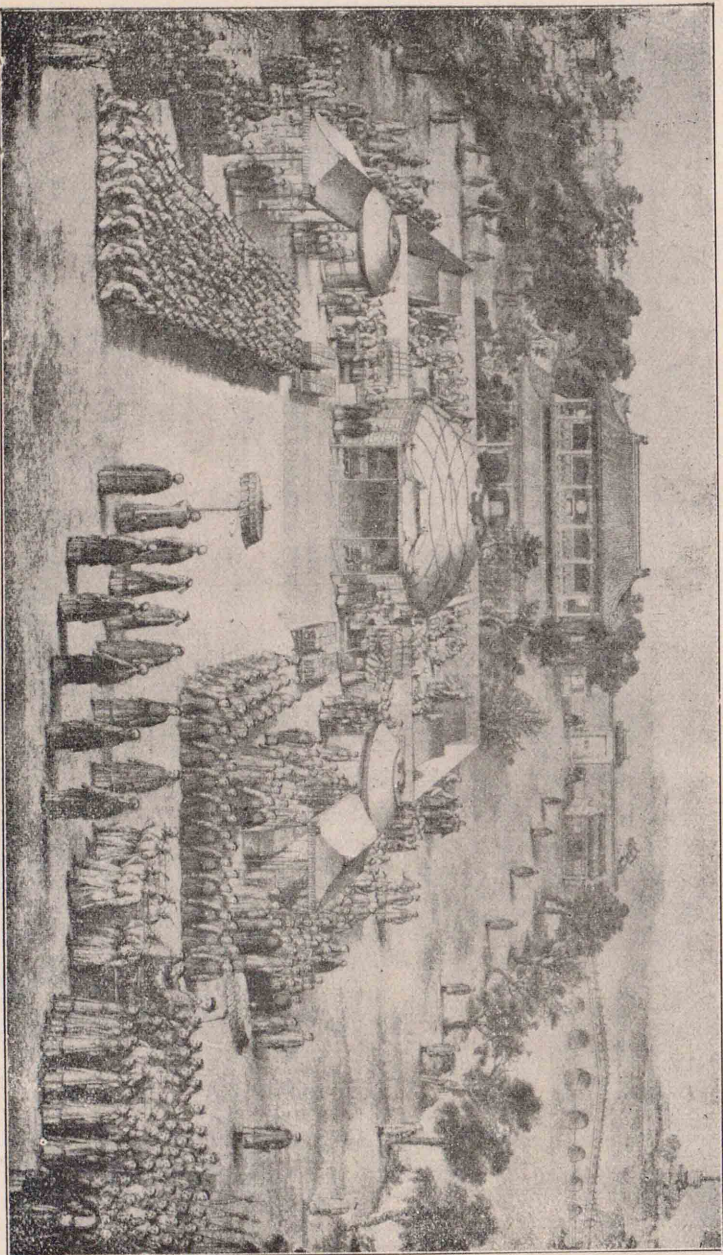
緬甸

清の高宗の像

暹羅



(三中東、一〇六一—一〇七)



圖るす應響を士將旋凱帝隆乾

乾隆帝の自ら誇れる十武功といふものあり。即ち準噶爾を平げ、金川(四川省の西邊)の蠻族を征服し、廓爾喀の降を受けたること各、二回、回部を定め、臺灣の叛を鎮め、緬甸安南を降したること各、一回なるを云ふ。その中、準噶爾兩度の遠征は、乾隆二〇年と同二二年とに在り。本圖は、北京宮城内の紫光閣に於て、帝が準噶爾征服凱旋の將士を饗應する處にして、圖の右下、輿に乗れるは乾隆帝なり。

安南

緬甸に滅ぼされしが、鄭昭テイセウといへるもの、國を再興し、その子鄭華に至りて、清の封冊を受く、是れ今の暹羅王家の祖なり。安南にては、明の中世以後、騷亂相次ぎ、爾たるが、清の高宗の代に、阮文惠ゴンケン自立して王となり、次いで清に歸服して封冊を受くるに至れり。

1 吾が徳川家光より家齊に至る間に相當す
聖祖、世宗、高宗三代の治世

文武の功業

清の強盛 聖祖、世宗、高宗三代約百三十年は、清朝極盛の世なり。聖祖は、在位六十一年、氣象の雄大なる、思慮の周密なる、信に稀世の英主と稱すべく、能く漢人を敬服せしめ、世宗は在位十三年に過ぎざりしも、滿洲人と漢人の融和を圖り、又財政に心を用ひ、高宗は、父祖の偉業を承けて之れを完うし、その在位六十年間は、盛運の頂上に達したるものなり。この三代の武功甚だ盛なると共に、學術文學も獎勵せられ、文武の功業相並んで清の盛世を飾りたり。

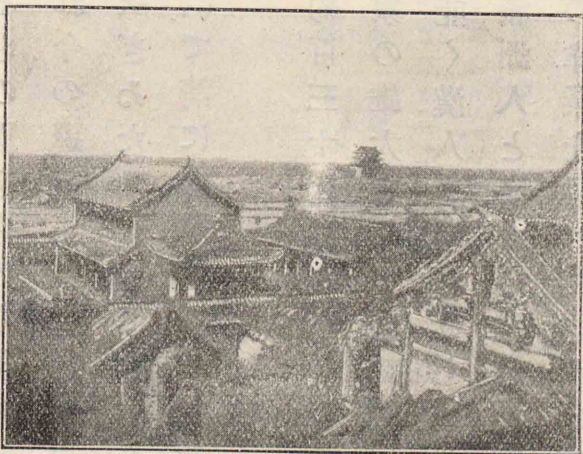
第二章 清の盛世(下)

學者の優待

文淵閣
文淵閣は四庫全書を蔵すに在りて天に在りて左方にありしなり

考證學の主旨

考證學及び文學 聖祖・世宗・高宗共に文事を嗜み、又漢人を懐くるがために、學者を優待して、四庫全書、四庫全書總目提要、古今圖書集成、佩文韻府、康熙字典など大部の書籍を編纂せしむ。されば名高き學者多く現はれたるが、その學風は、所謂考證學として、凡て空論を捨て、證據を古書に求めて立論するを旨としたり。この學風は、明末清初の間に兆し、顧炎武、其の首唱たりき。かくて學者



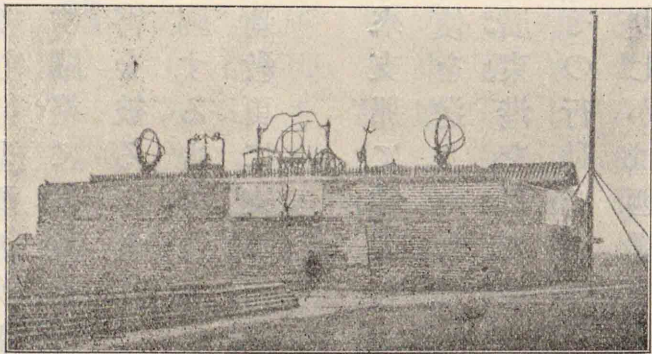
詩文戲曲小説

北京の天文臺
康熙帝の時西洋の宣教師の手に成れるもの

宣教師と學術

は、地理・歴史・文字・音韻など、各専門を分ちて、着實に研究を進め、前代の學者と態度を異にし、但官吏採用試験には、宋學なほ用ひられき。詩人には、王士禛、號は漁洋、吳偉業、號は梅村、文章家には侯方域、號は朝方、苞望溪、などあり、戯曲小説にも名著あれど、要するに文學に於ては、著るしき特色と謂ふべきものなし。

西洋學術とクリスト教 清朝に至りても、天主教の宣教師は、その學術を以て朝廷に重んぜられ、天文学・數學・測量術などに付て、支那の學術に影響を與へ、曆法修正、地圖製作、大砲製造などに於て貢獻する所多かりき。これに



クリスト新
教の傳來

由つて布教の便宜を得ること少からざりしに、聖祖の晩年頃より、宣教師は、支那の思想風習を顧みず、嚴格に説教を行ふこととなり、朝廷より忌み嫌はれて、迫害を被るに至れり。而して從來のクリスト教は、羅馬舊教に屬するものなりしに、高宗の次の仁宗嘉慶帝の代に、クリスト新教更に支那に傳來したり。

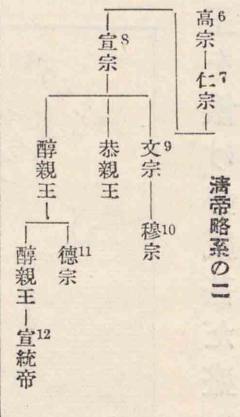
西洋諸國通
商の不成功

西洋諸國の通商 西洋諸國は、明末以來支那に往來したりしが、清朝とも通商を開かむとして、屢使を送りたれど、思はず成功を遂げざりき。清朝は、當時廣東港を以て唯一の貿易場となし、常に西洋人を輕蔑して、その行動を束縛し、西洋諸國と對等の國交を結ばむとせざりしかば、西洋諸國は之れを不満に思ひ、漸く感情の衝突を加ふるに至れり。清朝の衰運 かくて清朝は強盛を誇りたれど、高宗の

西洋人に對
する清朝の
輕蔑

高宗晩年の
動亂
1 支那本部の
西邊より蔓
れり
2 佛敎の主義
を口實とし
て愚民を集
め且つ清朝
に反抗する
態度を執れ

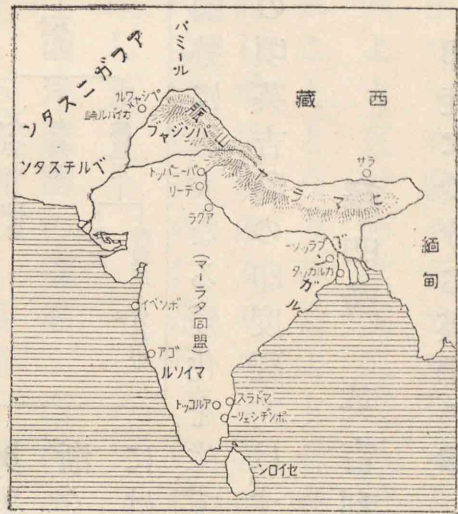
政治放縱に流れて、人心惰氣を生じ、國內の秩序壞るるに至り、帝の晩年には、回教徒、苗族などの動亂起れるが中に、白蓮教徒の大亂は、次の仁宗の代に至りて平定するまで九年を要し、湖北・四川・陝西・河南・甘肅五省の地は、痛ましき害毒を被りぬ。その間に、安南海賊の侵寇あり、暴徒宮城亂入の事變ありて、清朝漸く苦めり。又次の宣宗道光帝の代には、遂に英吉利と戦を交へ、清朝の國勢に重大なる變化を生ずるに至れり。而してこの交戦の頃、英吉利の印度經略は、すでに大半成功しおたるなり。



第四章 英吉利の印度經略

印度に於ける英佛の争 英吉利人は、和蘭人に壓倒せら

マドラス
 印度畧圖
 ポンヂシェ
 リー
 デュプレック
 ス
 英佛の激争
 クライヴ
 アル
 コット
 の戦



れて、南洋方面より退き、専ら印度経略に力を注がむと欲し、一六三九年、マドラスを土民より買ひ入れて、之を根據の地となしぬ。然るに佛蘭西人も、一六七四年、ポンヂシェリーに根據を設け、その國人デュプレックスは、南印度の諸土王を懐け、勢威甚だ盛にして、英人は次第に其の壓迫を被るに至れり。

この危機に方り、英國東印度商會の書記クライヴは、奮然起つて軍に投じ、一七五一年大に佛兵をアルコットに破りて、英人の勢威を回復したり。

年	事	月	日
一六二八
一六三〇
一六三二
一六三三
一六三四
一六三五
一六三六
一六三七
一六三八
一六三九
一六四〇
一六四一
一六四二
一六四三
一六四四
一六四五
一六四六
一六四七
一六四八
一六四九
一六五〇
一六五一
一六五二
一六五三
一六五四
一六五五
一六五六
一六五七
一六五八
一六五九
一六六〇
一六六一
一六六二
一六六三
一六六四
一六六五
一六六六
一六六七
一六六八
一六六九
一六七〇
一六七一
一六七二
一六七三
一六七四
一六七五
一六七六
一六七七
一六七八
一六七九
一七八〇
一七八一
一七八二
一七八三
一七八四
一七八五
一七八六
一七八七
一七八八
一八八九
一八九〇
一八九一
一八九二
一八九三
一八九四
一八九五
一八九六
一八九七
一八九八
一八九九
一九〇〇

英國の印度經營の方針を定めて勢力の擴張を固うし、ヘースチングスは、經營の方針を定めて勢力の擴張

年表 (其七)

年代	重要記事	時代	國史對照
一六〇〇 一七〇〇 (百年間)	一六〇〇 英國の東印度商會成る 一六一五 東林黨と反對黨の軋轢漸く著し 一六二六 奴爾哈赤(清の太祖)國を大金と號す (一六二六) 太祖 一六一九 和蘭人南洋のジャヴァ島にバタヴィア市を建つ 同 上 薩爾濟の戦 一六二一 明の宦官魏忠賢專横を始む 一六二三 和蘭人、南洋より英吉利人を逐ふ 一六二四 和蘭人、臺灣に據る 一六二五 太祖瀋陽(奉天)に都す (一六二七) 太宗 一六三六 太宗國號を清と改む 一六三七 太宗全く朝鮮を降す 一六三九 英人、マドラスを取る (一六四四) 世祖(順治帝) 一六四四 闖賊李自成北京を陥る、○清の世祖北京に都す 一六四五 清、辦髮令を下す 一六五〇 露西亞人黒龍江畔にアルバジン城を建つ (一六五八) アウランゼーブ帝 一七〇七 明亡ぶ 一六六一 鄭成功臺灣を取る 同 上 (一六六二) 聖祖(康熙帝) 一六七二 吳偉業卒す(歳六十三) (一六七三) 三藩の大亂 一六八一 葡萄牙人、印度産の鴉片を支那に輸入す 一六八〇 顧炎武卒す(歳七十) 一六八二 清軍臺灣を征服す 一六八三 清軍アルバジン城を陥る 一六八五 清軍アルバジン城を陥る 一六八九 ネルチンスク條約 一六九六 聖祖、噶爾丹を昭莫多に破る(蒙古清の有となる)	明 清	一六〇三 家康征夷大將軍に拜せらる 一六〇九 和蘭人と貿易を始む 一六二三 英吉利人と貿易を始む 一六二五 豊臣氏亡ぶ (一六三三) 家光將軍 (一六五〇) 家光將軍 一六二八 濱田彌兵衛臺灣に至り蘭人を擒す 一六三七 島原の亂 一六四八 鄭成功授を乞ふ 一六五一 由井正雪の亂 一六五九 朝人朱舜水歸化 同 上 朝鮮の孝宗卒す(在位十年)
一七〇一 一八〇〇 (百年間)	一七〇一 王士禎卒す(歳七十八) 一七二〇 西藏、清の領地に入る (一七二三) 世宗(雍正帝) (一七三五) 世宗(雍正帝) 一七二四 世宗クリスト教を嚴禁す 同 上 西藏に駐藏大臣を置く	清 戸 時	一七〇二 赤穂義士の復讐 (一七一六) 吉宗將軍(享保の世) 一七二〇 水戸大日本史を幕府に獻す 一七二五 新井白石卒す

(一一一三)

大でクワイツは北方に於ける英
 國の領地カルカタベンガ
 ールに於ける英領地

1 一八三五年まではベンガル總督と
いひそれよ
り後は印度
總督と稱せ
らる

2 初は宗教的
團體なりし
も後に有力
なる政治的
團體となれ
るものなり

總督ウエル
スリー

印度征服

莫臥兒帝國
の滅亡
(十五帝三百
三十二年)

英領印度の
成立

張を圖りしが、爾後の總督は、ヘースチングスの方針を守り、その間に統一の功を完うする爲め、幾多の激烈なる戦役を生じ、總督ウエルスリーは、殊に討伐に力を盡したり。かくて(寛政十一年徳川家齊の時)Wellesley 一七九九年には、精悍なるマイソール土王も屈服し、(文政元年徳川家齊の時)八年には、頑強なるマラータ同盟平らげられ、次で西北のパンジヤブ地方に據れるシク同盟も打ち破られて、(嘉永三年、ベリー渡來より三年)印度は殆ど皆英國に征服せられたり。

英領印度帝國の成立

(安政四年、ベリー渡來より四年後)

一八五七年、印度に土兵の大亂起

り、一年餘を経て平らげられしが、莫臥兒帝もこの亂に加はりしたため、帝位を廢せられ、莫臥兒帝國ここに亡びぬ。この時に至るまで、印度は、東印度商會の設置したる政廳によつて治められ、總督も商會より任命せられたりしが、土兵の大亂後、英國政府直接に印度を支配して、副王を置くこととな

り、從て東印度商會は廢止せられ、(安政五年)一八五八年、英國女王ヴィクトリアは自ら印度を統治する旨を宣言したり。

第五章 清國と英佛の紛紜並に長髮賊の大亂(上)

鴉片問題

(天保五年徳川家齊の時)

一八三四年以後、英國政府は、監督官を清國の

英國の支那
貿易獎勵

鴉片貿易と
清國の損害

林則徐の英
斷

廣東港に遣はして、支那貿易の發展を圖らむとせり。その頃廣東に於ける英國の輸入品は、印度産の鴉片にして、その貿易頗る盛なりき。然るに清朝は、鴉片が人體に害を及ぼすのみならず、其の貿易のために清國の銀を失ふこと夥しきを憂へ、數、禁令を下したれども、其の効なし。宣宗(道光)に至り、林則徐に命じ、鴉片禁絶の手段を講ぜしむ。林則徐乃ち廣東港に至り、嚴命を發して、英國商人所有の鴉片全部を

英國通商禁止

沒收し、悉くこれを焼き、清朝も勢に乗じて英國の通商を禁ずるに至れり。

鴉片戦争と南京條約 英國これ

英清交戦

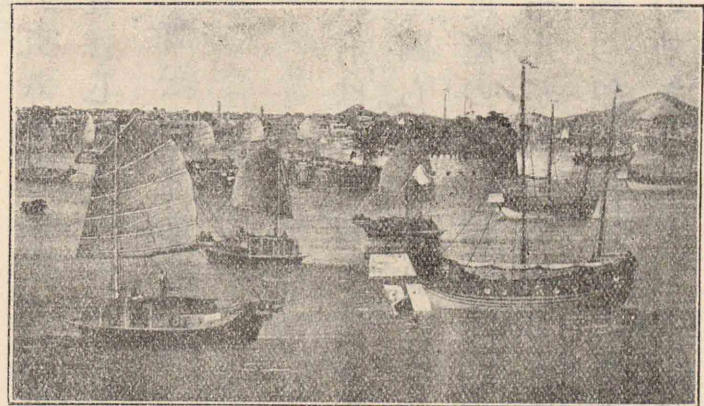
を聞きて大に怒り、損害の賠償を求めむとて戦を開き、清國沿岸の要地を脅す。清朝遂に屈し、一八四二年

南京條約

廣東港の右方河の中に木の茂りて見ゆるものは砲台なり

南京に於て和議を結び、(一)香港を割き、(二)償金二千一百万弗を拂ひ、(三)上海、寧波、厦門、福州、廣東の五港を開き、(四)爾今英國と對等の交を結ぶことを約せり。清朝がかねてより束縛を加へたる貿易を擴張し、かねてより輕蔑し、るたる西洋人と對等の

條約の結果 各國通商の擴張



鴉片戦争の影響と國內の動搖

交を結ばざるを得ざるに至りしは、實にこの條約に始れり。他の西洋諸國も、この機會を利用し、各、清朝と通商の條約を結びたり。

長髮賊の亂

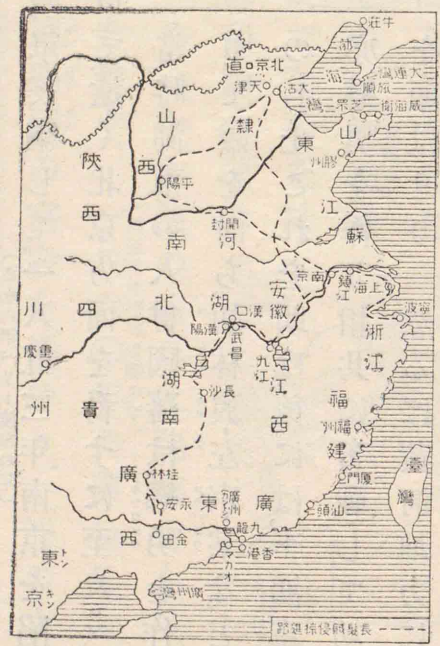
清朝は鴉片戦争に敗れて、大に漢人に對する威信を損し、從て國內の動搖を招くに至れり。時に洪秀全といへるもの、クリスト教を奉じ、神託に由りて支那の主

洪秀全と太平天國

長髮賊進軍 經路圖

1 頭の下部を剃髮し、頂上を長く延ばし、之を編み、て背後に垂る

となるなりと稱し、一八五〇年、廣西の金田村に於て亂を起し、太平天國といふ國號を建て、その徒滿洲人辮髮の俗を棄てて、皆髮を蓄へたるに由り、長髮賊と呼ばれた



南京陥落

曾國藩と郷勇
1 義勇兵のことなり

曾國藩の像

捻匪の蜂起



り。官軍數、打ち破られ、賊軍長驅して、(嘉永六年ベリイ渡來の年)一八五三年、南京を陥れて、ここに據り、別軍を以て、遠く北京方面を脅すに至れり。當時湖南の人曾國藩は、郷勇を作りて賊を討ち、胡林翼、左宗棠などの名士これを助け、後には、李鴻章亦郷勇を作り、相共に奮戦して功を顯はせり。然るに、黄河地方に捻匪といへる賊起りて長髮賊と通じ、清朝は又英佛二國と戦を開きたれば、大亂容易に鎮ま

第六章 清國と英佛の紛紜並に長髮賊の大亂(下)

アロー號事件

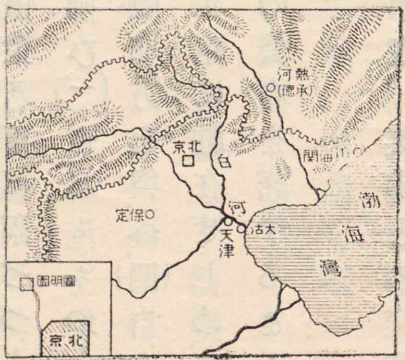
英佛の北清遠征

北京附近圖

天津條約

再度の開戦
1 北京の西北一里餘にあ

英佛の北清侵伐 南京條約結ばれて後も、清朝は、事につけて西洋人の權利を束縛せむと欲し、國交圓滿を缺きたりしが、(安政三年ベリイ渡來より三年後)一八五六年、廣東港に於て、清吏が英船アロー號に對して不意に臨檢を行ひ、英人に侮辱を與へ、廣西にては、佛人土民に殺されたることあり。英佛二國兵を聯ねて、清國の罪を問ひ、遠く渤海灣に入りて、大沽砲臺を陥れ、天津に至りしかば、(安政五年)清朝恐れ、(安政五年)一八五八年、天津に於て和約を結べり。翌年、英佛の使節は、和約の批准書交換のため北京に向へる途中、大沽の清兵に砲撃せられ、二國怒りて再び遠征の軍を發す。(萬延元年樺田事變の年)一八六〇年、英佛の兵大沽、天津を陥れ、北京に達し、圓明園の宮殿を焼けり。清の文

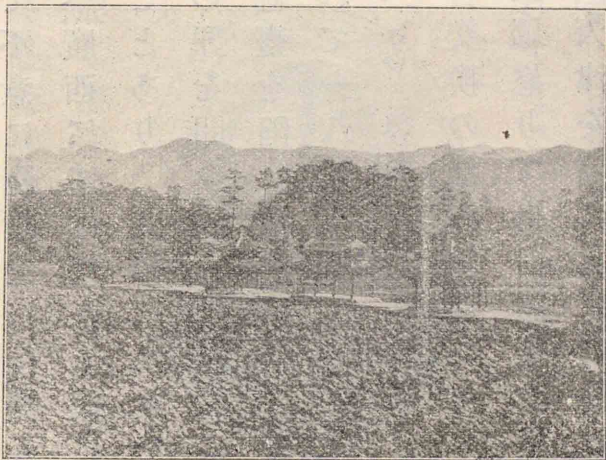


北京條約

熱河の景
北京の東北
約五十里

和議條件

1 香港の對岸



宗^{チン}威^カ豐^{キョウ} 熱河の離宮に逃れ恭親王^{キョウシン}の弟^{テイ}をして、和を講ぜしめ、同年北京條約成り、前の天津條約と合せて、清朝は、(一)償金八百萬兩^{テイル}づつを英佛二國に拂ひ、(二)貿易港を増し、(三)英國に九龍^{クイロウ}地方を與へ、(四)自今外國公使を北京に駐在せしめ、(五)クリスト教の公布を諾することとなりぬ。

長髮賊の平定 英佛との交戦

官軍の奮戦
常勝軍
2 西洋人の士

に由り、長髮賊の討伐進捗せず、その間、曾國藩は官軍の總指揮を執り、弟曾國荃^{セン}は専ら南京を攻め、左宗棠^{タウ}は浙江^{キウ}に、李鴻章^{カウ}は江蘇^{カウ}に戦ひるたるが、米國人ワルド^{ワルド}は、所謂常勝軍を作

官を以て支那兵を訓練せるものにして戦功多かりし故に常勝軍といはれたり

ゴルドンの像

賊の敗亡



りて官軍を助け、次で英國人ゴルドン^{Gordon}代りて之れを率ゐ、李鴻章に屬して大功を建てき。かくて賊勢次第に衰へ、一八六四年、洪秀全自殺し、官軍南京を陥れて賊の本據を覆へし、四年の後、北方の捻匪も亦平らぎぬ。長髮賊の大亂は實に十五年に亙り、その損害夥しく、清朝の財政頗る苦しみ、交通の要所に内地税關を設けて商品に課税するに至れり、この税を釐金^{シヤウ}といへり。

亂後の清朝 長髮賊の大亂は、主として曾國藩以下漢人

諸名士の力に由つて平らげられ、滿洲人の精力鈍れるを明かにせり。この亂中に、文宗熱河に死し、穆宗^{同治}立ちて未だ幼く、東太后と西太后との輔佐を受けて北京に還り、恭親

漢人の實力と滿洲人の衰退

1 文宗の后の生母
2 文宗の妾にして穆宗の

同治中興の
不成功
外國關係の
困難

王政を攝し西洋の文物を採りて國運の挽回を圖りたれど、遂に漢人の信賴をつなぐこと能はざりき。加ふるに、外交の關係益、困難となり、ことに露西亞は北に雄飛し、佛蘭西は南に活動して、各、直接の利害を清國に及ぼすに至れり。

第七章 露西亞の滿洲侵略

露西亞の東侵 露西亞は久しく蒙古の欽察汗國に隸屬

イワン第三
世の興起

せしが、モスコイMoscow大公イワン三世出づるに及び、欽察汗國

エルマク

の分裂せるに乘じ、一四八〇年これを覆へして獨立を恢復したり。その孫イワン第四世に至り、ドン河の流域に居り

（應仁亂後十四年）

しコサック部を征服したりしが、コサックの首長エルマクとい

へるもの、一五七九年衆を率ゐて、ウラル山Dnieperを踰え、山の東な

シベリヤ侵
略の端緒

るシベルの地を奪ひ、これをイワン第四世に奉りぬ。これ

1 シベルとい
ぶ地名に本
細亞の總名
となれるな
り

エルマク
の像



露人シベリヤ侵略の端緒に
して、實に清朝が將に興らむ
としたる頃のことなり。
ネルチンスク條約 此れ
より露國は、コサック兵を先驅

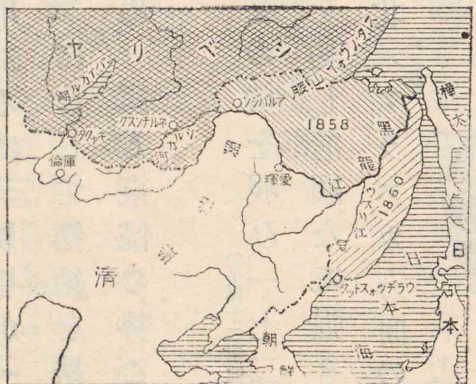
露人の東侵

アルバジン
城

滿洲境界圖

清露の衝突

として、連りにシベリヤを侵略し、ゆくゆく都城を建てて根據を固め、清の太宗の頃には、黒龍江畔を探り、清の世祖の代には、雅克薩を取りて、そこにアルバジン城を築き、次第に清國の領内を侵し、一六五二年、遂に清兵と衝突することなく、清の聖祖は、兵を送つてア



ネルチン
ス
ク
條約の内
容

ルバジン(元祿三年徳川綱吉の時)を昭れ、北滿洲の防備に心を用ふるに至りしが、一六八九年、清露の使臣ネルチンNeitchinスク尼布楚に會して條約を結び、外興安嶺を以て兩國の境界となしぬ。露人東侵の勢、これにて一旦挫けたり。

恰克圖條約

滿洲侵略 川吉宗の時 されど露國は絶えず侵略の機を覗ひ、一七二七年、清國と恰克圖條約を結びて通商を約し、清國なほ強きを憚かりて、暫くカムチャッカ半島より北米アラスカ方面の

拓殖に従事したり。然るに一八四七年、ムラヴィヨフが東シベリヤ

ムラヴィ
ヨフの像

總督となるに及び、再び東侵の歩

を進め、一八五八年には、清國が長髮賊の大亂、英佛の侵伐に苦めるに乗じて、愛瑯條約を結ばせ、一兵



愛瑯條約

イグナチ
エフ

北京條約

を損せず一金を費すことなくして、巧に黒龍江北の地を割き取りぬ。二年の後、露國使節イグナチエフは、黒龍江水路利用の談判を試むるため、北京に赴きたるに、會、英佛聯合軍の入城せむとするに逢ひ、清國と英佛の間を仲裁し、その報酬として、北京條約を結び、烏蘇里江東の地を獲たり。露國乃ち新領地の南邊にウラヂウストク港を開きて、太平洋方面に於ける活動の根據地となしぬ。

第八章 露西亞の中亞細亞侵略

伊犁事件

露國の中亞細亞侵略 露國はシベリヤ經略に次で、中亞細亞併呑の志あり。(享保二年徳川吉宗の時)一七一七年、露國は、先づ中亞細亞の強國たるキウフ汗國Khivaに遠征隊を送りて失敗し、(享保十九年徳川吉宗の時)一七三四年には、

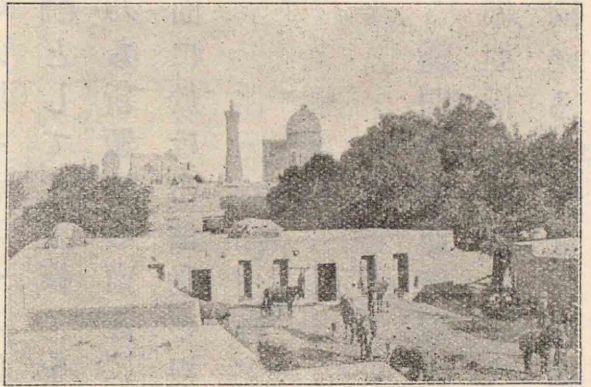
中亞遠征の
發端

汗は君主の
意にてキウフ
汗はキウフ
が王といふ
が如し

キルギスの

ブカラの景

ブカラ・キ
ヴ・二汗國
降伏
コ・カンド
汗國滅亡



中亞細亞平原を略し、なほ進んでアフガニスタンの國境を脅すに至れり。
Afghanistan

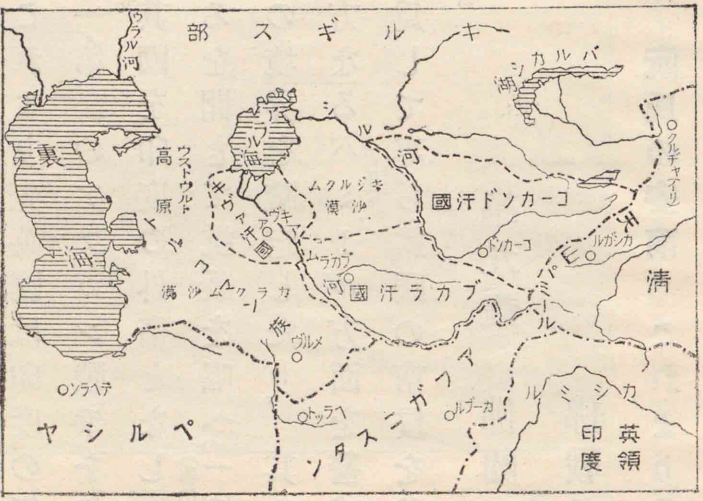
伊犁事件 露國がキルギス部を征服して、清國の伊犁と

天山地方回
教徒の亂
露國の伊犁
占領

中亞細亞略
圖

伊犁に關す
る條約

露西亞の一
部が伊犁に
當る一圓



境を接するに至りしより約そ
十八年の後、天山地方に回教徒
の叛亂起りしが、露國は國境地
方の安寧を保つを名として、一
(明治四年)
八十七一年、伊犁を占領したり。
其後、清國は叛亂を平らげて伊
犁の返還を求めたるに、露國應
ぜず、兩國の關係頗る切迫す。
李鴻章これを憂ひ、更に曾紀澤
會國藩を遣りて談判せしめ、兩
國互に讓歩し、一八八一年、コル
(明治十四年)
ゴス河を界となし、清國より償金九百萬ルーブルを出して
局を結びぬ。
Khorgos

露國の南進

アフガニスタン方面の紛擾

パミール方面の紛擾
波斯問題

英露の衝突 伊犁事件落着と同年に、露國は中亞細亞併吞を完うし、更に南に向つてアフガニスタンの境上に迫る。これより先英國は印度の經營上、大に露國の南下を患ひ、第一第二のアフガン戦争を起し、アフガニスタンを威制して、其國を印度の外衛となしぬ。(明治二十年)されば英國は、露國の南に迫るを聞きて抗議を唱へ、一八八七年、アフガニスタンと露國の境界を議定したり。其の後英國は、アフガニスタンの東方なるパミール方面を警戒し、西方に於ては波斯の後援を爲して、専ら露國の南侵を防ぐに心を用ひたり。

第九章 佛蘭西の印度支那經略 清

佛戰爭

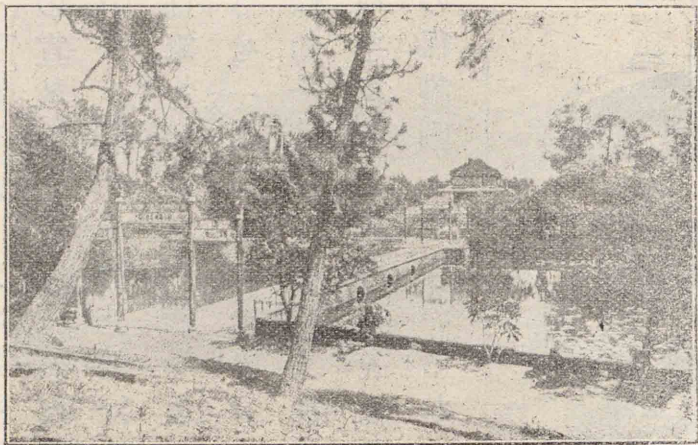
阮氏の安南 これより先、清の高宗の代に、阮文惠自立し

阮福映

ピニール

安南王の陵墓

安南の一統



て安南王となれる時、もとの國王の甥阮福映は、暹羅に逃れて、頻に恢復を圖りしかど、事成らざりき。よつて更に佛國宣教師ピニールの勧めに従ひ、事成る後は、地を割き通商を許さむことを約して、佛國の援兵を借ることとなりしが、その約行はれず、只ピニールの誘ひ來れる少數の佛國士官の援助を受け、遂に阮文惠の子孫を滅ぼして、安南を一統し、(享和二年徳川家齊の時)一八〇二年、位に上り、清朝より、越南國王に封ぜられたり。

佛國の侵略 然るに、阮福映の

第一佛安戦

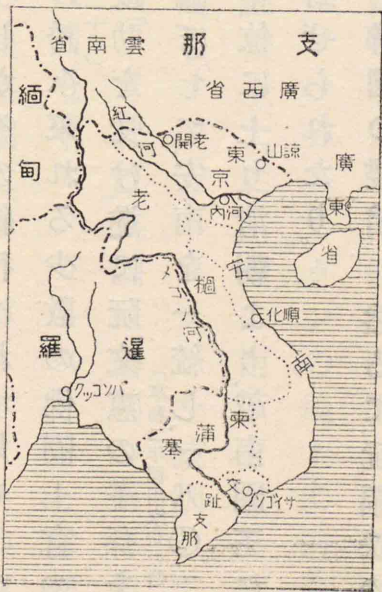
印度支那略

サイゴン條約

第二佛安戦

黒旗兵

子孫は、舊恩を忘れ、屢佛國の宣教師を殺したれば、佛帝ナポレオン三世は、遠征軍を出して安南を攻めさせ、一八六二年サイゴン條約を結び、交趾支那の地を得、次で東蒲塞をもその保護國となす。これより安南の君臣は、深く佛人を惡む



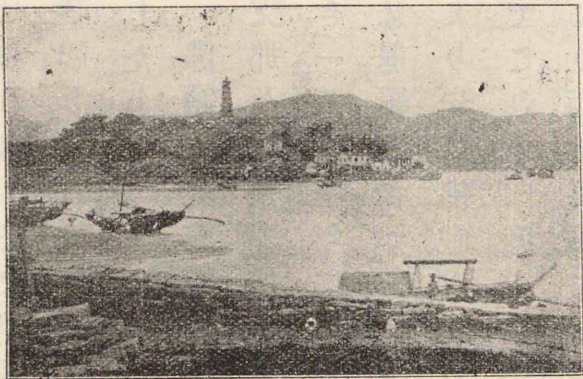
に至りしが、一八八二年佛國が恣に東京の河内に駐兵するや、安南王は、長髮賊の殘黨劉永福の率ゐたる黒旗兵を招きて、佛兵を撃たせられたれど、

順化條約

福州灣の

清佛戦争の由來

翌年、國都順化府陥るに及びて、順化條約を結び、自今佛國の保護を受け、東京地方の統治をば、事實上佛人の手に委ぬることとなれり。



清佛戦争 されど安南は、もと清朝の封冊を受けたるが故に、清朝は佛國の處置に快からず、大兵を送りて劉永福を援く。ただ李鴻章は、佛國との交戦を避けむと欲して、苦心する所ありしも事成らず、一八八四年、清佛の兵諒山に衝突して、兩國の平和破れたり。ここに於て、佛國海軍提督クールベールは、福州灣に於て清の艦隊を滅ぼしたれども、陸兵は、諒山に於て清軍に撃退

天津條約

佛領印度支那の成立

1 初めサイゴンに居り一八〇二年より河内に移れり

英國の緬甸併呑暹羅の國勢

せられ、加ふるに、佛國の外交方針一變したりしかば、講和の議起り、(明治十八年)一八八五年天津條約成りて、清國は全く安南を放棄したり。

佛領印度支那と暹羅

(明治二十年)一八八七年、佛國は、東京・安南交趾

支那及び東蒲塞を合せて、佛領印度支那と名づけ、總督を置き、(明治二十六年)一八九三年に至りて、老撾をも保護國としてこれに加へ、又暹羅を脅かして、其のメコン河東の領土を奪へり。是れより先、清佛戦争終れる翌年に、英國は全く緬甸を併呑し、次でこれを印度の一州に加へたるが、かくて暹羅は、東は佛國より、西は英國より威壓を受け、英佛の勢力平均によつて僅に國を保つに過ぎざる姿となれり。

第十章 清國に對する諸強國の壓迫

明治維新後の我國と朝鮮

朝鮮に關する日清交渉

日清戦争

日清韓の關係

朝鮮は久しく清國に服屬し、我國が明治

維新の後修好を求めたるを拒みて、無禮を加へたれば、一八

(明治九年)

七六年、我國は其の罪を問ひ、修好を諾せしめ、朝鮮の獨立國

たることを公認したり。(明治十五年)されど我國の疎んぜらるること

舊の如く、一八八二年、一八八四年の京城事變に於て、朝鮮に

對する清國の威壓重きを加へたれば、我國は清國に交渉し、

今後協同して朝鮮の事變を處置せむことを約せり。(明治二十七年)然る

に一八九四年、朝鮮に東學黨の亂起るに方り、清國は朝鮮の

獨立を無視し、且つ我れと協同するを拒み、恣に大兵を送り

たれば、我國も獨力事に當るに決し、次で朝鮮國王の依頼に

因て清兵を撃退す。是れより日清戦争開け、我國大勝して

馬關條約を結ぶに至れり。時に露國は、獨佛と協同して、わ

れに干涉を加へ、我國は忍んで之を容れ、條約に由つて得た

清國衰弱の暴露

カシニイ條約

李鴻章の像

膠州灣事件

列強の清國に對する強請

る遼東半島を清國に還附したり。
日清戦後の清國 日清戦争に於て、清國は著るしく衰弱の實相を曝露するに至れり。露國は早くも是の機會を利(明治二十九年)用し、清國の財政に干涉する手段を廻らし、別に一八九六年、



倣ひ、突然旅順口を占領し、これと大連灣とを租借したり。次で英國は威海衛を、佛國は廣東省の廣州灣を租借し、諸國相争ふて利益擴張を努めつつありき。(明治三十二年)一八九八年、北米合

駐清公使カシニイをして李鴻章と密約を結ばしめ、滿洲に於ける鐵道敷設の權を得たり。然るに(明治三十年)一八八七年、獨逸は無法にも山東の膠州灣を占領し、後に強て之れを租借したるが、露西亞もこれに



景の山壽萬(下) 像の后太西(上)

(三中東、一三四―一三五)

上圖は、西太后(圖の中央)七十歳の時の肖像にして、圖の右端に立てるは、光緒帝の皇后(即ち後の隆裕皇太后)なり。西太后は慈禧皇太后ともいはれ、清の文宗(咸豐帝)の妃にして、穆宗(同治帝)の生母なり。吾が明治四十一年、西太后は七十五歳を以て歿しぬ。
下圖は、西太后避暑の地として有名なる萬壽山、及びその側なる昆明池にして、山麓に頤和園の廣莊なる離宮あり、北京の西北約吾が一里餘に位す、萬壽山の東に近く圓明園あり。

米國の支那門戶開放の提案

1 日英露獨埃佛伊の七國

提案の不成

衆國は、西班牙と戦つて、フィリピン島を奪ひ、清國に對して、從來よりも密接の關係を生ずるに至りしが、列國の競争激しきを患ひ、支那の門戶開放を唱へ、互に平等の權利に由りて、平和の中に經濟上の發展を圖らむことを列國に提議し、皆其の賛同を得たり。是れ一八九九年末頃のことなりしが、間もなく北清事變起り、米國の提案をして無効に歸せしめたり。

變法自強

清の德宗光緒帝

は、國事日々に非なるを慨きた

るが、會、廣東に康有爲カウイウキといへる志士あり、我國の明治維新に鑒みて、制度を革め國力を強うすること即ち所謂變法自強の說を唱へ、數、上奏して時事を論じ、北京に赴きて同志を集む。德宗其の上書を觀て大に意を強うし、一八九八年六月、(明治三十一年)康有爲、梁啓超リョウキョウソウなどの志士を用ひ、連りに改革の詔を發し、西

康有爲の變法自強策

德宗の改革

光緒帝の像



變法自強の失敗

加へたれば、變法自強の計も不幸にして潰滅に歸しぬ。

北清事變 清朝の守舊派勝てるに伴ひ、西洋人を惡むの

義和團の暴動

念を長じたるが、(明治三十二年)一八九九年の春頃より、山東に義和團の暴

動起り、西洋人排斥を唱へて不穩の形勢を示す。朝廷に於

ても、端郡王は、排外主義を懷きて、權勢を振ひ、密に義和團を

嗾かしぬ。義和團は、一旦袁世凱に鎮らめられたれど、轉じて直

義和團といへる一種の武術を習ひ、これに熱する時は、彈を避け、刃を防ぐことを信ずるものと信

じクリスト教徒並に西洋人に對して、惡念を抱きたる團體なり

清朝の宣戰

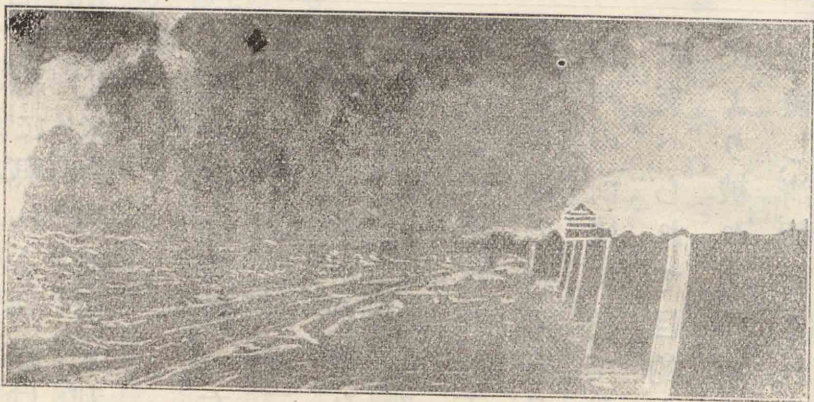
北京公使館所在地の兵火

北清事變の際

列國の出兵

北京陷落

和約成立



(明治三十三年) 隸地方に入り、一九〇〇年五月頃、暴

動の形勢重大となり、清兵もこれに

加はりて、北京の外國公使館を圍み、

六月、清朝は、公然列國に向つて開戰

を布告するに至れり。是に於て、我

國並に列國の聯合軍は、北京の急を

救はむとて、天津より西進し、八月、北

京を陥れて公使館を救ひたり。時

に清帝及び西太后は、西に逃れて西

安に居り、慶親王、李鴻章をして和を

講ぜしめたるが、列國各、利害を異に

したるに由り、談判捗らず、(明治三十四年)一九〇一

年九月に至りて、和約初て定まりぬ。

和約關係の列國

和約に與れる列國は、我國を初とし、英吉利・佛蘭西・獨逸・露西亞・北美合衆國・伊太利・白耳義・西班牙・和蘭・奧地利・すべて十一國なりき。

和約條件

1 吾が六億二千萬圓ほとに相當し利息を合せて吾が九億五千萬圓ほとに當る

露國の野心

事變後の清國 右の和約に由りて、清國は、端郡王以下の元兇を處罰し、今後二箇年兵器彈藥を輸入せず、列國へ償金四億五千萬兩を拂ひ、北京より東海岸に至る間に列國の守備隊を駐屯せしむることを諾し、至大の苦痛を忍ばざるを得ざるに至れり。而して、清國に對する列國の利害互に相異り、各、おのれの利益を圖らむとしたるが中に、露國は講和談判の前後に於て、數、密約を清國に迫り、我國と英・米二國とに支へられて、目的を達せざりしが、別に滿洲に於て清國官民より被れる損害を恢復するを名とし、兵を出して滿洲を占領し、清國はこれを如何ともすること能はざりき。是に

滿洲問題

日露の交戦

於て、我國は、東洋平和のために露國に忠告を與へしが、遂に聽かれざるに由り、意を決して戦を開き、大勝を博して露國の野心を挫けり。而してこの交戦の結果は、また清國の政變を促すに至りしなり。

第十一章 清朝の滅亡

清朝の憲政準備

北清事變に於て、清朝は列國の強壓を被り、自國の衰弱を覺ること切にして、西太后も態度を一變し、改進の主義を執るに至れり。日露の大戦起り、我國が連りに勝を占むるを觀て、清朝は、是れ我國が憲法政治を採りたるが故なりと考へ、おのれも憲政を行ひて國勢の恢復を圖り、漢人の不平を和らげむと欲し、一九〇六年、(明治三十九年)憲政準備の詔を發し、漢人の名士たる張之洞と袁世凱とを招きて軍機

清朝の自覺
日露戦役の結果に於て
察の清朝の觀
憲政準備の
詔
1 清朝最高の
官に於て政
治の實權を
執り人々に
限ら

憲法綱領發布
宣統帝即位

宣統帝の像
右方に立てるは帝にして左なるは父と弟とな

資政院開設

内閣の新制



大臣となし、憲政視察者を我國と英獨二國とへ遣はし、(明治四十一年)一九〇八年、憲政の綱領を發布したり。問もなく徳宗と西太后と相次で死し、宣統帝三歳にして立ち、父醇親王攝政となりぬ、次で袁世凱官を免ぜられ、(明治四十二年)一九〇九年、張之洞死したるが、將來の國會の基礎たるべき資政院は、翌一九〇一年を以て北京に開かれ、議員の求めに由り、清朝は正式の國會を開かむことを宣言し、(明治四十四年)一九一一年には、從來の中央官制を改めて、新に我國の制度に倣へる内閣を作りたり。革命黨の運動と動亂の發生 清の全盛の頃より、清朝に

一三合會最も名高し
孫文の活動

黎元洪の像

留學生と革命黨

鐵道國有策と民間の反對

武昌の變



反抗せむとする漢人の秘密結社ありしが、(明治二十五年)一八九二年、孫文は、興中會を立てて漢人復興の策を廻らし、近時に於ける革命黨活動の發端を爲せり。北清事變後、諸外國殊に我國に來れる清國留學生は、新知識を得るに從て清朝の政治を非難し、多く革命黨に加はりぬ。憲政準備始まりて後も、革命黨は、清朝を信用せずして、其の顛覆を企てたるが、(明治四十四年)一九一一年、清朝が盛宣懷の議を容れ、外債を起す爲に鐵道國有を令し、民間の非難盛に起り、人心騒然たるに及び、革命黨は之れを機として事を擧げたり。同年十月、武昌の軍隊は革命黨と通じ、黎元洪を擁して暴動を起し、その影響忽ち諸方に及びぬ。攝政醇親

袁世凱の入閣

革命政府

孫文の像

袁世凱と革命政府の交渉

講和開始
孫文と中華
民國臨時大
總統



王愕きて討伐の兵を發し、十一月、袁世凱を招きて内閣總理大臣に任じ、その手腕につて動亂の鎮定を希へり。

動亂の經過と清帝退位 時に革命黨は、上海に假政府を設け、革命の目的を宣明して外國人の同情を失はざらむと

し、次で南京を占領し、黃興ワウキウを推して、臨時に大元師の任に就かす。十二月、醇親王攝政を辭し、袁世凱實權を握り、立憲君主制を立てむことを革命黨に交渉したれども、革命黨は共和政

體を主張して意氣昂然たりき。次で上海に於て、正式の講和談判開かれたれど、その協定を遂げざる中に、革命政府は、英國より歸着せる孫文を立てて中華民國臨時大總統とな

(三 中 東、一 四 二 — 一 四 三)



式 告 奉 亡 滅 朝 清

民國元年(吾が明治四十五年)二月十二日、清の宣統帝位を退く。二月十五日、中華民國臨時大總統孫文は、南京城外なる明の太祖の孝陵に詣り、清朝滅亡の祭告式を行ふ。本圖は孫文の一行が孝陵に詣る途上の光景を示したるものにて、圖の中央なる乗馬の一團は即ち孫文の一行なり。この日軍隊の堵列するもの約一萬五千人なりしといふ。五色の新國旗の所々に懸れるを見よ。

1 黄紅藍白黒
の五色の旗
なり

講和成立

清朝滅亡
(十二帝二百
九十七年)

臨時大總統
袁世凱
の臨時憲法の
こと

し新に國旗を作り、一九一二年(即ち民國元年)正月、孫文南京に入りて、共和の宣誓を行ふ。袁世凱は、時勢の赴く所を察し、共和の已むを得ざる旨を宮中にほのめかし、皇太后以下皇族の多數は、遂に意を決して、清帝退位のことを諾したれば、袁世凱これを革命政府に通じ、南北の講和初て成立す。二月十二日、清の宣統帝^{七時}七歳に退位を宣言し、併せて共和政府完成に至るまで、臨時政府の組織を袁世凱に附託する旨を詔し、清朝ここに亡びたり。

第十一章 支那共和國

臨時共和政府と國會 同年三月、袁世凱は、北京に於て、共和の宣誓を爲し、内閣を作り、臨時約法を發布したり。四月、孫文は、正式に臨時大總統の職を袁世凱に譲り、南京の革命

¹支那各地方の代表者の集會
臨時共和政府成立

²之れと同時に參議院は消滅せり

第一次國會

國民黨

宋教仁暗殺

第二革命

政府は解散し、南京の參議院も北京に移りて、新に開院式を擧ぐ。かくて臨時共和政府成立を告げ、幾もなく、孫文・黃興は、北京に赴きて、袁世凱との交を温む。^(大正二年)翌一九一三年四月、最初の國會北京に開かれ、是れより大總統の選舉と共和國憲法の制定とに着手することとなりぬ。

第二革命及び大總統選舉 國會議員の中に、國民黨といへる一派ありて、袁世凱に服せざりしが、其の派の領袖の人たる宋教仁は、國會開會の十數日前、俄に暗殺せられたり。是に於て、袁世凱に對する反感熾となり、南方の人士大に憤激し、七月、李烈鈞先づ江西に於て討袁軍を擧げ、應ずる者諸方に起り、所謂第二革命勃發す。されど、袁世凱の武力強盛にして、段芝貴・張勳等の諸將善く戦ひ、約二月の中に騒亂平定せられ、孫文・黃興・岑春煊等海外に出奔せり。次で十月六

袁世凱の像

正式の大總統と列國の共和國承認



日、袁世凱は、國會の選舉に由りて、支那共和國の大總統^(任期五年)となり、列國の承認を受け、ここに正式の共和政府を建設するに至れり。十一月、袁世凱は、突然

修正約法

國民黨の解散を嚴命し、其の議員を捕へて國會を威壓し、次で特に中央政治會議を開き、前の臨時約法を修正せしめ、^(大正三年)一九一四年五月、之れを公布したるが、是の修正約法に由りて、大總統の權限は、從來のものに比して、頗る擴張せられたり。

外蒙古獨立
¹外蒙古に於ける喇嘛教の首長の尊稱
露蒙協約

蒙古問題及び西藏問題 清朝倒れむとするに方り、外蒙古の庫倫に居住せる活佛は、露西亞の後援を得て獨立を唱へ、内蒙古も亦漸く動搖を生ず。^(大正元年)一九一二年十一月、露西亞は、活佛の政府と露蒙協約を結びて、蒙古を保護國とする色

活佛の像



露支協約

を握り、實際は露西亞の經營に任することとなりぬ。(大正四年)

露支條約

西藏の獨立

蒙藏協約
1 前の九七頁
を見よ

一五年六月、露支條約更に成立し、前の露支協約を承認すると共に、外蒙古は支那領土の一部として自治を許され、支那政府は、之れに對して多少有利なる權限を獲得せり。西藏も亦獨立を圖りて、支那と戰を交へたるに、英吉利は之れを援けて、支那政府と交渉を開けり。(大正二年) 一九一三年一月、蒙藏協約成り、西藏の達賴喇嘛は、外蒙古の活佛と相結ぶに至りし

が、是れ實に、兩者の後援たる英露の密約に本づくものなりといふ。

勢力範圍の擴張

米國と淮水
1 揚子江の北
に在りて汎
濫を以て有
名なり

我國の對支
政策

支那本部に於ける列強の活動 支那本部に對する列強の活動も、亦深く注意すべきものあり、列強は資金を支那政府に貸して、或る利益を獲得するが中にも、鐵道敷設の事に關して、各自の勢力範圍を擴張せむことを圖れり。即ち英吉利は、揚子江流域に優勢を占めむと欲し、獨逸は、山東より西に向つて黄河平原に進まむとし、露西亞と佛蘭西とは、協力して、北部支那と西部支那とに横行せむことを企つ。北米合衆國が淮水流域の開拓を擔當したるが如きも、亦勢力扶植の一手段に外ならず。

日支交渉 我が國は、支那に於ける地歩を固うすると共に、深く支那と相親むは則ち東洋の平和を完うする所以な

膠州灣租借地占領

日支條約

日支親善

るを信じ、其の手段を盡すを怠らざりき。(大正三年) 一九一四年七月、歐羅巴に大戰起り、我が國も之れに聯關して、獨逸に宣戦し、十一月、攻めて膠州灣の獨逸租借地を占領したり。我が國は、是の際益、支那に於ける地歩を固うし、彼我の提携を全うする目的を以て、(大正四年) 一九一五年一月、支那政府に對して要求を提出し、六月、日支條約成立したり。その要領は、(一)支那政府は山東に於て都市を開放し、山東に關する將來の日獨協定を承認すべきこと、(二)旅順・大連南滿洲鐵道及び安奉鐵道を含むの租借期限を九十九年に延長し、南滿洲・東部内蒙古に於て我が國人の土地商租・居住自由を諾し、且つ都市を開放すること等これなり。

支那帝制問題と第三革命 袁世凱は、大總統となりて後、ひたすら權力の擴張を希ひ、其の爲す所殆ど專制君主に異

籌安會

帝制決定

蔡鐸の像

護國軍

帝制取消

袁世凱病歿



らざりき。其の腹心の徒は遂に籌安會を設けて類に帝制を鼓吹し、袁世凱も、民意に従ふなりと稱して、(大正四年) 一九一五年十

二月、帝位に即くべきことを宣言し、洪憲といふ年號を作るに至れり。然るに我が國及び英露佛伊の諸國が帝制延期を勸告したるのみならず、支那にても、袁世凱に快からずして帝制に反對する者多く、同月、蔡鐸、唐繼堯等は、雲南に護國軍を起して共和擁護を唱へ、應ずる者相次げり、所謂第三革命是れなり。袁世凱も勢の不可なるを察し、(大正五年) 一九一六年三月、遂に帝制を取消したれど、動亂なほ止まざるを觀て、大に心を苦しめ、幾ばくもなく病を得て歿しぬ。黎元洪代つて大總統

の職に就けり。

袁世凱歿後の動搖

黎元洪はもとの國會を再興し、共和

政治の改善を圖りしが、袁世凱の恩顧を受けたる官僚・軍人の一派は、國務總理段祺瑞を中心として勢力維持の計を廻らし、舊革命黨を中心として國會に勢力を有する民黨と相反目しつゝありき。



大總統黎元洪

段祺瑞の像

清朝復辟の失敗

(大正六年)
一九一七年、支那の歐洲大戰に参加するの可否に付きて、兩派大に相争ひ、同年六月、官僚・軍人派は、武力を以て黎元洪を脅かし、強て國會を解散せしめたるが、當時時局の調停を標榜したる張勳は、七月の初、突然もとの宣統帝をして帝位に復せしめたり。然るに清朝復辟に對する反抗の氣勢盛に

して、張勳は孤立無援の窮況に陥り、宣統帝また位を退くに至れり。

南北對立 復辟の變に、大總統黎元洪その職を棄て、復辟

失敗の後、馮國璋大總統の職を代理し、段祺瑞は國務總理として政治の實權を握れり。民黨並に之れと相結べる政客・軍人等は、北京政府に快からずして、別に南方に據りて廣東軍政府を建て、是れより南北對立の形勢となりぬ。段祺瑞は、我が國の後援を恃んで威權を弄するなりと疑はれて、漸く世人の反感を招き、從つて排日の風潮亦漸く盛とはなりぬ。(大正七年)
一九一八年十月、徐世昌新に大總統に選舉せられたりしが、南北の反目著るしきを憂ひ、一九一九年二月、上海に於て南北和平會議を開かしむることとなれり。
南北の混亂 然るに、南方派は深く段祺瑞を忌み、北方に

馮國璋の大總統代理

廣東軍政府

段祺瑞と我が國

大總統徐世昌

和平會議

段祺瑞に對する反感

1 馮氏は直隸省の人なれば之れを中派とす。直隸派といへり。2 段氏は安徽省の人なり其の一派を安徽派といへり。

和平會議の失敗

安徽派没落

南方派の分裂

孫文の新政

ワシントン會議

於ても馮國璋の直隸派と段祺瑞の安徽派と相悪しかりしが、會歐洲大戰に關する巴里講和會議に於て支那の主張容れられず、かくて内外の事情に刺激せられて、人心頗る動搖し、南北和平會議も遂に顧みられざるに至れり。(大正八年)一九一九年十二月、馮國璋歿して、段祺瑞の安徽派獨り強盛なりしが、世人の反感益烈しく、(大正九年)一九二〇年七月、安徽派は遂に直隸派と戦つて全敗に歸しぬ。當時、南方派の中にも内訌甚だしく、全く分裂に陥りしが、(大正十年)一九二一年四月、孫文は、廣東に於て新に民國政府を設け、自から大總統と稱し、其の他各地に於て獨立を企つる者あれども、北京政府能く之れを制壓する力なし。

東洋の時局 (大正十年)一九二一年十一月より (大正十一年)一九二二年二月に亘れるワシントン會議に於て、太平洋の平和を確保するた

日英同盟廢棄

吳佩孚の像

支那に關する條約並に決議案

奉直交戦

大總統黎元洪



め、日英米佛西國條約成立して、從來の日英同盟廢棄せられたるが、支那に關しても、支那の國權を恢復するための條約並に決議案の成立を見るに至れり。其の要旨は、支那をして國內の秩序を恢復せしめ、支那の國權を尊重すると共に、其の國力の伸張を援助せむとするに在り。然るに、支那の國情をほ不安を極め、(大正十一年)一九二二年四月には、直隸派の驍將吳佩孚と奉天派の頭領張作霖とが、勢力の争ひよりして互に戦を交ふるに至り、大總統徐世昌は、之れを制裁する能はずして職を退き、六月、黎元洪出でて大總統に就任したり。これより先、孫文も亦勢力擴張を圖りて北

年表 (其八)

年代	重	要	記	事	時代	國史對照
一八〇一 一八〇〇 (百年間)	一八〇二	阮氏安南を一統す			江	一八〇一 間宮林蔵の樺太探險
	一八二〇	鴉片を禁す			江	一八〇八 豆相の海防を嚴にす
	(一八二一)	宣宗(道光帝)			江	一八一〇 露人ゴローキンを捕ふ
	一八三八	露人アフガニスタンを覗ひ英人大に戒心す			江	一八二五 外國船打拂を令す
	一八三九	林則徐鴉片を燒く			江	一八二六 日本外史成る
	一八四二	南京條約			江	一八三七 大鹽平八郎の亂
	同上	第一アフガン戰爭			江	一八三八 天保改革始る
	一八四七	ムラヴィヨフ東シベリヤ總督となる			戸	一八四六 幕府初て外國事件を奏上す
	(一八五〇)	長鬘賊の大亂			戸	一八五三 ペリー浦賀に来る
	(一八六一)	文宗(咸豐帝)			時	
	(一八五六)	英佛の第一次北清侵伐			時	一八五九 安政の大亂
	一八五七	印度土兵の大亂			時	
	一八五八	愛理條約○英國、印度を直轄す			時	
	一八六〇	英佛の第二次北清侵伐○北京條約			時	
	(一八六二)	第一佛安戰爭			代	
	(一八七四)	穆宗(同治帝)			代	一八六三 薩長の外國船砲撃
	一八六八	露國アカラ汗國を降す			代	一八六四 元治の變
	一八七一	露國伊犁を占領す			同上	朝鮮の大院君攝政
	一八七二	曾國藩卒す(歳六十二)			同上	明治元年
	一八七三	露國キウワ汗國を降す			同上	廢藩置縣
	(一八七五)	德宗(光緒帝)			同上	臺灣征討
	一八七六	露國コーカンド汗國を滅ぼす			同上	千島樺太交換
	一八七七	英國女王ヴィクトリア印度女帝と稱す			同上	明治十年西南の役
	一八七九	第二アフガン戰爭			同上	
	一八八一	伊犁事件落着			同上	
	(一八八二)	第二佛安戰爭			同上	
	(一八八三)	第二佛安戰爭			同上	
	(一八八四)	清佛戰爭			同上	朝鮮事變(大院君)
	一八八五	左宗棠卒す(歳七十四)			同上	朝鮮事變(金玉均)
	一八八六	英國緬甸を併吞す			同上	天津條約
	一八八七	英露のアフガニスタン問題落着			同上	憲法發布
	同上	佛領印度支那成る			同上	國會開設

(本文終)

近世史綱要

近世史

滿洲人(清朝)の勃興より現代に至る。
吾が徳川時代の初より現代に至る。

清朝の勃興より其の滅亡吾が明治四十五年までを數ふれば、凡そ三百年間なり。この時代は、歐羅巴人の勢力東洋に擴められ、東洋の形勢に著るしき變動を生じたる時なり。これを分ちて左の四期とすべし。

1 清朝勃興時代 清の太祖太宗世祖三帝の代(即ち明の末世)凡そ四十五年間吾が徳川秀忠將軍の代より徳川綱將軍の代に至るにして、清全く明を滅ぼして、支那を一統したる時なり。明の中世頃より、歐羅巴人東漸の勢を示し、明末清初に至りては、その支那交通漸く頻繁となりたれば、この期間は、歐羅巴人支那交通時代とも稱すべし。クリスト教の宣教師が西洋の學術を傳へて、支那學術の進歩を促したるも、亦この期間の事なり。

2 清朝極盛時代 清の聖祖世宗高宗三帝の代凡そ百三十年間吾が徳川綱將軍の代より徳川家齊將軍の代に至るを謂ひ、清朝の勢力最も盛にして、歐羅巴人を輕蔑し、北滿洲に於ては露西亞の侵略を撃退するの力を有したりき。

3 西方擴張時代 清の仁宗以後、徳宗の代の中頃に至る約百年間吾が徳川家齊將軍の代より明治二十年にして、清朝は英國との鴉片戦争に由りて、先づ弱を外國に示し、次で長髮賊の大亂に苦しみ、その間、英佛二國に破られ、露西亞に北滿洲を奪はれ、これより外國關係次第に困難となり、更に佛國と戦を交へたり。長髮賊の亂後、清朝は國力の恢復を圖りたれど、その効なく、着々歐羅巴人の壓迫を感ずるに至れり。英國が印度併呑の志を遂げたるも、亦この期間のことなり。

4 清朝衰亡時代 清の徳宗の代の中頃より、現代に至る約二十年間吾が明治二十七年

近世史綱要

近世史

滿洲人(清朝)の勃興より現代に至る。
吾が徳川時代の初より現代に至る。

清朝の勃興より其の滅亡吾が明治四十五年までを數ふれば、凡そ三百年間なり。この時代は、歐羅巴人の勢力東洋に擴められ、東洋の形勢に著るしき變動を生じたる時なり。これを分ちて左の四期とすべし。

1 清朝勃興時代 清の太祖太宗世祖三帝の代(即ち明の末世)凡そ四十五年間吾が徳川將軍の代より徳川家綱將軍の代に至るにして、清全く明を滅ぼして、支那を一統したる時なり。明の中世頃より、歐羅巴人東漸の勢を示し、明末清初に至りては、その支那交通漸く頻繁

となりたれば、この期間は、歐羅巴人支那交通時代とも稱すべし。クリスト教の宣教師が西洋の學術を傳へて、支那學術の進歩を促したるも、亦この期間の事なり。

2 清朝極盛時代 清の聖祖世宗高宗三帝の代凡そ百三十年間吾が徳川家綱將軍の代より徳川家齊將軍の代に至るを謂ひ、清朝の勢力最も盛にして、歐羅巴人を輕蔑し、北滿洲に於ては露西亞の侵略を擊退するの力を有したりき。

3 西方擴張時代 清の仁宗以後、徳宗の代の中頃に至る約百年間吾が徳川家齊將軍の代より明治二十七年に至るにして、清朝は英國との鴉片戦争に由りて、先づ弱を外國に示し、次で長髮賊の大亂に苦しみ、その間、英佛二國に破られ、露西亞に北滿洲を奪はれ、これより外國關係次第に困難となり、更に佛國と戦を交へたり。長髮賊の亂後、清朝は國力の恢復を圖りたれど、その効なく、着々歐羅巴人の壓迫を感ずるに至れり。英國が印度併呑の志を遂げたるも、亦この期間のことなり。

4 清朝衰亡時代 清の徳宗の代の中頃より、現代に至る約二十年間吾が明治二十七年にして、この期の初に、日清戦争起り、その結果、清の國力大に衰へたること明かとなり、西洋諸國は、これに乗じて、利權を支那にひろめむことを圖り、北清事變に於て、更に清國を苦しめ、遂に日露戦争を誘起したり。次で清朝は、憲法政治を行ひて、國勢恢復を圖らむとせしも、果さずして、漢人の革命起るに會ひ、遂に亡びて、支那共和國(中華民國)之れに代りぬ吾が明治四十五年。この期間に於て、我が國の實力普く世界に認められ、我が國は、東洋平和を保つ主動者たる位置に立つこととなれり。

近世史綱要

近世史

滿洲人清朝の衰微より現代に至る
 吾が徳川時代の初より現代に至る

清朝の勃興より其の没亡に至るまでを叙すれば凡そ三百年間なり。この時代は歐羅巴人の勢力東洋に廣められ東洋の形勢に著るしき變動を生じたる也なり。これを分ちて左の兩期とすべし。

一 清朝勃興時代 清の太祖太宗世祖三帝の代即ち明の末葉凡そ四十五年間
 二 清朝衰微時代 清の太祖太宗世祖三帝の代即ち明の末葉凡そ四十五年間
 中世頃より歐羅巴人東洋の勢力を示し明末清初に至りてはその支那交通漸く頻繁となりたればこの期間に歐羅巴人支那交通時代とも稱すべし。クリスト教の宣教師が西洋の學問を傳へて支那學術の進歩を促したるも亦この期間の事なり。清朝極盛時代 清の康熙乾隆嘉慶三帝の代凡そ五十年間

大正二年十月二十七日印刷
 大正四年九月二十一日印刷
 大正六年十二月二十五日印刷
 大正八年十二月二十五日印刷
 大正十年十二月二十五日印刷
 大正十二年十二月二十五日印刷
 大正三年十月三十日發行
 大正四年九月二十三日發行
 大正六年十二月二十三日發行
 大正八年十二月二十三日發行
 大正十年十二月二十三日發行
 大正十二年十二月二十三日發行

定價金七拾參錢
 大正十三年度臨時
 定價金壹圓三拾一錢

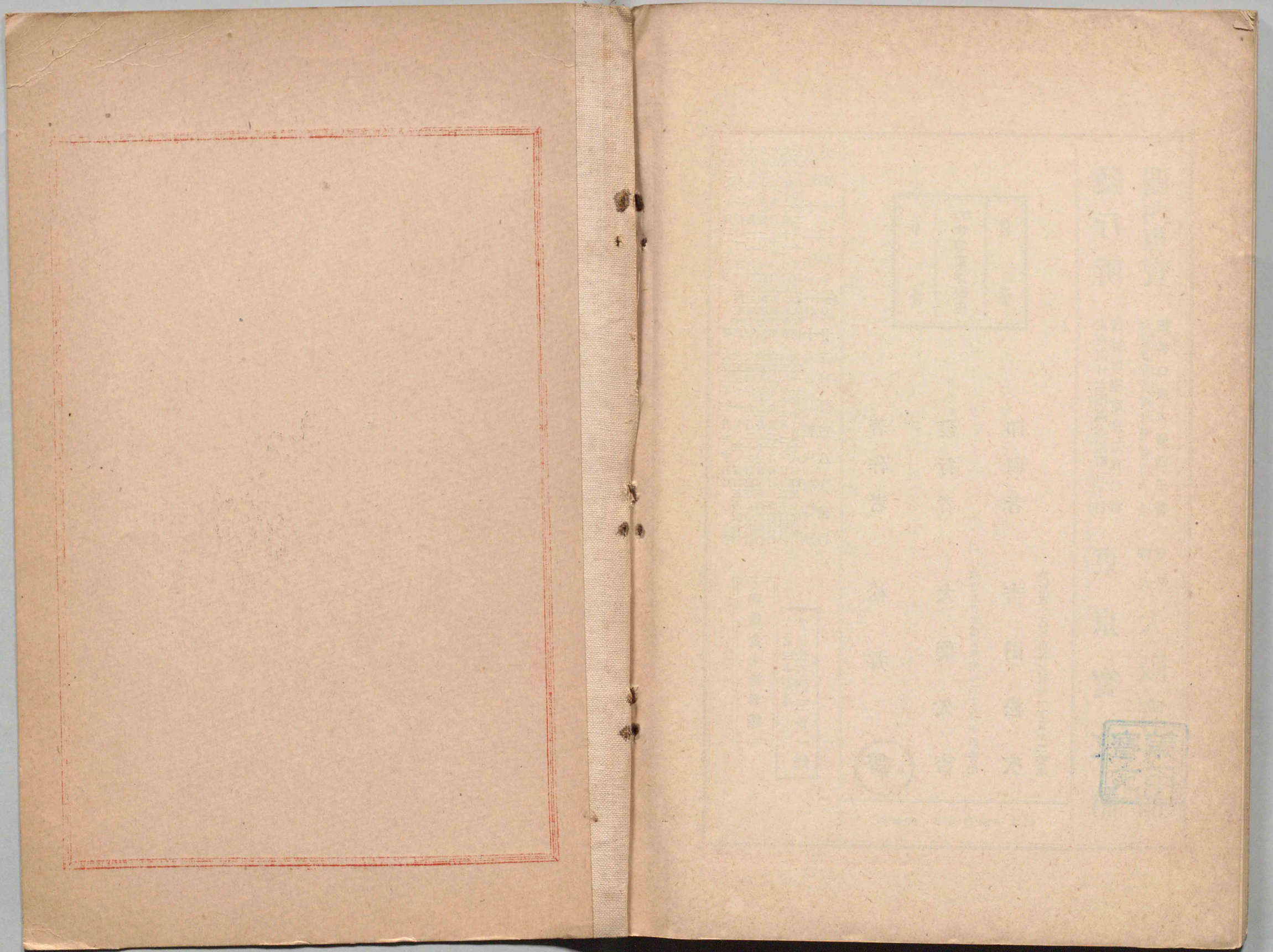
不詳
 訂中等東洋歴史
 複製

著者 松井 等
 發行者 大葉久吉
 印刷者 吉田松次
 東京市日本橋區本銀町三丁目十四番地
 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

發行所 關西專賣

東京市日本橋區本銀町三丁目
 振替口座東京二八〇番
 大阪市西區阿波堀通四丁目
 振替口座大阪四三番

東京寶文館
 株式會社 大阪寶文館





広島大学図書

2000089441



庫

4

41